

501  
133



始







復

活

トルストイ著  
中嶋清譯

大正  
10 8 25  
内交





## はし が き

トルストイの「復活」、名のみ高いが就いて讀むに好い本がないと云はれてゐる。既に露西亞の原書が時の政府の愚劣を干渉の爲めに滅茶々々になつてゐるとすれば、さうならない前に他國語に譯されたものを探ふ外はない。その中では獨逸譯が一等信をおくに足りると云ふ。

それで私の此譯は伯林のクロオプウス版のものに依り、なほレクラム物と英のモオド譯とを參考した。獨譯の中でもラファエル・レエンフェルト(Raphael Lowenfeld)のが一等勝れてゐる筈と思ふが、遺憾ながら手に入らなかつた。

モオドの英譯に比べると、レクラムもクロオプウスも非常に簡潔である。そして其簡潔振りには、二書共に殆ど同じであるから、據り所が同一である事も分る。簡潔は勿論粗略ではない。私一個の考へではもつと簡潔でもいいと思つてゐる。

翻譯は成るべく分り易くなければならぬ事は云ふ迄もないが、さればとて西洋人の生活を餘りにひどく我國振りに書き直してみせることを私は好まない。況んや世話に碎けたとでも云つたやうな戯作者口調の陸に隠れて、無理解を補強して行かうとするやうな態度をや。カヂェウシヤに對するネクリユッドフの言葉でも、私は我國の藝娼妓に對する「旦那」の用語とはしなかつた。これはたゞ一例である。



固有名詞の發音を此譯で我國に今迄廣く用ひられてゐたそれと多少異にしてゐる中で、主人公 Neehjudow (英書で Nehindof) をネクリユウドフとしたのが或は少し目に著くかも知れないから一言すると、我が五十音中波行のフだけは、他のハヒホが皆ハを子音としてゐるに拘らず昔から唯一のfuである以上、ネフリユウドフと發音するからには是非共 Nehindof 又は Newjudow でなければならぬ。f や w や v でない限りは何うしてもフと發音す可きでない。ch をクと發音するのはクリスト、クリスマス等の例で見ても誰も怪しまない、キリストとしてさへ變でない。即ち Neehjudow (英の Nehindof) はネクリユウドフが最も近くもあり正しくもあるのである。

それにしても新しい發音を表示する新しい假字の必要は事毎に痛切に感ぜられる、必ずしも外國の固有名詞の爲めのみでない。そして其爲めには尙ほの事我國在來の假字の發音を正しくして行かなければならない。

譯者

---

|     |    |
|-----|----|
| 第一編 | 三  |
| 第二編 | 三九 |
| 第三編 | 六九 |

---



復活

レオトルストイ著  
中島清譯



その時マテロ、イエスに來りて云ひけるは、主よ、幾度まで我が兄弟の我に罪を犯すを赦すべきか。七度までか？——イエス彼に云ひけるは、汝に七度とは云はじ、七度を七十倍せよ。(馬太傳第一八章第二二節)

なんぢ兄弟の目にある塵を見て、己が目にある梁木を知らざるは何ぞや。(馬太傳第七章第三節)

汝等のうち罪なき者まづ彼を石にて撃つべし。(約翰傳第八章第七節)

弟子は其師にまさらず、されど全備したる弟子は其師の如くなるべし。(路加傳第六章第四〇節)

# 第一編

霽雨たる一局所に幾十萬となく寄り集つた人間が、自分達の群めき合つてゐる大地をどんなに害ひ破る可く骨を折らうとも、何も其處に生える事の出來ないやうにどんなに石を敷きつめやうとも、崩え出る草をどんなに其都度熱心に引き抜かうとも、どんなに石炭の煙を空中に漲らさうとも、どんなに樹木を伐り倒しあらゆる鳥獸を狩り立てやうとも、——春は矢つ張り春であつた。都會に於てもさうなのであつた。

暖い日の光を受けて、草は再び芽ぐんで來た、引き抜かれなかつた處には何處にも緑々と生ひ立つて來た、アウルワアルに沿うた芝地にばかりでなく、敷詰められた石の間にさへ萌えて來た。樺や白楊やクロカンバは其の瑞々しい匂ひの好い若葉を展べ擴げた。ふくらんだ菩提樹の芽は勢よく開いた、鴉だの雀だの鳩だのは春の空氣の中に巢を營み、蠅などは日の光に暖まつた壁やら扉やらにぶんぶん飛び遊ぶのであつた。草木も鳥類も昆蟲も子供も皆嬉々として悦んでゐるのであつた。然るに大きくなつた人間のみは、自分をも他をも苦しめたり悲しませたりする事をやめないものである。彼等にとつて神聖であり大切であるものはさ



ういふ春の朝ではなかつた、あらゆる生物に恵み與へられて平和と共同と愛とに一致する壯麗な神の世界ではなかつた、——彼等に取つて神聖であり大切であるのは、たゞ他を支配する計畫そのみであつた。

だから今や或る地方監獄の書記室でも、すべてのものに恵まれてゐる春の空氣などが神聖でもなければ大切でもなく、其處で神聖であり大切であるのは番號をつけて頭文字を印刷した指令書であつた。それは前晩そこに到着したものであつて、其の内容は、今日即ち四月二十八日の午前九時に、かねて其監獄に繋がれてゐた女二名男一名の豫審囚徒三名を護送出廷せしむ可しと云ふのであつた。なほ又その女囚二名中の一名は特に重大な犯人として別に引き分けて護送するやうにとの指令であつた。

さういふ指令の結果として看守長は四月二十八日の朝八時頃、女囚檻の惡臭鼻を突く生温い廊下に入つた。その後に従いて行つたのは陰氣臭い顔をして霜の置いた髪のはほけ立つた女であつた。袖口にレエスのついた短い上衣を着て、縁を青くした帯を締めてゐた。それは女看守なのであつた。

「マスロオワが呼び出されますのですか？」と女看守は看守長にたづねた、そして看守長とともに、其の廊下にある或る檻房の戸口に來た。看守長は錠を開いた。がちゃがちゃと錠

前の音がして、その檻房の戸が開かれると、内から尙ほ一段と鼻を衝く惡臭が、ぶんと出て來た。

「マスロオワ、出廷だ、」と看守長は怒鳴り込んだ、そして又戸を締めて待つた。

監獄内にも、風が市中へ吹き送る爽快な清新な春の空氣は流れて來てゐた、けれども廊下には息を窒らせるやうな空氣が、一ぱいで、その上タアルの臭氣と物の腐る臭ひとが強く、其處に入つて來る者は直ぐむかむかど氣持が悪くなるのであつた。その女看守でさへ、さういふ惡氣に慣れてゐる女看守でさへ、今外から入つて來たのでさうであつた、直ぐと氣力も何も失くしてしまつて、頭もふらふらした。

檻房の内にはせかせかと急がしさうな氣はひがした、女の聲も響いた、跣足の蹙音も聞えた。

「さつさとしないかツ、マスロオワ！」と看守長は戸口を又一寸あけて怒鳴り込んだ。

二分間許りも経つたかと思ふと、中肉中脊の胸の張つた若い女が一人急ぎ足に戸口から出て來た、そして敏速く身をかはして看守長の傍に立つた。彼女は露西亞ですべての囚人が監獄内でも又西比利亞へ送られる途中でも着る鼠色の長い獄衣をつけ、その下に白い短衣と同じく白い上衣を着てゐた。足には麻の靴足袋の上に獄屋の靴を穿き、頭に巻いてゐる白布の



下からは如何にも故意とらしく黒い縮れ毛が少し覗いてゐた。女の全體の顔色は長らく獄に繋がれてゐた者の顔によく見られる一種異様な蒼白な色合ひで、害の馬鈴薯の芽を思ひ出させるものであつた。彼女の小さい両手も、獄衣の大きい襟の間から見えてゐるむつちりと丸い頸も、矢張り同様な白さであつた。光澤のない蒼白い顔の中で、ただ幾らか出てゐる目だけは際立つて生き生きと濃い黒い色に輝いて居り、そして其一方のは少し藪睨みであつた。彼女の動作は少しも悪びれずし、やんし、やんしてゐるので、丸味を持つて張つてゐる胸は尙ほ更前へ出るものであつた。廊下に出ると彼女は頭を幾らか片方に傾げながらも屹と看守長の顔を見て、尙ほ夫れからの命令を待つて立つてゐた。はや看守長が再び戸口を閉めようとする時、その時内から又胡麻鹽頭の一人の老婆の蒼白い陰氣臭い皺苦茶な顔がひよいと出た。老婆は其處に出た女と何やら話し出さうとした、が看守長は扉を押しつけたので、老婆の頭は直ぐ又引き込んだ。檻房の内では或る女の笑ひ聲が聞えた。マスロオワも微笑して、其の扉の上に格子がついて小さく開いてゐる窓の方へ身を振り向けた。老婆は内から其の窓に鼻と寄りそつて嘎れ聲を絞つて云つた。

「何より其事を氣をつけといでよ、なあ、餘計な口は利かねえが好えだぞ、一旦云うた通り飽くまで夫れで通すだよ、なあ、えゝかな、それで終えさ。」

「えゝ、えゝ、何とかお終ひになりさへすりやあねえ。それより悪い事にやあなりつこなしさ。」とマスロオワは答へた。

「無論の事だ、云ひ方を二様にする事は相成らんど、結末は一つしかありはしない。」と看守長は如何にも自分の役人らしい威嚴を味はひつゝ、又自分の機敏と警眼とに己惚れつつさう云つた。「さ、從いて來い、こらッ。」

扉の上の格子窓の内に来てゐた老婆の顔は消えた。マスロオワは看守長の後から從いて小刻みな急ぎ足で其廊下を向うへ行つた。三人は石段を下りて男囚部の前を通ると、其の内からは女囚部の臭氣よりも尙一層ひどい悪臭と騒々しさとが洩れて來た、そして其處の扉の上の格子窓には何れにも好奇心に満ちた目が幾つも並んで三人を見送るのであつた。それから三人は書記室に入ると、其處にははや兵士が二人銃を持つて立つてゐた。

そこに腰かけてゐた書記は煙草の煙の浸み込んだ一枚の紙片を兵士の一人に手渡ししつゝ、女囚を指して云つた。「さ、此の女を連れて行くんだ！」ニッセゴロッドの百姓で赤い痘痕顔の其の兵士は、受取つた紙片を袖口の折返しに差し込みながら、微笑を含んだ一瞥を女囚に投げつゝ、頬骨の突き出したチュウワッセン出の兵士たる今一人の仲間に目配せした。で二人の兵士は女囚を連れて正面の出入口の方へと下りて行つた。



正面出入口の門扉が開けられると、三人は其の閘を越えて、塀を圍らした監獄構内をはや出したのである、そして敷石道の真中を歩んで町を通つて行くのであつた。

馬車屋だの、商店員だの、料理女達だの、労働者、役人、さういふ種々な社會の人々が立止つて、好奇心を募らしつゝ女囚マスロオワを眺めやつた。中には頭を振りつゝ、「我々みたいに正當な道を踏んで行かないからあんなことになるんだ、」と思つたりする者もあつた。子供等は女強盗とか聞いてゐる其の女囚をびくびくしながら見やりつゝ、併し兵士二人に見張られてゐるから自分達に何も害をする事は出来ないのだと思つて辛と安心するのであつた。石炭賣りの一百姓はとある飲食店で茶を飲んでゐたが、前を通る女囚の方に寄つて来て、指で空に十字を切りつゝ彼女に「コペエケの錢を差出した。彼女は顔を赤めて頭を垂れ、何やら二言三言聞き取れない口を利いた。

自分が多くの視線を集めてゐる事を覺えつつ、垂れた頭は其の儘で彼女は自分を見てゐる誰彼の方へ横目を使つた、そして誰にも注意されてゐる自分を悦んだ。監獄内の惡臭を嗅いでゐた後とて、今清新な春の空氣を呼吸するのが彼女にも非常な幸福であつた。けれども歩行に慣れない上に粗末な獄屋靴を穿いてゐる足は、石ころにぶつかつたりするとそりや痛かつた。それで彼女は氣をつけて足元を見て、なるだけ軽く地を踏むやうに骨折つた。とある

粉屋の前を通りかゝると、一群の鳩が其家の前に誰からも追ひやられずに歩き廻つてゐたが、あはや彼女は其一羽を踏まうとした。その鳩は飛び立つて忙しげな羽搏きをして彼女の耳許を掠め去つたので、彼女は其の羽風に觸れた位であつた。彼女は嬌然微笑んだ、併し又自分の今の身の上を思つて深い深い嘆息をついた。

二

**百姓娘マスロオワ**の過去は極く有りふれた話に過ぎない。彼女は正式の良人を有たなかつた或る女奴隷の娘であつて、その女奴隷は又その母と一緒に或る貴婦人二人の所有地に牧畜婦として使はれてゐたのである。マスロオワの母たる牧畜婦は毎年子供を産んでゐた。そしてさういふ子供も土地の習慣通りに洗禮を施されてゐた、けれども母の望んで産んだ子ではなし、不必要な、仕事の邪魔になる厄介物として、母に養つて貰はないので、間もなく飢ゑて死んで許りゐた。

さうして五人の子供が死んだ。皆洗禮を受けたのである、けれども夫れきりで養はれないので、死ぬより外なかつた。六番目の子供は所定めず漂ひ歩く或るジブシイを父とした娘の子で、これも若し老貴婦人の一人が偶然その乳搾り場にやつて來なかつたらうものなら、矢



張り同じ運命を迎るのでつたに違ひないのである。その貴婦人はクリイムに何うも牛小屋の臭ひがしていけないと云つて牛小屋の婢どもに小言を云ひに來たのであつた。その時産婦は美しい健康な産兒を抱いて乳搾り場に寝てゐたのである。貴婦人はクリイムの事も云ひ、又産婦を乳搾り場に置いたりしてはいけないとも云つて、そして出て行かうとした時、ふいと其の産兒に目が止つたのである。見ると如何にも其子が可愛くなつた貴婦人は、自分が教母になつてやると云つて其子に洗禮を受けさせ、そして其子を可愛く思ふ心より、生みの母に錢と乳とを子の爲めに呉れた。そして生れた娘は命を取りとめたのである。そこで二人の老いた貴婦人は其娘を『命拾ひ』とも呼んでゐた。

その娘が三つの時、その母は病氣に罹つて歿した。祖母は孫娘を厄介視したので、二人の貴婦人が自分達の手許に引取つた。日の黒い其娘の子は非常に生々しく元氣よく生ひ立ち優しく可愛くなつて、貴婦人達を何やかと悦ばした。二人の中で年下のソフィア・イワノフナが娘に洗禮を受けさせた方であるが、これが尙ほと情け深く、年上のマリア・イワノフナは厳しい性質であつた。ソフィアが娘に着物も着せ讀み書きも教へ、又養ひ子にしようとしたが、姉のマリアは此娘は女中になければならない、良い傍女中になければならないと云つた。でマリアは嚴格であつた、自分の機嫌の悪い時は娘を罰する事もあり打つ事さへあつ

た。そんな具合に娘は二つの感化を受けて、半ば傍女中として半ば養ひ子となつて生ひ立つた。露西亞語では人の名に種々な語尾や附け足しを添へて、或は輕蔑を意味させたり親密を云ひ現はしたりする事がある。が娘は其の中間の附け足しを添へて呼ばれた。突慥食なカトカでなく、さればと云つて親しみのあるカティンカでなく、その間に位するカテウシヤであつた。彼女は縫ひ仕事もし、室の掃除もし、神壇の聖者の像を炭酸石灰で磨きもし、珈琲の粉を挽きもし、珈琲を立てもし、上等な布は洗ひもし、又時々本などを讀んで聞かせる役もつとめた。

結婚を申し込んで來る者も幾人もあつた、けれども其邊の下層社會の男の中から夫を持つたら彼女の一生は嘸みじめなものになりさうに思はれて、彼女には唯一人として氣に入らなかつた。殊に彼女は上流の贅澤な生活に慣れきつてゐたのである。

そんな風にして彼女は十六の年まで育つた。

彼女が十六の時、貴婦人の甥で若い富裕な大學生が貴婦人達を訪ねて來た事があつた。その大學生に其時カテウシヤは戀を覺えたのであつたが、それは大學生には無論のこと、自分にもさうだと承認してはゐなかつた。二年後に同じ其甥なる人は戰に行く途だと云つて又寄つた。そして四日が間泊つてゐる中にカテウシヤを邪道に誘ひ落した。出立の日に彼は



彼女に百ルウブルの銀行券を握らして、そして行つてしまつた。

其の時以來彼女には凡ての物事が無意義になつた、そしてたゞ彼女は自分の身に聽て起つて来る事になつてゐる恥を何うして免れたものかと夫れのみを案じ煩つた。その結果は彼女が單に貴婦人達に快々として仕へ、又何事も怠けたり粗略にしたりするやうになつたばかりでなく、時としては何故とも分らずに俄かに烈しく腹を立てて、あとでは自分乍ら悔ゆるやうな亂暴を云つたりするやうになつた、そして終ひには暇を貰つた。

二人の貴婦人も疾うに、さうなつた彼女を不快に思つてゐたので、わけなく暇をやつた。彼女はとある田舎警部の家に傍女中に行つた、が五十にもなる其警部が餘り彼女に執拗くしたので、三月以上は續かなかつた。或時その警部が思ひ切つて圖々しく迫ると、彼女は甚く怒つて、この馬鹿野郎の死に損ひ奴と毒づいて激しく其胸を突いて突き倒した。彼女は亂暴者として其家を逐はれた。

妊娠の期が近くなつたので、彼女は又新たな仕事にあり付くわけに行かなくなつた。ブラシデエの密賣をしてゐるとある田舎の後家の家に彼女は間借りをした。産は輕かつた。生れた男の子は育兒院に送られたが、抱いて行つた其婆の云ふ所では、其處に着いて間もなく死んだのである。

カテウシヤが其後家の家に間借りをしてゐる時、彼女は百二十七ルウブルを所持してゐた。その二十七ルウブルは彼女の自ら働いて得たもので、百ルウブルは誘惑した男が呉れたものであつた。其後家の家を出て行く時に、まだ六ルウブルだけ残つてゐた。彼女は錢の遣ひ途を心得て居ないので、幾らでも支拂つた、又請はれるまゝに何事にも出してやつた。後家は賄料と茶の代とに二ヶ月分として四十ルウブル、赤んぼを處置した料として二十五ルウブルを請求した上に、牝牛を一頭手に入れるからと云つて四十ルウブルを借りた。其他服の代とか飲食店に拂ふ分とかの雜費に二十ルウブル内外を出さねばならなかつたので、カテウシヤが産尊を出た時は、もはや一文の錢もなく、すぐ又仕事を見付け出さねばならなかつた。

ある山林官の家に棲み込める事になつた。その山林官は女房のある身分だつたが、前の田舎警部のやうにはや最初の日から彼女に執拗くするのであつた。それは直ぐ女房の目にも附いた。ある時女房はカテウシヤと自分の夫が一室に二人つきりで居るのを見て、カテウシヤに飛び付いて打つてかゝつた。カテウシヤも抵抗した、掴み合ひになつた、その結果カテウシヤは働いただけの給金も貰はずに追ひ出された。

それからカテウシヤは町に出て、伯母の家に厄介になつた。伯母の亭主は製本屋で、一



頃は景氣よく暮らしてゐたのだが、今は得意先きを失くして、手に入るものは残らず飲んでしまふのであつた。伯母は小さい洗濯業をやつてゐて、それで子供達をも放埒な亭主をも養つてゐるのであつた。

伯母はマスロオワに洗濯女になつて自分の家に居て呉れる氣はないかと相談した。が彼女は伯母の許で働いてゐる洗濯女達の惨めな生活を見て、自分もそれにならうとは思はなかつた。それで周旋屋に頼んで傍女中の口を探した。すると高等學校に行く二人の男の子のある或る貴婦人の家に口があつた。ところが一週間も経つと、はや口髭のある長男の高等學生は本などはそち除けにして絶間なくマスロオワに、いちやついた。母親は其罪をマスロオワに着せて暇をやつた。その次の口は直ぐとは見付からなかつたが、或日のこと、口入屋の鬮を跨ぐと、彼女は其處で裸の太つた兩腕に腕環を巻き指にも指環を幾つも嵌めてゐる貴婦人らしい一人に會つた。その婦人はマスロオワの身の上に就いて彼是と詳しく聞いた上で、自分の住所姓名を書いたものをマスロオワにやつて、自分を訪ねて来るようにと云つた。マスロオワは訪ねて行つた。

婦人は非常に親切に彼女をもてなし、菓子を出したり甘い葡萄酒を御馳走したりして、自分の家の小間使に手紙を持たして何處へか使にやつた。夕方になると胡麻鹽の髪に胡麻鹽の

髭を生やした丈の高い男がやつて來た。その男は直ぐマスロオワの傍に椅子を占めて冗談などを云ひ出した。主の婦人は其男を隣の室へ呼び入れた、そして「田舎出の初心なのよ」と云ふのがマスロオワに聞えた。それから其婦人はマスロオワを自分の傍へ呼んで、あの御方は文學者で錢を澤山持つてゐるから、あの御方の氣にさへ入れれば錢の事なんか屈托はないと云つて聞かした。そしてマスロオワは其文學者の氣に入つたので、彼は彼女に二十五ルウブルをやり、そして、ちよいちよい訪ねるからと約束した。その錢は右から左へと直ぐ洗濯業の伯母の許での賄費と新しい服と帽子とリボン類とに代つた。二三日経つて其文學者は彼女を呼びに使を出した。彼女は行つた。彼は又彼女に二十五ルウブルをやり、そして彼女自身の住居を持つようにと勧めた。

でマスロオワは其文學者に借りて貰つてゐる其住居で暮してゐる中に、同じ其一廓内に住んでゐる氣の軽い何處かの店員に惚れた。彼女は文學者に、ちか其事を云つて其店員と一緒に又別な小さな住居に引越した。店員は彼女と結婚をすると約束をしたのであつた、だが彼は或日彼女には何とも云はないでニシユニイノヴゴロッドへ行つてしまつた、それきり何の便りもしなかつた。疑ひもなく彼女は置き去りにされたのであつた。マスロオワは一人きりでも其住居に残つてゐようとした、けれどもさういふわけには行かなかつた。



彼女は又もや伯母の家に行つた。伯母は彼女の新しい服だの肩掛だの帽子だのを見て丁寧に取り扱ひ、再び彼女に洗濯女にならないかなどいふ相談はしなかつた。それはマスロオワの身分をもつと上流に位するものと見たのである。マスロオワも自分が洗濯女にならうかなるまいかなどといふ事はもはや考へてもみなかつた。彼女は青白い顔をした洗濯女たちが瘦せ細つた腕で店で稼いでゐる奴隷のやうな生活を痛々しげに見やつた。彼女等は夏も冬も窓を明け放して三十度の石鹼の蒸汽の中で洗つたり擦つたり皺を延したりしてゐた、その中には肺病になつてゐるのも二三人はあつた。マスロオワは自分もすんでの事にそんな監獄に入る所だつたと思つてぞつとした。

ずつと前から彼女は煙草を吸ふやうになつてゐたが、その頃は又酒類をも随分と飲みはじめた。それは彼女に取つてはたゞ美味いから誘惑になつたのみではなかつた、むしろ何よりも彼女の辛かつた過去を忘れさせる爲めに、そして、よくよく物を思はせないで彼女の持前の値打を強く思はせる爲めに役立つたからであつた。彼女は酒なしにはさうした氣にはなれないのであつた。飲まない時は彼女はいつもおぼおぼして恥しがつてばかりゐた。

彼女は今は二つに一つを選ばねばならない身であつた、傍女中といふ卑しい奉公人になつて例外なしに男達に尻を追ひ廻はされて日を暮すか、さもなければ法律で認められてゐる確

實な安定な水商賣に就くか、その孰れかを取らねばならなかつた。彼女を最初墮落させた男にも、氣輕な店員にも、又其他彼女を弄んだ總ての者に復讐をしてやるのだといふ思も、糊口の爲めといふ考以外に彼女の職業選擇の際の一動機となつた。けれども彼女の考を愈きめさしたのは、彼女の望み次第に天鵝絨の服でも絹の服でも肩や腕の露出しになる舞踏服でも自在に誂へて着る事の出来るといふ境涯であつた、鮮かに黄絹の服を着て裾には黒い天鵝絨の飾りを出して化粧をしてゐる自分を假に想像してみると、それだけで彼女は十分に引付けられるのであつた。それ以來マスロオワには幾百幾千の女の辿る彼の生涯が始まつたのである、その中の十が九までは悪病に罹り時ならぬ壊敗と死を齎して終るのである。朝も、晝過ぎまでも、夜半のあくどい酒浸りの歡樂の夢は續く。午後の三時か四時頃に汚い寢床より辛と疲れたからだを起す、曹達水を無暗と飲む、珈琲を飲む、室々をぶらぶら歩く、窓から外を眺める、それから髪を捲く、手や顔などを洗ふ、着物を合せたり揃へたりする、その事で女將と喧嘩もする、それから姿を鏡に映したり、白粉を塗つたり、けばけばしい絹の服を着たりする、燈光の眩しい廣間に出る、客が来る、樂が始まる、舞踏、菓子、葡萄酒、煙草……。

そんな風でマスロオワは七年の年月を送つた。八年目即ち彼女が二十六の時、ある事件が



搥もちあがつて、その事で彼女は監獄に送られた。そして人殺しや強盗の中に混まじつて六ヶ月間の獄内生活をした上で、今法廷に呼出されるのであつた。

三

長い歩行に疲れはてながらも二人の兵卒に護送されてマスロオワが裁判所へと行つてゐる時、丁度その時彼女を育ててやつたあの二人の貴婦人の甥、彼女の誘惑者たる公爵ドミトリイ・イワノキッチ・ネクリウドフは其の厚い贅澤を極めた弾條入りの毬毛やたひの寢臺の上に尙ほ安樂に寝そべつてゐた。そして其の胸部に見事な鬘のある和蘭亞麻の清潔な夜の襪衣したぎの襟の釦を外した。彼は巻煙草を一本吹かしながら、ぼんやり前を見て、昨日はどんな事があつたつけ、今日は何をしなければならぬかと考へてみた。

金持で名望のあるコルチャギン家で送つた前夜の事など思出しながら、彼は半ば喫つた巻草を棄てて、軽い溜息を洩らした。誰も知つてゐる通り彼は其家の娘と結婚する事になつてゐたのである。それから彼は銀製の巻草入れから尙ほ一本新しいのを抜き取らうとしたが、一寸躊躇して又別な何事かを考へた。きめ細かな白い兩足をすすると寢臺より差し伸べてスレップを突つかけると、彼は起き上つて絹の寢衣ねぎを肉付きのいゝ兩肩から打ちかけ、

重みのある早い歩調で取付きの衣裝部屋へ行つた、そこはコルン香水や髪油や薫物の香氣で一ぱいであつた。

先づ彼は幾つも金で填めた齒を上等の齒磨粉で磨き、芳香のある水で嗽うひをした。それから丁寧に方々を洗ひ、種々雑多の布きれで擦つた。芳香入りの石鹼で兩手を洗ふと、次ぎには小さいブラシで入念に長い爪の掃除をし、大きい洗面臺に向つて顔から太つた首筋へかけて洗つてから、濯水浴の準備の出来てゐる又隣の室に入つた。其處で彼は筋肉の引緊つた白いからだを冷水で洗ひ、摩擦用のタオルで拭き取つてから、綺麗に洗はれて髪斗をかけられた下衣を着け、鏡のやうに磨き立てられた靴を穿き、化粧臺について其の黒い縮れた小さい髭と前の方だけ少し薄くなつた髪とに手入れをした。

下衣も上衣も靴や靴下も襟飾も留針もカフス釦も、彼の調度や化粧品は一切は皆最上等の品ばかりであつた、質實じつみで、純で、確かで、そして高價なものばかりであつた。

彼は襟飾や留針の澤山ある中から手當り次第に何れかを取つて——と云ふのは今の彼には何等特別の興味をも起させない品でも、嘗ては彼に新奇であり珍らしく娛しく思はせたものである——それから一脚の椅子の上にもちやんと載せてある仕立上りではないが綺麗に手入れが届いて香をつけてある服を着て、そして長い食堂に行つた。食堂の板の間は前日三人



の男が磨き立てたもので、櫛の食器棚は非常に大きく、又同じ大きさの引伸ばし卓は、幅廣く踏張つた多くの脚を獅子の前足に彫みなしてあるのが、一種の儀式張つた仰々しい印象を與へるのであつた。その卓には大きな花形の文字のある糊を引いたばかりの綺麗な食卓布テブルクリムが掛けてあつて、香氣の高い珈琲の入つた銀製の珈琲壺や、銀の砂糖入や、出来立てのクリイムの入つたクリイム入れや、珈琲麵麩だの其他の焼菓子だのを盛つた籠などが載せてあつた。その横には着いた手紙やら新聞やら、「Le Revue des deux mondes」の「Le monde」の世界の新聞の刊號や  
二〇

ネクリュウドフは手紙を取らうとすると、丁度その時廊下に面した戸口から薄くなつた髪を隠す爲めのレエスの頭巾を被つて喪服を着た中年過ぎの女が、ひらりと入つて來た。それはつい此の程この住宅で歿なつたネクリュウドフの母親に傍女中として使はれてゐたアグラフェエナ・ベトロフナで、今はネクリュウドフの家事取締であつた。彼女はネクリュウドフの母に従いて幾度も外國に行き、都合十年許りも外國に暮したやうなわけで、立居振舞にも何となく貴婦人らしい調子があつた。子供の時からネクリュウドフの家で育つてゐるので、まだネクリュウドフがミテンカといふ赤んぼの名前で呼ばれてゐた時分からよくド・ミトリイを知つてゐるのであつた。

「お早うござります、ド・ミトリイ・イワノキッチ様。」

「お早う、アグラフェエナ・ベトロフナさん。何か變つた事でもありませんかね。」とネクリュウドフは冗談半分の調子で尋ねた。

「御手紙が參つて居りますの、奥方様からですか、それとも御姫様からですか、そこは分りませんが、御使ひの御女中さんがもう疾はつくに持つて來て私の所で待つてゐましたの。」と云つてアグラフェエナは意味ありげに微笑みながら其手紙を渡した。

「よろしい、直ぐ見ます。」と云つてネクリュウドフは受取つたが、アグラフェエナの微笑に氣付くと一寸厭な顔をした。

その微笑は其手紙がコルチアギンの娘の方から來たものであるといふ事を意味するもので、その娘と彼とが結婚する積りである事を信じてゐるアグラフェエナが其推測を微笑に漂はせたのがネクリュウドフには不愉快だつたのである。

「では私使の人に待つてゐるやうに云つておきますわ。」アグラフェエナは違つた處に置いてあつた小さいブラシを取つて、さう云ひ乍ら別な場所に置き、そして出て行つた。

ネクリュウドフはアグラフェエナより受取つた香を薫らした小さい手紙の封を切つて讀んだ。



「私事あなた様に物事を思出させる役目を引受けました事故、」

と縁を截たない厚い鼠色の紙に勢ひの好いすらすとした運筆の書き出しで、

「その役目を果す爲に申し上げます、四月廿八日といふ今日はあなた様は陪審裁判の席に御臨みにならなければなりませんのよ、それ故あなた様が昨日御持前の安請合にて御約束なされし様に私共やコロソフ様と御一緒に繪を見に御出かけなさる譯には参りませんの。馬を一頭お求めにならうとして三百ルウブルの代金に御躊躇なされましたのに、それを時刻通りに裁判所に御出頭なさらぬ場合の罰金として御拂ひなさる御積り？ 此事あなた様が昨日御歸りになりました後で思ひつきましたの。それ故お忘れなさりませぬよう。

ミッシェイコルチャアギンより」

更にその裏に又書いてあつた、

「Maman vous fait dire que votre convert vous attendra jusqu' à la nuit. Venez absolument à quelle heure que ce soit (あなた様の御膳立は夜までしまつて置きます様、母よりの言葉で御ざります。ですから御都合つき次第、是非とも御越し下さいまし。)

ネクリュウドフの顔は又もや曇つた。その手紙ははや二月前から目に見えない糸で彼を次第に強く引き付けようとの目的を持つたコルチャアギンの方からの巧妙な手管の一端であつ

た。併しもはや青春のはじめといふ年でもなく、又随つて熱烈に戀をしてゐるでもない多くの男がいざ結婚といふ前になつて誰しも大抵よくやる躊躇の外に、ネクリュウドフには尙ほ別な重要な理由があつて、よしんば彼が貰ひ受ける決心はしてゐるにもせよ、それも直ぐ申込むわけには行かない事情があつた。それは何も彼が十年前にカテユウシヤを誘惑したからではなかつた、その事は彼はもはや悉皆忘れても居り、随つて夫れが今結婚をする邪魔になるなどとは思つてもゐないのであつた。たゞ彼の今の躊躇の理由は彼が今現に或る人妻と關係してゐるからの事で、それも今は彼の方からは斷絶の形になつてゐるのであるが、女の方からはそれをまだ承認してはゐないのであつた。

ネクリュウドフは婦人達に對しては非常に臆病な方であつたが、その臆病が却つて其の人妻に彼を我物にし度いといふ野心を起させたのであつた。それはネクリュウドフが嘗て議員の選挙に加はらうとした或地方の貴族頭の妻君であつた。ネクリュウドフは其關係に深く陥り込んで行けば行くほど、ますます其事が堪らなくなつて來た。はじめは彼はたゞ彼女の誘惑に打勝ち得ないだけであつたが、後自分がその妻君に對して悪いのだと感ずるやうになると、彼は妻君に承知して貰はないでは其關係を絶つ事が出来なくなつた。ネクリュウドフがコルチャアギンの娘に結婚の申込をしようと思つても、それが悪いと思はれるのは此の關係



があるからであつた。

食卓の上に載つてゐる數通の手紙の中には、其不義の相手の妻君の良人からの一つあつた。彼はその筆蹟と印とを見るなり、直ぐ顔を赤くして、危難に近づいた場合に毎度の例である通りに自分の精力の集中して來るのを覺えた。しかし彼の昂奮は無用であつた。

ネクリュウドフの地所の澤山ある其地方の貴族頭たる彼は、この五月の末に其土地で臨時郡會が開かれるといふ事をネクリュウドフに知らせたのであつた、そしてなほ其郡會で學校問題と道路問題とに就いて重要な討議が行はれる事になつてゐるが、反對黨の側から盛んな妨害のある事を豫期しなければならぬから、「Pour donner un coup d'épaule (應援に來て下さい)、兎も角も臨席して下さい。」と願つたのであつた。

その貴族頭は自由主義の男であつて、アレキサンデル第三世の治下に再び反動政策が頭を擡げて來た時、彼はそれを相手に盛に戦ひ、その爲めに自分の一家内にふしだらの起つたのも氣付かない位の熱心家であつた。

ネクリュウドフは自分が其男によつて幾度も嘗めた種々様な苦々しい場合を思出した。一度は彼は萬事感付かれたなと思つて、決闘の覺悟をした事もあつた、その時は彼は拳銃の口を空に向けて曳金を曳く積りもしてゐた。——ある時は妻君が自棄になつて庭の方へ走り

出して池に身を投げて死なうとした事もあつた、彼は後追つかけて探しに行つた、そんな劍呑な場合さへあつた。それを彼は今し、み、みと思ひ出した。

「今だつて自分はまだあの妻君よりの返事を受取らない中は、コルチャアギン家を訪問するのもよくない、又あの家族にかゝり合つたりしてゐるわけにも行かない」とネクリュウドフは考へた。一週間前に彼は其妻君に切れようといふ手紙を出して、自分が悪かつたことを書き、どんなことをしても自分の罪を贖ふ覺悟をしてゐると述べて置いた、そして二人の今までの關係をこれで終りとする方が妻君の爲めに何よりも利益になる由を細かに説いて置いたのである。その手紙の返事を彼は今やはり待つてゐるのである。その返事のなかなか來ないのは結果が巧く行くらしい兆のやうであつた、と云ふわけは彼女が切れ話を承諾しないとすれば最早疾づくに不承諾の返事を寄越してゐる筈であり、さなくば自身出かけて來てゐる筈であつた、それは今迄が既にさうであつたのである。ネクリュウドフは今ある士官の一人が彼女にしきりと氣に入らうとしてゐる由を聞いてゐた。それを思ふと彼は嫉妬も起つた、が併し又それと同時に今の窮境より抜け出るには何よりの機會だとも希望してゐた。

今一通の書狀は彼の不動産の監理人から出したものであつた。監理人の述べてゐる意味は、土地の相續權を確認して貰ふために、且又今後の土地經營をどんな方法でやつて行く可



きか、亡き母堂の時代のやり方で行く可きか、それとも彼監理人が亡き母堂にも説き又今の當主たるネクリュウドフにも献策し度いと思つてゐる通り財産目録の内容を増し従来百姓に貸し付けてあつた土地を地主側たる當方で耕作して行く事にすべきか、そんな事をも決定して貰ふために是非ネクリュウドフが其身親しく彼地に臨んでみて呉れるやうにしてあつた。當方で耕作する事になれば従来よりも収入が殖えるといふ事を書き、なほ月初めに上納する筈であつた三クルウブルの金の遅くなつた事をも詫びてあつた。その金は次便で送るが、さう遅くなつたのは百姓共がなかなか横着になつてどんな催促を受けても寄越さないで、彼監理人も是非なく裁判所に訴へて百姓共に無理にも其義務を果させるやうに押し迫つたりした爲めである由も書いてあつた。

その手紙はネクリュウドフには愉快でもあり又不愉快でもあつた。彼は自分の勢力の下に廣大な土地を所有してゐる事を思ふと愉快であつた、——同時に又併し彼は青年時代にハアバアド・スペンサアの熱心な崇拜家だつたので、スペンサアが其著『社會平衡論』の中で廣大な土地を所有することは正道でないと云つてゐる非難を今自身が大地主として感ぜねばならないのが不愉快であつた。青年時代の公明な考と決心とから彼は其頃土地は一個人の所有であつてはならないと屢口にした許りでなく、又大學で其主意の論文を書いた許りでなく、

實際に於て、母方の所有でない父方より相續した少し許りの土地を、自分の平常の信念に反して所有して居たく無さに、當時若干の百姓達に分つてやつた事があつた。今は併し相續して大地主になつてゐる彼は、父より相續した二百デッシュエティン（一デッシュエティンは）十年前に惜まなかつたやうに、今の廣大な土地の所有を放棄するか、——さもなくばたゞ黙つて青年時代の考を誤つてゐたとしておくか、その孰れかに出なければならぬ場合であつた。

彼は前者に従ふ事は出来なかつた、それは土地以外には彼には何の財産も無かつたのである。と云つて彼は又役人になり度いとも思はなかつた。その上彼は贅澤三昧が身に浸みてゐるので、今更それを改めるといふ事は彼自ら出来ないと思つた。青年時代の信念と覺悟と名譽心と功名心とを最早持たない彼に取つては、そんな事は畢竟空虚な言葉に過ぎなかつた。では後者に従つて、土地所有を不正としてゐた考などは投げ棄て、終はるか、それは當時スペンサアの『社會平衡論』より得た眞理であつたが、而してすつと後になつてヘンリー・ヂ・オヂの著作によつても尙一層その然る所以の證明を確把したのであつたが、そんな考は投げ棄てて終はるか、……と思つても、それも亦矢張り出来ない事であつた。さういふ譯で彼には監理人のその手紙は不愉快の種であつた。



ネクリュウドフは珈琲を飲んでから、何時に裁判所に出頭するやうに書いてあつたか召喚状を尙ほ一應見るために、そして又コルチャアギンの娘に返事を書く爲めに自分の部室へと行つた。

その部室に入るには彼は又自分の畫室<sup>アトリエ</sup>を横ぎつて行かねばならなかつた。そのアトリエには描きかけの人物畫をのせた畫架が一つ立つてゐた。二三の習作も其方<sup>そこ</sup>此方<sup>こちら</sup>の壁にかけてあつた。二年もかゝつて骨折つてゐる其人物畫を見ても、又習作のどれを見ても、又アトリエの全體を見ても、彼は自分が繪畫の道に上達する能力を缺いてゐるといふ事を又もや直ぐと感ぜないではゐられなかつた。その感じは前にもあつたが、近頃はそれが又特に強くなつてゐるのである。彼はそれを自分に特別に發達してゐる審美感より來るのだと自ら説明してゐたが、それでも兎に角才能の不足を自認する事は非常な不愉快であつた。

七年前に彼は自分には繪畫の天賦があると信じて官途より退き、その藝術的勞作の高所より他の一切の職業を賤しみ疎んじて冷かに見下ろしてゐた。併し彼は今自分にそんな權威は少しもないと自ら認めてゐるので、繪に關しては一切の追想が不愉快であつた。彼は善盡し

美盡して設備萬端立派に出来上つてゐるアトリエを忌々しげに打見やりながら 壓迫されるやうな心持を嘗めつゝ自分の部室に入つた。

そこは又廣い室で、種々様々の贅澤な立派な器具があり、居心地のよいあらゆる設備が施されてあつた。彼は大きな卓の抽斗の一つをあげ、その一區劃に「期限書類入」としてある中から召喚状を取り出した。それには十一時に出頭するやうにと書いてあつた。ネクリュウドフは椅子についてコルチャアギンの娘に、招待の禮と、成る可く午餐には參上する積りであるといふ事とを書いた。彼は一葉の書簡用紙に其旨を書いたが、あまりに親密過ぎた書き方になつたので夫れを寸々に裂いて棄て、又一葉を出して書いた。が今度は又餘りに冷かで、殆ど先方を馬鹿にしたやうな文章になつたので又それも裂いて棄てた。それから彼は壁に取り付けてある電鈴の鈕を押した。

頬鬚だけを蓄へて餘は顔面すべて、てら、てらに剃つた陰氣臭い様子をした老年の召使が戸口に現はれた。

「辻馬車を呼びにやつてお呉れ。」

「畏りました、早速。」

「それからコルチャアギン家の使の人が待つてゐるんだから、御手紙有り難うと私が云つた



と、さう云つてお呉れ、そして成る可く參上致しますつて。』  
『畏りましたござります。』

『口頭では失敬になるかな、併し何うも書けないんだもの。いゝや、どうせ今日中に又會ふんだから。』そしてネクリュウドフは外出の服装をしに行つた。

服を着けて彼が玄關の階段の上に出て來ると、はや彼の顔馴染の馬車屋は護謨輪の馬車を其處に止めて待つてゐた。

『昨日は旦那様は丁度コルチャアギン公爵様の御邸から御歸りなさる所でございましたかねえ。』日に焼けて黒くなつた頑丈らしい首を白い襦袢の襟の間で半分許り此方へ振り向けて馬車屋はさう云つた。『其時手前やつて來てましただ、すると御門番がさう申しましただあ、へい、ほんの只今御歸りになりましただあて。』

『馬車屋どもまではやコルチャアギン家に自分の關係のある事を知つてゐるんだね』とネクリュウドフは思つた。そして「自分はあの娘と結婚するがいゝかしら、それとも爲ないがいゝか」と昨今殊に頭に往來するやうになつた未解決の問題が、又もや彼の目前に浮び出た。昨今彼が遭遇する他の多くの問題の場合にもさうである通り、この問題に就いても彼は今は結婚するがよいとも爲ないがよいとも決定し兼ねた。

夫婦關係を作ればよいといふのは先づ第一に夫れによつて一つの世帯といふものが出來て萬事につけ其處に便利と愉快とを感じられるのみならず、彼の放縱な生活をも風儀よい品位あるものとなす事の出來るといふ事で、それを名づけて彼は家庭生活と云つてゐたのである。——第二には、これが最も重要な點であつて、即ち家庭を作り子供も生れるといふ事になれば、それが彼の今の無意味な生活に一個の意義と目的とを與へるもので、それはネクリュウドフの望んでゐる所のものであつた。そしてそれは夫婦關係を作る事によつて得られるものであつた。夫婦關係を作つては不利と思はれるのは、青春時代を過ぎた獨身の男が皆感ずる自由を失ふといふ事で、次には又嫁の本當の性質がどんなものであらうかと氣遣はれる事であつた。

しかし特にミッシイ(コルチャアギン公爵の年若い娘はマリイといふ名であるが、彼等階級の凡ての家庭に於けると同じく、彼女は又さういふ別名を持つてゐたのである)との結婚は、先づ何よりも彼女が門閥家の娘であるといふ事、そして着物の着やうにも心立にも物の云ひ振りにも歩き振りにも笑ふ具合にも其他萬事に一般普通な平凡な女達とは違ふ所のあるといふ事、それが何よりも強くネクリュウドフの心を惹いた。そしてさう違つてゐると云ふのは決して彼女に一般の包容性がないからではなく、むしろ彼女の敏捷と物事によく熟練して



ある所とから来てゐるものであつて、それはネクリュウドフが他の言葉では云ひ現はす事の出来ないものであり、そして非常に優つたものとしてゐる所であつた。次に又彼女が彼を他の何人をよりもより多く尊敬してゐる事、つまり彼の観る所では彼女が彼をよく理解してゐるといふ事、即ち彼の高尚な諸性質をよく認めてゐるといふ事は取りも直さず彼女に健全な悟性と推斷力のある證據だと思はれる事、これが又彼に彼女との結婚を望ませる一理由であつた。

併し又彼にその結婚を躊躇させるのは、ミッシイよりも、つと多くの美點を備へた娘が別にありさうにも思はれ、あるとすれば夫れが尙一層よく彼に適合すると思はれるのが第一で、第二にはもう二十七にもなるミッシイの事だから今迄の中に嘗て誰にか戀をした事のないとは思はれない事であつた。さう思ふのはネクリュウドフには苦しかつた、彼女が嘗て彼以外の誰かを愛した事があらうといふ可能を許す事は彼の自負心の堪へ得ざる所であつた。勿論彼と彼女とが今のやうに知り合ひになるといふ事は、その以前には彼女が知らう筈はなかつた、併しそれでも彼女が彼以外の誰かを愛したらしい事を思ふと、彼は踏みつけられるやうな心持を覚えるのであつた。

そんな具合に結婚に賛成の動機と反對の動機とが夫れ夫れ各の主張を曲げなかつた、そし

て何方にも同等の目方があつた。ネクリュウドフは自分を嘲つて自分は「ブウリダンの驢馬」だと思つた、どちらの枯草を食つてやらうか、右のにしようか夫れとも左かと決しかねて、そして飢ゑて死んでしまつた愚を思つた。(ヨハンネス・アウリダンの驢馬とは一般に意志の自由の譬喩として用ひられる。無論嘲笑的。)

「併しまだあのマリヤ・ワッシリエフナ(貴族頭)の返事が來ないのだから、つまり彼女とまだ切れてしまつてゐないのだから、」と彼は一人心に呟いた、「だから今の所では自分は何うする事も出来ないのだ。」

さういふ譯だから自分は決心を躊躇してゐていゝのだ、いや躊躇してゐなければならぬのだ、と思ふ事は彼には非常に好都合であつた。

「あとで萬事すつかりよく考へてみよう。」彼の乗つてゐる馬車が裁判所の門の前の敷石の上に音なく靜かに來かゝつた時、彼はさう呟いた。

「自分は今正直でなくてはいけない、正直が自分の性にも合つてゐるのだ、又それが自分の義務でもあるのだ、そして社會の爲めに盡すのだ。又さうして社會に對してゐると、其處には興味ある事もよくあるものだ。」さう彼は一人心に云つて門衛の前を通り過ぎ、裁判所の建物の正面玄関へと歩いて行つた。



裁判所の廊下ではネクリュウドフが入つて来た時は何やら餘程どやどやしてゐた。廷丁等は彼方此方へ、様々な指令だの其他の書類などを持つて大急ぎで、殆んど駆け足のやうな恰好で行つたり来たりしてゐた。辯護士やら裁判官やらも擦れ違ひ行き違ひしてゐた。監視人の附いてゐない原告だの被告だのは頼りなげな様子で壁ぎはに立つてゐるもあり、腰掛が見當つて夫れに掛かつて待つてゐるもあつた。

「法廷は何處です。」とネクリュウドフは廷丁の一人に尋ねた。

「何方へ行かうと思つてですか。民事の方と刑事裁判の方とありますが。」

「では刑事部です。さう仰しやらなくつちや。其處を右へ行つて、それから左に曲つて、二番目の入口の所です。」

ネクリュウドフは其方へ行つた。

教へられた戸口の傍には二人の男が立つて待つてゐた。一人は丈の高いで、つぶり肥つた人物の好ささうな商人で、見た所一杯やつて朝の食事をしまつたらしく上機嫌であつた。今一

人はヘブライ出の何處かの店員であつた。二人は羊毛類の値段の話をし合つてゐた。ネクリュウドフは傍へ行つて陪審員の室は其處であるかを尋ねた。

「えゝ、さうですよ。あなたも我々の仲間の御一人ですな、陪審員の御方ですな？」と肥つた商人は目をしば叩いてネクリュウドフを見ながら尋ねた。そしてさうといふネクリュウドフの答へを聞くと、

「ちやあ好うござんす、一つ十分やつてみようぢやありませんか。」と云つて彼は其の柔かな小さい手を差延べてネクリュウドフに握手を求め、「一つ十分やらなくつちやあねえ。時に失禮ですが御名前は？」

ネクリュウドフは自分の名を告げて、そして陪審員室に入つた。

廣くない其室内には種々雑多な男が十人許り集つてゐた。皆、つい今しがた来たばかりで、椅子に腰掛けてゐるのもあれば、室内を彼方此方へと歩いてゐるのもあつた、そして皆顔を合せては互ひに名乗り合つてゐた。制服を着た退職士官も一人ゐた、他は皆普通の上衣を着たり、海員服を着けたりしてゐたが、たゞ一人袖なしの上衣も居た。

多くは其めいめいの用をそち除けにしてゐるのだが、又それで仕事の邪魔をされてゐるとこぼし合つたりもしてゐたが、併し又重要な公務に従事するのだといふ意識と共に一種の仰



仰しい鹿爪らしい氣持にもなつてゐた。

三六

彼等陪審員達は互に名乗り合つたり、又は誰がどんな階級の人であるかを推測し合つたり、天氣の挨拶を交したり、春の初めの時候の話だの、さしかゝつてゐる刑事裁判の噂だのをしたりした。ネクリウッドフを知らずにゐた人達は急いで彼と知合ひになる事を努めた、それは彼等にとつては一種の大きな名譽になるらしかつた。又ネクリウッドフはいつも知らぬ他人の中でそんな風に近付きを求められるのを、それが自分に當然納めらるべき貢賦でもあるかのやうに思つてゐた、今もさうであつた。若し彼が何故自分を他の多くの人々よりも秀れてゐる者と思つてゐるのだと尋ねられるとしたら、彼はそれに返答する事は出来なかつたに相違ない。彼は今迄の全生涯中に社會に對して何等特別の貢獻をしたといふ覺えもなかつたのである。彼が英語も佛蘭語もよく話すといふ事、衣類も襟飾もカフス釦も土地第一流の店へ注文するといふ事、そんな事は決して彼を優越階級の人として認めるに足る所以ではなく、それは彼自らも知つてゐるのであつた。併しそれでも彼は自分が他人にさうされるのは畢竟自分に優越な所が確かにあるからだと思つてゐた、でさうして示される尊敬を當然自分に對し盡さるべき義務として受取り、若し又夫れが示されないと彼は侮蔑されたやうに感ずるのであつた。そして今此の陪審員室でも彼は又その不愉快な氣持をも覺えなければならなかつた。

らなかつた。

陪審員の中にベエテル・デラッシモキッチュといふ彼の知人が一人あつた（その名をネクリウッドフは知らなかつた、そして又その苗字をすらも知らない事をネクリウッドフは幾らか自分の誇りともしてゐた）、ネクリウッドフの甥達の以前の教師である。そのベエテル・デラッシモキッチュは今は高等學校の教師なのである。ネクリウッドフは彼を其の馴れ馴れしげな打寬いだやうな所や、獨合點のやうな笑ひ方をする所や、殊にネクリウッドフの姉が云つてゐたやうに「共產主義」を奉じてゐる事などでいつも嫌つてゐた。

「やあ、あなたも陥り込んで來たんですか。」とベエテル・デラッシモキッチュはネクリウッドフに高らかに笑ひかけてやつて來た。「ぬけ出すわけには行かなかつたんですか。」

「ぬけ出さうとも思ひもしなかつたんです。」とネクリウッドフは忌々しさに答へた。

「なる程、それが公德ですからね。併し姑あ姑あ腹が減るまで待つて御覽なさいよ、それから睡眠も許されない事になるまでさ、さうすりや又あなたの考が變つて來ませあね。」とベエテル・デラッシモキッチュは尙ほ高らかに打笑ひながら云つた。

「此奴今に『君僕』でおれに話しかけさうだぞ」とネクリウッドフは思つた。彼の顔つきは今親戚皆が残らず死んだといふ知らせでも受取つたかのやうに打沈んだ。彼は學校教師にかゝ



三六  
り合はずに他の一群の方へ行つた、その一群は丈の高い綺麗な刺刀を當てた顔の風采のいい紳士を一人取巻いて、その紳士が丁度其時何やら熱心に話すのを聞いてゐるのであつた。その紳士は民事部で其時現に進行しつつある或訴訟について、さも自分が何もかも知り抜いてゐる事柄の話をするかのやうに、それにたゞさはつてゐる裁判官や有名な辯護士等の名を挙げ其先祖達の名までも擧ぎ出して話してゐた。或る名高い辯護士のやり方によつて其時迄の其訴訟の経過が傍くべく急遽に一變して、關係者の一方の年老つた貴婦人側が、全く罪も何もないのに反對側に莫大な金額を支拂はねばならぬと云ふ話をした。『えらい腕前の辯護士ですよ。』と其紳士は云つた。

誰も皆感嘆の様子で聞いてゐた、中には何とか言葉を挟まうとした者もあつたが、紳士は直ぐそれを却けて、さも自分一人が事件の真相を知つてゐるかのやうに振舞つた。

ネクリュウドフは遅くなつて來たのであつたが、それでも尙ほ長いこと待たなければならなかつた。裁判官の一人が出動しないので法廷はまだ開かれなないのであつた。

## 六

裁判長は疾とつくだに出動してゐた。彼は丈の高い肉付のいい營養佳良の紳士で豊かな灰色の

頬鬚を蓄へてゐた。妻君はあるのだが其妻君も彼も放埒な生活をしてゐる方で、双方より互に其自由の邪魔はしなかつた。

彼は今朝早く、嘗て去年の夏彼の家に寄寓してゐた前の女教師の瑞西人より一通の手紙を受取つた、その女は今南の方からペテルスブルグへ行く途中であるが今日午後三時から六時迄の間に旅館「イタリア」で彼を待ち受けてゐると云つて知らして寄越したのであつた。それで彼は今日はいつともより早く始めて早く閉廷にし度いと思つてゐた、そして六時にならない中に其の髪の赤いクララ・ワッシリエフナといふ女に逢はうと積つてゐた、その女とは彼は去年の夏に田舎に少しの間行つてゐた時はじめて關係を結んだのであつた。

彼は自分の部屋に入ると、戸を閉めて門をかけ、書類を入れてある戸棚の一等下の方より二個の啞鈴を出し、それを上下に又前後に突出して二十回の運動をし、それから膝を曲げて其二つの啞鈴を頭の上に高く差し上げる運動を二度やつた。

「冷水浴をやるのと體操をする位は健康の爲めになるものはない。」彼は金の指環の幾つも嵌つてゐる左の手で右の腕の筋肉の隆々として凸起してゐるのを撫でながらさう思つた。それから尙ほまだ水車法の體操をしなければならぬのだつたが（彼は毎日開廷前に此の二通りの運動をする習慣であつたのである）、その時丁度戸口にノックの音がした。誰か開けよう



とした。裁判長は敏捷く唾鈴を戸棚にしまひ、そして戸を開けた。  
「や、失敬。」と彼は云つた。

裁判官の一人で肩の聳えた、苦々しげな顔をした、餘りからだの大きくない金縁眼鏡の男が入つて来た。

「マトエエ・ニキイティッチ君はまだ出勤しませんよ。」と其判事は忌々しげに云つた。

「まだですか。」と裁判長は受答へしながら制服を着けた。「いつも遅刻する人ですな。」

「そして済まないとも思はないのが妙ですよ。」と云つて判事はぶりぶりしながら椅子にかけて巻苘を一本取り出した。

その判事は極く氣六ヶ敷い八ヶ間し屋で、今朝は其の妻君が一ヶ月間支へなければならぬ等の生活費を夫れ以内に使つてしまつたといふので、不愉快な衝突をしたのである。妻君は彼に尙ほ少し渡しておいて呉れと云つた、が彼は規定を破るのは厭だと云つて閉入れなかつた。そこで一小波瀾が擡つたのである。妻君が云ふには、それではお午の食事は致しませんから、食べに御歸りにならない方がようござんすといふ事になつた。直ぐ彼は家を飛び出した、又其上彼女がどんな脅し文句を列べまいものでもない、どんな事でも爲兼ねない女だから、と思つて彼は其場を外したのである。

「風儀の正しい善良な生活をしたつて何の役に立つんだ。」と忌々しがつて彼は裁判長をちらと見た、裁判長は健康に輝き、さも愉快さうに柔和さうにして、其の房々した長い灰色の頬鬚を、刺繍をした襟の兩側へ立派な白い手を肘まで上げて扱いてゐた。「素行の修まらないこんな男はいつもこんなに嬌々して居るし、謹嚴なおれは年中氣の晴れる時がないではないか。」

そこに書記が入つて来て公文書類を差出した。

「あり難う。」と云つて裁判長は巻苘に火をつけた、「どの事件を先きにしませうかね。」

「あの、何ですね、私は毒殺事件と思ひます。」と書記は平氣を装つて答へた。

「む、よからう、それなら毒殺事件。」裁判長は其事件を四時迄に終る事が出来るだらうか、それから約束の旅館に行けるやうになるだらうかと考へたが、さう決定した。「でもマトエエ・ニキイティッチ君はまだ見えませんかね。」

「矢張りまだです。」

「ブレエ君は出勤してきますか。」

「は。」と書記は答へた。

「ぢやあ君ブレエ君に會つたらさう云つて下さい、毒殺事件から始めるつてね。」



ブレエエといふのは副検事で、今日の開廷に於て告訴の提起をせねばならない役であつた。

書記は廊下に出て行つたら、ブレエエを見つけた。ブレエエは肩を聳やかして制服の釦を外し、書類入れを小腋に挟んで、殆ど走るやうに急いで廊下をやつて来た、何も持たない方の手は肩から前後に水平になる位に打振りながら靴の踵でかたかた音を立てた。

「ミハエル・ペトロキッチ(裁判長)さんが御尋ねですがね、あなたの御準備はもう出来てゐますかつて。」

「無論ですとも、私は準備はいつでもいゝんです。」と副検事は答へた。「どの事件が最初なんでしょう？」

「毒殺事件です。」

「結構。」とは云つたが、實は副検事はちつとも結構とは思はなかつたのである、といふのは彼は前夜は一睡もしなかつた。ある同僚の送別の宴會があつて、皆一時迄も飲むやら樂器を鳴らすやらの騒ぎで、彼は恰も其毒殺事件の書類は讀む間がなく、今ほんの一寸目を通してみようかと思つてゐた所なのであつた。書記はブレエエが未だ毒殺事件の書類は讀んでゐる筈がないと信じてゐるので、それで彼は故意と其事件を先きにするやうに裁判長に云つたの

である。書記は自由主義の男で過激派じみた思想をさへ有つてゐたが、ブレエエは露西亞の官途に就いてゐる獨逸人の多數の例に洩れず保守主義で殊に正教派の信仰に深く傾倒してゐるので、それを書記は非常に嫌つてゐた、而して其上に尙ほブレエエの地位は彼の又常に羨んでゐる所のものであつた。

「それはさうと、あのスコプツェン事件は何うでせうね。」と書記は尋ねた、(スコプツェン、ナルブルクで起つて、以來なほ存續し可なり)に廣く流布してゐる信仰宗教及宗徒の名)

「あれはまだ其運びには行きませんよ、前にもさう私が云つて置いた通りです。」と副検事は答へた。「まだ證人が一人足りないんですからね、それは法廷で私が云ふ積りです。」

「だつて、それは何うでもいゝぢやありませんか。」

「いや、いけません。」と副検事は繰返して、前と同様に可笑しく腕を打振つて急いで其處を通り過ぎ自分の室に入つた。

彼が事件に取つてちつとも必要でない居ても居なくても構はないやうな一證人の缺けてゐるのを口實として對スコプツェン訴訟を延ばしてゐるのは、實に進歩した頭を持つた陪審員の出る此處の法廷で審理されるとなればスコプツェン宗徒の無罪放免は分りきつた事であるからであつた。彼は裁判長の同意を得て其事件を或る郡役所所在地の法廷に廻らす事にし



てゐた、其處だと陪審員の多數が百姓であるから、訴訟の効目が多くありさうに思はれたのである。

廊下の混雑は一層ひどくなつた。が民事部の廣間の傍が最もこみ合つた、其處であの裁判事件通の紳士が陪審員連中に話して聞かした事件が審理されたのであつた。少し経つと其廣間から老年の婦人が一人出て來たが、それが例の凄腕の辯護士の爲めに何の要求權利もない原告に莫大な金額を辨償させられた被告であつた。その辨償の不正な事は裁判官達も知つて居り、殊に原告と其辯護士とは最もよく知つてゐるのであるが、それでも其辯護士の巧妙な悪辣なやり方は、どうしても彼女が原告に金をやるより外には道のないやうにした。被告はからだの發達のいゝ女で、儀式ばつた服を着け、帽子には大きい花を挿してゐた。彼女は戸口から出ると廊下に立止つて、その短かい肥つた腕を動かして自分の辯護士に云つた。「どうなるんでせうねえ、あなた、何うしたらいいんでせうねえ。」

その辯護士は考に沈んだやうな顔をして彼女の帽子の花をちらと見たが、女の云ふのは耳にも入らないらしかつた。

老婦人の後より、民事部の其戸口から、得意満面に溢れて例の有名な辯護士は胸の廣く開いた胴着を見せながら出て來た。それが帽子に花を挿した老婦人を一文無しになし、原告に

十萬ルウブル以上の金を握らせ、それより自分が一萬ルウブルを受取つた男なのである。人々の視線は一齊に其辯護士の方へ集つた。

彼はそれを感じた、彼の様子恰好はさも誇らしげに云つてゐるらしく見えた。「どうだい、何も今更さうおれに尊敬推服の態度を見せるやうに骨折らなくもよからう。」と。そして彼はさつさと行つてしまつた。

七

遅刻の判事マトエエ・ニキイティチュはやつと出勤した。

首の長い瘦せぎすの下唇の歪んだ法廷取締が其持前の跛を曳いて陪審員室にやつて來た。その法廷取締は律義な人物で、大學にも學んだ事のある男であつたが、餘り飲み過ぎで何處でも一つの地位に長く居た事はなかつたのである。だが今度は三月前に日頃彼の妻君の肩を持つてゐる或る伯爵夫人に今の地位を世話して貰つた。そして尙ほ辛抱して勤めても居り満足もしてゐるのであつた。

「どうです、皆さん、すつかり御捕ひになりましたか。」と彼は鼻眼鏡をかけながら尋ねた。「捕つたやうですがね。」と陽氣な商人は云つた。



「ぢやあ一つ御名前を呼んでみますから。」と云つて法廷取締は衣囊かぶしより一枚の紙を取り出し、順々に名前を呼び上げた、そして名前の所有者を鼻眼鏡越しに一々見渡した。

「樞密院議員ニキイフオロフ殿。」

「はい。」と裁判官を殘らず知つてるやうに云つてゐた風采のいゝ紳士は答へた。

「陸軍大佐イワン・セミオノキッチユイワノフ殿。」

「はい。」と制服を着けた瘦せぎすの男は答へた。

「第二組合の商人ベエテル・ペクラアショッフ殿。」

「はい、はい。」と人の良ささうな商人は顔一ぱいに笑みを浮べて云つた。

「近衛中尉公爵ドミトリイ・ネクリユウドフ殿。」

「はい。」とネクリユウドフは答へた。

法廷取締は特別に敬意を表して鼻眼鏡越しにネクリユウドフを見て、餘人と同一な取扱ひはしないと云ひさうにちよいと腰を屈めた。

「海軍大佐ユリイ・ドミトリイエキッチュダンチュニコ殿。商人グリゴオリイ・インフィモオキッチュクレエシヨッフ殿……。」何がし殿。誰がし殿……。

二人の不参者があつただけで、餘は皆揃つてゐた。

「さ、皆さん、どうぞ法廷へおはひりを願ひます。」と法廷取締は戸口の方へと誘ふやうな丁寧な手つきをした。皆どやどやと動き出し、戸口の傍では先きを譲り合つて廊下に出で、それから愈法廷へ入つた。

法廷は廣い長方形の室であつた。その一端は少し高くなつてゐて、其處に上るには段が三つついてゐた。その高壇には中央に緑色の布を掛けた而して深緑の房の下つた卓が一つ据ゑてあり、その後ろには極く高い檜の凭木もたきに彫物をした肘掛椅子が三脚並んでゐた。肘掛椅子の彼方の壁には皇帝の等身大の肖像畫が金縁の額をはめて掛けてあつた。右の隅には神棚があつて、其處には荊いばらの冠をした基督の像が置いてあり、その傍には祈禱の机があり、右側には検事の記録臺があつた。それと向き合つて高壇と直角をなしてゐる壁傍には書記用の机があり、それに近く傍聽席を隔てる檜の仕切が廻はして閉めてあり、仕切の此方にまだ空席の被告の腰掛があつた。高土間の右手に二列に並んでゐる肘掛椅子は陪審員席で、その次の低い所にある机は辯護士用であつた。そんな物は一切此の大廣間が仕切で二つに等分されてゐる其一方の設備であつた。他の一方即ち仕切の彼方はすべて腰掛で一ぱいになつてゐて、その最終さいごの壁側に行くにつれて一脚は一脚と次第に高く据ゑてあつた。

仕切の彼方には前の方の腰掛に、女の職工か若しくは女中らしい恰好の女が四人と、矢張



り職工風の男が二人ついてゐて、此の廣間の壯大な設備に氣を吞まれてゐるらしかつた。彼等はおづおづと何やら囁き合つてゐた。

陪審員の後より法廷取締は其持前の跛を引きながら室の眞中へ進んで行つて、一同を威嚇する積りでもあるかのやうに聲を張り上げた。

『開廷。』

一同起立した。筋肉のよく發達した頬鬚の美しい裁判長、それから金縁眼鏡をかけた氣六ヶ敷屋の判事が高壇へ上つた。その判事は今は又尙一層氣を六ヶ敷くしてゐるらしかつた、それは今さきつい開廷前に妻君の兄の司法官試補と話を交へたら、その司法官試補が云ふには、今しがたあなたの家に行つたら妹が今日は晝食はないと云ひましたよ、と彼に云つたのである。

『だからさ、何處かの料理屋で食べようぢやありませんかね。』と其司法官試補は笑つて云つたのである。

『笑ひ事ぢやありませんよ。』と氣六ヶ敷屋の判事は云つて尙一層氣を腐らしたのである。

最後に第三の裁判官のマトエエ・ニキイティッチュが入つて來た、いつも遅くなる此の判事は目尻の少し下つた正直さうな大きい目を持つた髯深い男であつた。彼は胃加答兒に惱んでゐ

たが、今朝から醫者の勧めで新たな或る療法を始めたので、通例よりも尙一層多く家で時を潰すのであつた。彼は今高壇に行くのに何か一心に思ひつめてるやうな見えをしてゐた、と云ふのは彼は自分に何か分らない事がある時は常に妙な占ひをして夫れをきめる習慣がついてゐたのである。今は彼は若し自分の部室の戸口から高壇の自分の席まで何歩で行くか、其の歩数が三で割れるのだつたら、それなら今度の新療法で自分の病苦は治る、若し割りきれないとすれば新療法も効がないとした。で、それを思ひ乍ら入つて來たのであるが、生憎その歩数は二十六であつた。が彼は最後に無理に小刻みの一步を入れて二十七歩として高壇の自分の椅子に着いて自ら安心したのである。

金びかの襟の制服を着けた裁判長と二人の判事とが高土間に上つた様子恰好は、非常に仰山なものであつた。彼等自らもそれを感じてゐるらしく、又自身それに壓迫をも感じてゐるかのやうに、慎しやかに伏目になつて卓の彼方の彫物した臂掛椅子にかゝつた、緑のクロスをかけてある卓の上には失らしたばかりの大小種々の鉛筆やら白紙やらが載せてあつた。裁判官達と同時に副検事も書類入れを小腋にかかへて入つて來た、そして片手を打振りながら矢張り急ぎ足に窓傍の自分の席に行つて腰をかけ、すぐ様書類に目を通し始めた。彼は討議に入る下調べをする爲めに一刻片時も無駄には過すわけに行かなかつたのである。彼



は今度でやつと四回目の告訴を提起するのであつたから、自分の提起する事件は是非とも皆が皆有罪になして行き度いと願つてゐた、自分の告訴提起はいつも確實なもののみであるといふ印を見せ度いのであつた、そして必ず好い履歴を作つて行かずにはおかないと決心してゐた。毒殺事件の内容は大體は彼も知つてゐた、そして既に如何に述べ立つべきかといふ案も立ててゐた。けれども尙ほ二三の陳述が必要だつたので、それを今彼は急いで書類中より獵るのであつた。

書記は高壇と向合ひになつた側の自分の席に着いて、自分が読み上げねばならなくなりさうな一件書類をちやんと揃へた。その傍ら彼は昨日手に入れて一應は讀んでおいた或る題目の刷物にも目をやつた。その題目に就いては彼は同意見の髣髴い判事と後で話し合ひ度いと思つてゐるので、その前に其全部を讀み通して置かうと思つたのである。

八

裁判長は書類に目を通し、法廷取締と書記とに二三の質問をかけて、其通り相違ないとの答を得てから、それでは被告を引立て、來るやうにと云ひつけた。仕切りの彼方の戸が直ぐと開き、帽を着けた抜劍の憲兵が先づ入つて來ると、その後より髪の赤い雀斑の多い男の被

告が前になり、二人の女が後に續いて入つて來た。その男の被告は汚い鼠色の獄衣を着けてゐるのだが、その獄衣は大き過ぎもし長過ぎもしてだぶだぶであつた。彼は入つて來るに兩手の指を裂けさうに開けて兩股の邊りに慄はしながら付けてゐるのは、だぶだぶで下つて來る袖口を止めてゐるのであつた。裁判官をも傍聽人も見もやらず、ちつと彼は腰掛を見て、それをぐるりと一廻りしてから、その端に腰を下し、餘人の分をあけておいた。そして彼は頬の肉をびくびく動かして何か囁きでもするかのやうに裁判長の方へ視線をやつた。

彼の後より續いた被告はもはや若い女ではなかつた、そして矢張り獄衣を着てゐたが、頭には布切れを巻いてゐた。その顔は蒼白く、眉も睫毛もなくて、赤い眼をしてゐた。此の女は全く落着き拂つてゐるらしかつた。その席へ行く間に其獄衣が何かに絡むと、女は些とも急ぎも焦りもせず丁寧にそれを解いて、而して席についた。

三番目に續いて入つて來た被告がマスロオワであつた。

彼女が入つて來ると、其室に居る限りの男達の眼は一齊に彼女の方へ注がれた、そして敏捷く輝いてゐる黒い眼を持つた彼女の色白の顔や、獄衣の下からも柔らかに脹らんでゐる胸などから、暫くは離れる事が出来なかつた。彼女が目を落しもしないで前を通り過ぎた憲兵さへ、彼女が席に着くまで見やつた。それから其憲兵は自分が悪かつたと思ふらしく慌てて



目を外して正面の窓を見つめた。

裁判長は被告が三人とも席に着くのを待つて、扱て書記の方に向つて事を促した。規定通りの手順が始まつた。陪審員の出席總數の取調べ。不參者に對する處置、それは罰金を科する事になつた。賜暇請求者に對する許否の決定。豫備陪審員によつての補充。

それから裁判長は小さい數枚の紙片を折り疊んで玻璃製の器に入れ、金筋入りの袖口を少し引上げ、入れた紙片を又一つ一つ取り出して折り目を伸ばし、それに書いてある姓名を讀み上げた。そして所要の數を得ると彼は再び袖口を下ろし、それから陪審員の誓約を牧師に求めた。

黄ばんだ白い脹れぼつたい顔の牧師は褐色の長い儀式服を着け、胸に金の十字と横に小さい何やらの徽章を飾つて、聖像の下の祈禱机の方へ、重々しい歩調で進んで行つた。陪審員一同は立上つて、牧師の周りに集々と寄つて行つた。

「さ、皆様どうぞ。」と牧師はその太つた手を胸の十字に當てながら、さう云つて陪審員の整列するのを待つた。

彼は牧師の職に居る事はや四十六年で、あと三年経てば五十年在職の記念の賀筵を催す積りにしてゐた。此の裁判所では彼は陪審制度の採用以來奉職してゐるので、今迄に數千の人

人に誓約をさせた事やら、又自分が今のやうな老齡でありながら尙ほ教の爲め國家の爲め並びに自分一家の爲めに盡した事を思つて、少からぬ誇りを持つてゐた。家族には彼は三萬ルウブルを下らぬ有價證券と家屋を譲つてやらうと思つてゐた。誓約を禁じてある福音書によつて人々に誓約をさせるといふ事の決して善い事でない所以も彼には分らないでゐたのである。そんな事をして何等の疚しさを感じないのみならず、彼はそれに由て門閥の人々にも知合ひになれるので、寧ろ愉快としてゐた。今日もその帽子に大きい花をさした老婦人を相手取つての訴訟で一萬ルウブルの謝金を貰つた辣腕の辯護士には非常の尊敬を拂ひ、それと知り合ひになつたのを又とない満足に思つてゐた。

陪審員が残らず高壇に整列すると、彼はその髪の毛の薄くなつて霜の降つた頭を片方に傾げ、頭掛けの汚い穴を潜らし、それで觸つた僅か許りの髪をまた撫でつけ、扱て陪審員の方に向つた。

「さ、皆さん、右の手を御上げなさい、そして指をこんな風になさるのです。」と彼は老い朽ちたやうな聲を長く延びて云ひながら、どの指にも凹みの出来てゐる肥えた手を差し上げ、三本の指を物でも摘むやうに尖を寄せて揃へた。「さ、私につけてお云ひなさい。」と云つて彼は行き出した。「全知全能の神の御前に誓ひ奉る、その聖なる福音の書の御前に誓ひ奉る、命を



恵みます十字架の御前に誓ひ奉る、われ此の裁きの庭に於きて……」  
彼は一句毎に間を置いて唱へた。

「手を下ろしてはいけません、斯う上げてゐなくてはいけません。」と彼は年若い男が一人手を下ろしたのを見て注意した。

「われ此の裁きの庭に於きて……。」

頬髯を蓄へた風采の好い紳士と陸軍大佐と商人と其外若干の陪審員は、牧師の註文通りに指を二本寄せてずんと思ひ切つて高く差上げ、さうするのを一風變つた面白さのやうに思ふらしかつた。が餘の者は仕方なしにするやうな躊躇勝ちな恰好であつた。二三の者は牧師の云つた通りを過度に高い聲で熱心に而して力を籠めて繰返した、それは「自分はどんな事があらうとも云はずにはおかないぞ」とでも云ひさうに見えた。他の者は低い聲でぶつぶつ呟き、云ひ後れたり遅くなつたりして、はつと氣付いて遅蒔きながら追ひかけて唱へるもあつた。他に促すやうに三本の指を堅く摘み合せて差上げてゐるもあれば、中には開いてみたり又閉めたりするものもあつた。

誓約式が終ると裁判長は陪審員一同に一人の陪審長を選ぶ事を求めた。陪審員一同は又立上つてどやどやと相談室に行つた。其室に入ると一同は申合せたやうに直ぐ巻苜を取り出し

て吹かし始めた。風采の好い裁判通の紳士に誰やら陪審長になつて呉れないかと持ち出した、すると他の皆が又直ぐそれに賛成した、そして巻苜の吸殻を投げ棄て、法廷に引き返した。選ばれた裁判通の紳士は自分が陪審長に擧げられた由を裁判長に告げた、そして一同は順々に靠れの高い椅子に二列になつて着いた。

一切の順序は何等の遅滞なく而も嚴肅にずんずん進行した、そして其のさつさと次から次へ規則通りに威儀を備へて展開して行く具合は、参列者一同に如何にも愉快を味はせるらしかつた、即ち一同眞剣な重大な公務に執掌しつゝあるやうな而して社會に尠からぬ貢献をしつゝあるやうな信念を抱くのであつた。ネクリュウドフもさういふ氣持になつた。

陪審員一同が席に着くと、裁判長は彼等一同に彼等の權利と義務と責任とに就いて一言した。その間彼は一寸もぢつとしてゐなかつた。左の臂をついたり、右に變へたり、椅子の後ろに靠れたり、左右の腕かけに凭りかゝつたりした。一束の紙を卓の上にきちんと揃へたかと思ふと、ナイフを取つたり、さうかと思ふと鉛筆を弄つたりした。陪審員一同の權利といふのは裁判長の言葉によれば、彼等は裁判長を経て被告に問をかける事も出来、又鉛筆や紙を渡され、證據物件を調べてもよいといふ事などで、彼等の義務は誤りのないやうに公正に審理裁判をするにあるといふ事、それから若しも彼等が此室での審議の秘密を守らないと



か又は局外者と共同行爲を取るとかいふ場合には懲罰に服せなければならぬといふのが  
彼等の責任なのであつた。

五六

九

それが済むと裁判長は被告に、

「シモン・カルティンキン。起立。」

シモンは物に追はれるやうに慌しげに飛び上つた。その頬の肉は前より一層早くびくびく  
動いた。

「其方の名は？」

「シモン・ペトロフ・カルティキンと申します。」と彼は金切聲の早口に答へた。

「身分は？」

「百姓でござりまする。」

「原籍地は何處だ？　そして何郡？」

「ト、ウラ縣、クラピラ郡、クウビヤンスク區、ボロック村でござりまする。」

「年齢は？」

「三十四で。はい、生れましたは千八百……。」

「宗旨は？」

「露西亞正教會の信者でござりまする。」

「妻があるか。」

「いえ、結婚はまだ一度も……。」

「現在の職業は？」

「マウリタニア旅館の雇人でござりまする、はう。」

「前にも法廷に出た事があるか。」

「いえ、決して、そねえな事、手前、以前はな、それは……。」

「罰を受けた事はあるか。」

「いえ、決して、決してござえやせん。」

「起訴狀の寫しは持つて居るか。」

「はう。」

「着席。」

そして裁判長は女の被告の一人に言葉をかけようとした。がシモンは立つた儘で席に着か



ないで、被告の一人のポオチニコワの前を塞いでゐた。

「カルティンキン、席に着け。」

それでもカルティンキンは立つた儘でゐた。

「カルティンキン、席に着け。」

なほもカルティンキンは立つた儘であつたが。法廷取締が大きな目をして横を向きながら急いでやつて来て、さも氣を揉んだらしい聲を絞つて「席に着けつたら、席に着けつたら。」と囁く、とそれで辛と着いた。その着き方は立ち上つた時と同じに亦慌しいやり方であつた。それからカルティンキンは自分の獄衣の裾などを揃へ、又もや頬の肉をびくびく動かした。始めた。

「其方の名は？」と裁判長は面倒臭げな溜息を洩して、見やりもしないで第二の被告に問をかけながら、自分の前にある書類に目を通した。彼は事件を早く片付けやう爲めに同時に二つの事をするのは些とも珍らしくも何ともなかつた。

ポオチニコワ、四十三歳。町人の娘。籍はコルムナ町。職業は同じくマウリタニア旅館の給仕女。今迄に法廷に引かれた事なく、今度の起訴状の寫しは受取つた。此女の答へ方は並外れた圖々しいもので、その調子は「さうです、其の寫しは受取りましたとも、そして私は

傲然としてゐるのさ、誰だつて私を笑つたりなんぞする事は出来やしない」とでも云ひ度さうであつた。彼女は問ひが済むと、まだ席に着けと云はれもしない中に直ぐ着いた。

「其方の名前は？」と裁判長は第三の被告に問ひをかけた。そしてマスロオワがそれでも猶ほ立たないでゐるのを見ると、彼は柔かに親切さうに云ひ足した。「立たなくちやいけない。」マスロオワはすつと立上つた、其際彼女の胸はひよいと前へ突き出た、そして疾つくに待ち設けてゐたかのやうな顔色をして、少し斜を見る黒い目元に微笑を浮べながら、答へはしないで裁判長の顔をに、つと打見た。

「其方の名は何？」

「リュウポフと呼ばれてますの。」

其間にネクリウポフは鼻眼鏡をかけて此の被告の女をつくづく見てゐた。「いや、これではあるまい、そんな筈がない」と彼は彼女の顔より視線を一寸も離さずにさう思つた。「だがリュウポフだと？」と女がさう云つたのを聞いては尚ほと注視した。

裁判長は尚ほ引續いて尋ねようとしたが、金縁眼鏡をかけた判事が何やら彼に囁くと、彼は肯いて、そして又被告に、

「リュウポフとは何ういふわけ？ 爰にはそれと違つて書いてあるが。」



被告は黙つた。

六〇

「其方の本當の名前は何といふんだ、それを本官は尋ねるのだ。どういふ名前で洗禮を受けたのだ？」と六ヶ敷屋の判事が尋ねた。

「以前はカタリイナと申しました。」

「そんな事がある筈はない」とネクリュウドフは呟いた、併し彼は今はや一點の疑もなく、これがあの女だ、あの娘だ、半ば女中として半ば養女として育てられたあの女だ、といふ事を知つた。此女に彼は一度は戀をした、本當に戀をした、そして亂暴にも手籠めにして墮落させ、そして其上振り捨てたのであつた。けれども其後彼は再び思出しもしなかつた、思ひ出すのは餘りに辛い事であつた、餘りに激しい責苦を嘗める事であつた、それを思ひ出してみるとしたら、名望の高い自分として得々としてゐる彼は、實は名望などは、これんば、か、しも無いばかりか、彼女に對して實に言語道斷な下劣を働いてゐるのではなかつたか、それが同時に思出されずにはゐない事であつた。さうであつた、これが彼女であつた、人間の顔が一人一人皆違つてゐて決して又と同じ顔のあり得ないといふ其不可思議極まる唯一な根本的固有性を彼は今にしてありありと認める事が出来るのであつた。顔の色が不自然に白くはあ

るけれども、又その顔が肥つてはゐるけれども、確かに其顔に、其唇に、稍藪に見る其目に、かの固有性、可愛い唯一の固有性が認められるのであつた、殊に無邪氣な微笑を湛へる其目元に、何事も疾くに待ち設けてゐるかのやうな表情に、而してそれは顔のみならず全身の姿恰好に。

「それならそれと云はなくちや。」と裁判長は又もや優しく尋ねた。「親の名は？」

「私、私生兒ですの。」とマスロオワは云つた。

「それでも其方の名付親の名では何と呼ばれてゐた？」

「ミハイロフナつて。」

「それにしても、あの女がどんな悪い事をしたのであらう？」とネクリュウドフは其間にも續けて考へながら息苦しい思を嘗めた。

「其方の苗字は？ 姓は？」と裁判長は尙ほ續けた。

「母方の苗字でマスロオワとしてありますの。」

「身分は？」

「町人。」

「正教徒かな。」

「えゝ、さう。」



「職業は？ 何をして渡世をしてゐる？」

マスロオワは黙つた。

「何を渡世としてゐたのかね？」

「御存じのくせに、」とマスロオワは微笑を湛へて云つて、ちらと後ろを振り向いたが、又直ぐ裁判長の顔を見た。彼女のさうした顔の表情には何だか知れぬ異常なものが籠つてゐた、彼女の返答の意味に、彼女のさうした微笑の中に、さては、ちらりと室内を見廻はした彼女の目付には、何だか知れぬ戦慄すべきもの悲惨な凄愴なものが籠つてゐた。裁判長も我とはなしに目を伏せた位であつた。室内は、しんとした。傍聴席より起つた一寸の間の笑聲に其沈黙は途絶えたが、又他の側より「謔」と云つた注意で直ぐ又舊に復つた。裁判長は頭を上げて、又もや問ひを續けて行つた。

「前には法廷に喚び出された事はないか。」

「一度もござりません。」と答へて彼女は軽い溜息を洩らした。

「起訴狀の寫しは受取つたらうな。」

「は。ソ。」

「着席。」と裁判長は問ひを終つた。

被告は上衣の後ろを少し褰げ、盛装の貴婦人が其裳の裾をさばくやうな具合にして席に着いた。そして小さい二つの手は獄衣の袖口の所で重ねて、目は裁判長の顔より離さなかつた。證人の數が檢められ、その中の幾人かは釋放され、醫者を鑑定人として出頭さす可きか否かと決定され、其醫者を今法廷に呼び出す事などが吟味された。

それから書記は起訴狀を読み上ぐ可く立上つた。その読み方は高い聲で遠くまで聞えるやうには響いたが、あまりに早いので、rとrとの發音が悪いのと、その總體はのべつまくなしの、何が何やら分らない、睡氣の種の雜音になつた。裁判官等は或は椅子の臂掛けの片方に靠れかゝつたり、又は他方に靠れなほつたり、或は卓の上に乗しかゝるやうに臂を突いてみたり、又は後ろへ反りかへつてみたり、目を開いてみたり又閉ぢてみたり、そして互に何やらひそひそ話し合つたりした。

憲兵の一人は込み上げて來る吹吐を幾度も無理に噛み殺してゐた。

男の被告カルテインキンは絶間なく頬の肉を動かしてゐた。ポオチュコワは落着き拂つて眞直ぐに腰かけ、時々指先きで布の下から頭を搔いてゐた。

マスロオワは身動きもせず腰掛けたまゝ、ちつと聞いてゐたが、時としては、ぞつと全身を慄はしたり、又何やら反對したさうな様子をしたり、顔を赤めたり、深い溜息を洩らしたり、



両手を重ね直したり、<sup>あたり</sup>四邊をちらと見やつたり、そして又熱心に朗讀者に耳を傾けたりした。

ネクリュウドフは凭れの高い椅子の前列の二番目に腰をかけて、鼻眼鏡をかけたまま、絶えずマスロオワを見やつてゐた。錯雜無限な悲痛な戦が今彼の魂の中には起つてゐるのであつた。

XX

起訴状の云ふ所は次の通りであつた。

「千八百何年一月十七日第二組合の商人テラポント・エメリアノキッチ・スメルコフ、旅館マウリタニアニ於テ頓死シタリ。

第四區ノ警察醫ハ此ノ死ハ酒精性飲料ヲ過多ニ飲用シタル結果、心臓麻痺ヲ起シテ招致シタルモノナル旨ヲ確言セリ。

スメルコフノ死體ハ埋葬ニ附シタリ。

數日經過シタル後、スメルコフノ同郷人ニシテ其旅行ノ同伴者タリシ商人テイモオヒン、ペテルスブルクヨリ歸リ來リ、スメルコフ死亡ノ狀況ヲ詳細ニ聞キ、スメルコフハ金錢掠奪

ノ目的ヲ以テ毒殺サレタルモノニアラズヤト云フ嫌疑ヲ申シ出デタリ。

ソノ嫌疑ハ豫審ニヨツテ確認セラレタリ、ソノ項目左ノ如シ。

第一。スメルコフハ其死亡前ニ三千八百ルウブル銀行ヨリ引出シタリ、ソノ時刻ハ死亡ヲ去ル僅々數時間前ニ過ギズ。然ルニ死亡者ノ遺物ヲ檢スルニ三百二十ルウブル十六コベエケンヲ餘セルノミ。

第二。スメルコフハ其死亡ノ前日及ビ前夜ヲ悉ク娼婦リュウボフ（カタリイナ・マスロオワ）ト共ニリュウボフノ居所及ビ旅館マウリタニアニ於テ過ゴセリ。カタリイナ・マスロオワハスメルコフノ委託ヲ受ケ、自宅ヨリマウリタニア旅館ニ赴キ、旅館ノ雇人オイフェミア・ポオチュコワ及ビシモン・カルティンキン兩人ノ面前ニ於テ、スメルコフヨリ渡サレタル鍵ヲ以テスメルコフノ鞆ヲ開キ金員ヲ取り出シタルモノナリ。マスロオワガ鞆ヲ開キシ際、其場ニ居合ハシタルポオチュコワ及ビカルティンキン兩人ハ百ルウブル券ノ束アルヲ認メタリ。

第三。スメルコフガリュウボフヲ伴ヒ旅館マウリタニアニ戻リ來リシ時、リュウボフハ旅館ノ雇入カルティンキンノ勸メニヨリ、ブランディヲ盛りタルコップニ白色ノ粉末劑ヲ投入シテスメルコフニ與ヘタリ、ソノ粉末劑ハカルティンキンガリュウボフニ與ヘタルモノナ



リ。

六六

第四。翌朝リュウボフハ證人ノ一人ニシテ彼女ノ雇主タルロザアノワニスメルコフノ金剛石指環ヲ賣渡シタリ、ソノ指環ハスメルコフガリュウボフニ與ヘタルモノナリト云フ。

第五。旅館ノ雇女ポオチュコワハ、千八百ルウブルノ金額ヲ商業銀行ニ預ケタリ。

スメルコフノ死體ヲ發掘シテ解剖ニ附シ、ソノ内臟ニ化學的分析ヲ施シ、以テ裁判法醫上ノ檢視ヲ遂グルニ、死亡者ノ機官ニ毒ノ存在スルコト明白トナレリ。ソノ結論ハ即チ此ノ死亡ガ毒殺ニ由ルモノナルヲ證ス。

マスロオワ、ポオチュコワ、カルティンキンノ三名ハ被告トシテ法廷ニ於テ皆自己ノ罪ニ服セズ、ソノ云フ所ニヨルニ、マスロオワノ陳述ハ、彼女ハ實際スメルコフノ委託ニヨリ金員ヲ持來ルベク旅館マウリクニアニ赴キタルコト、スメルコフヨリ渡サレタル鍵ヲ以テ其旅館ニ於テスメルコフノ靴ヲ開キ、委託サレタル如ク其中ヨリ四十ルウブルヲ取りタルコト、サレド夫レ以外ニハ一文ノ金員ヲモ取ラザリシハ、其靴ヲ開キシヨリ再ビ閉セシマデ其場ニ居タルポオチュコワ及ビカルティンキン兩名ノ證シ得ベキ筈ナルコト。ナホマスロオワノ言ニヨレバ、彼女ハ再ビ商人スメルコフノ室ニ來リシ時、カルティンキンノ促シニヨリブランデイニ實際一包ノ粉末劑ヲ投入シテスメルコフニ與ヘタルコト、而シテ其粉末劑ハ彼女ハ睡

眠劑ト思惟シ、夫レニ由テスメルコフヲ睡ラシメ以テ速カニ歸ルコトヲ得ンガ爲メニナシタルコト。指環ハスメルコフガ彼女ヲ打擲シ彼女ガ泣キテ歸ラントセシ時彼ガ自ラ與ヘシモノナル事。コレ皆マスロオワノ云フ所ナリ。

オイフミア・ポオチュコワノ言ニヨレバ、ポオチュコワハ紛失シタル金子ニ就テ毫モ知ル所ナク、商人スメルコフノ室ニ行キタル事ナシト云フ。ソノ室ニ於テ事ヲ爲セシハリユウボフ唯一人ニシテ、若シ商人スメルコフノ物品ニシテ盜難ニ罹レリトセバ、ソハリユウボフノ盜ミシモノナルベク、スメルコフノ鍵ヲ携ヘテ金子ヲ取ルベク來リシガ何ヨリノ證ナリト陳述シタリ。』

書記が朗讀して此處になると、マスロオワは愕いて身を起した。そして口を開いたまゝポオチュコワを見詰めた。

書記はなほ讀み續けた。

『ポオチュコワハ其ノ銀行ニ預ケタル壹千八百ルウブルノ金子ヲ如何ニシテ得タルカトノ問ニ答ヘテ、夫レハカルティンキント共ニ拾貳年間ノ奉公中ニ節約シテ貯蓄シタルモノニシテ、カルティンキントハ近ク結婚セントスル意志アリタリト陳述シタリ。』

シモン・カルティンキンは最初ノ審問ニ於テ白狀シタル所ニヨレバ、鍵ヲ携ヘテマスロオワ



ガ馬車ニテ旅館ニ來ルヤ、彼ハマスロオワニ教唆サレテポオチュコワト共ニ金子ヲ竊取シ、  
彼及ビポオチュコワ、マスロオワノ三人ニテ分配シタリト云フ。』

其處に來るとマスロオワは再び愕いて身を慄はし、顔を赤くして躍り上つた、そして何  
やら云ひ出さうとした。が法廷取締が云はせなかつた。  
書記はなほ朗讀して行つた。

『而シテカルティンキンハ最後ニ、商人スメルコフヲ睡ラシムベク彼ガマスロオワニ粉末劑  
ヲ與ヘタル事ヲ明白シタリ。然ルニ其後ノ審問ニ於テ彼ハ、彼ガ金員竊取ニ加ハリシ事ヲ  
モ又マスロオワニ粉末劑ヲ與ヘタル事ヲ否定シタリ。一切凡テノ事ハマスロオワ唯一人ニ  
テ爲シタリト彼ハ云ヘリ。ポオチュコワガ銀行ニ預ケタル金子ニ關シテハ、ポオチュコワト  
同様ノ陳述ヲナシタリ、即チ旅館奉公ノ拾貳年間ニ兩人ニテ旅客ヨリ祝儀トシテ得タルモノ  
ナリト云ヘリ。』

起訴狀の結末は次の通りであつた。

『以上ノ事態ヲ考査シテ、百姓シモン・カルティンキン三十四歳、町人ノ女オイフ・ミア・ポ  
オチュコワ四十三歳、同ジク町人ノ女カタリイナ・マスロオワ二十七歳ノ三名ハ千八百何年  
一月十七日、前述ニ於ケルガ如ク共謀シテ、商人スメルコフノ金子及ビ指環、價格貳千五百

ルウブルヲ竊取シ、スメルコフ殺害ノ目的ヲ以テスメルコフニ毒ヲ與ヘ、由テ以テ其死ヲ招  
致シタルモノトシテ起訴サル、モノナリ。

此ノ犯罪ハ刑法第一千四百五十三條第四項及ビ第五項ニ於テ規定セラレタル所ナリ。依テ  
刑事訴訟法第二百〇一條ヲ基礎トシテ百姓シモン・カルティンキン、町人オイフ・ミア・ポオ  
チュコワ及ビ町人カタリイナ・マスロオワノ三名ハ陪審裁判ニ附セラルルモノトス。』

それで書記は長い起訴狀の朗讀を終り、それを疊んで席に着き、自分の長い髪を兩手で撫  
でた。一同は氣が軽くなつて、ほつと一息つき、扱てこれから審問が始まり程なく一切萬事が  
明白となり而して正理公道に満足が與へられるのだといふ意識を愉快さうに味ふのであつ  
た。

獨りネクリ・ウドフはさうでなかつた、彼が十年前に無邪氣な純潔な少女として知つてゐ  
たあのマスロオワが、こんな怖ろしい罪を犯してゐるであらうかと思ふと、彼は悚然とせず  
にはゐられなかつた。

起訴狀の朗讀が終ると、裁判長は左右の判事に何事をか諮り、扱てそれから第一にカル



ティンキンを目で磨いて「さあ爰ではもう一切萬事些細な事に至るまで明確に分るのだぞ」と豫め云ひ聞かせるかのやうな顔つきをして言葉をかけた。

「百姓シモン・カルティンキン。」と彼は身を左へ傾げながらやり出した。

カルティンキンは立上つた、両手を脇腹につけ、上半身をずつと前屈みになつた。彼の兩頬は絶間なく音なく動いてゐた。

「其方は千八百何年一月十七日にオイフェミア・ポオチュコワとカタリイナ・マスロオワと共謀して、商人スメルコフの鞆の中よりスメルコフの金子を盗み取り、それから粉薬こなぐすりを持つて来て、それをブランデーに入れてスメルコフに飲ませるやうにカタリイナ・マスロオワを唆かし、それに由てスメルコフが死ぬ事になつた、と云ふその罪人として其方は告發されてゐるぞ。罪に服するか。」さう云つて裁判長は又右に靠れた。

「どう致しまして、そんな事がありますもんで……はい、手前共はたゞ御客様方の御用を致しまするので、はい……。」

「そんな事は云ひたければ後で云へ、告發されてゐる罪に服するのか、どうぢや。」

「どう致しまして、私はず、その……。」

「そんな事は後廻しにしる。罪に服するのか、服しないのか。」と裁判長は落着き拂つて、併

し嚴乎と云つた。

「それは、手前、出来ましねえでござりまする、何故と云つて……それは……。」

法廷取締は又もやカルティンキンの前へ飛んで行つた、そしてさも氣を揉んだらしい聲を絞つて黙れと囁いた。

裁判長は、もう此の事件はこれで終つたのだとでも云ひさうな顔つきをして、紙を持つてゐる方の手の臂を突き直し、そしてポオチュコワに向つた。

「オイフェミア・ポオチュコワ、其方は千八百何年一月十七日、マウリタニア旅館でシモン・カルティンキンとカタリイナ・マスロオワと共謀して、商人スメルコフの鞆の中より金と指環を盗み、それを二人で分配し、そして其犯罪を隠す爲めにスメルコフに毒を飲ませて殺したと告發されてゐるぞ。その罪に服するか。」

「私は少しも悪くはござりません。」とポオチュコワは圖々しく確りした聲で答へた。「私はちよいとでもあの室へは参りませんでござります。此の悪い奴めが、此の女めが入つて行つたのでござりまするから、此の女めが仕事でござります。」

「そんな事は後で云へ。」と裁判長は前と同様に穩かに併し嚴として云つた。「それで、罪に服しないといふのか。」



「私はお金を盗みは致しません、又毒をやりも致しません、私は一度もあの室には参りませんから。若し私が中に入つて行きましたとしたら、私この女めを突き出してやるのでござりましたのに。」

「その方は罪に服しないと云ふのだな？」

「決して服しは致しません。」

「よろしい、よく云つた。」

「カタリイナ・マスロオワ。」と裁判長は第三の被告に向つた。「其方はマウリタニア旅館の商人スメルコフの室に鍵を持つて靴を開けに行き、その靴の中より金子と指環を盗み……」諸記してゐる讀本の章句を誦誦するやうに云ひ、そして其時左隣の判事が證據物件の目次中の毒を盛つたコップが足りない由を囁いたのに耳を傾けてから、「……その靴の中より金子と指環を盗み、」と繰返して「そして夫れを三人で分け、それから其後其方は商人スメルコフと一緒にマウリタニア旅館に赴き、スメルコフに毒を入れたブランディを飲ませ、其爲めにスメルコフは死んだと告發されて居る。罪に服するか。」

「少しも罪はございません。」と彼女は口早に「私は先に申しました通りに今も申しますわ。私は盗みを致しません。指環はスメルコフに貰つたのでございます。」

「其方は二千五百ルウブルを盗んだといふ罪には服しないのだな。」と裁判長は尋ねた。

「私は先に申しました通り、云ひつかつた四十ルウブル以外には何も取りは致しません。」

「扱てそれでは、其方はブランディに粉薬を入れてスメルコルフに飲ましたといふ罪には服するか。」

「それは致しましたと申し上げます、ですけれど其粉薬は眠り薬で、別に何の害にもならないと云ひ聞かされましたから、それで飲ましたのでございますの。毒薬だなんぞとはちよつとも思つて居りませんでしたわ、又毒を飲ませようなんてそんな事夢にも思つてはゐませんでしたわ。神かけて申し上げます、そんな心は決して持つてゐませんでしたわ。」

「それでは其方は商人スメルコフの金子と指環を盗んだといふ罪には服しないのだな？」と裁判長は尋ねた。「併しスメルコフに粉末劑を飲ましたといふ事は承認するのだな？」

「それは有體に申し上げます、それはたゞ睡り薬だとばかり思つたからでございます。それを飲ませましたのは、それでスメルコフが睡りさへすればよいと思ひまして。私決して殺さうなんて思ひは致しませんでしたわ、又毒にならうなんてちよつとも思つてはゐませんでしたわ。」

「よろしい。それでよい。」と裁判長は如何にも豫期してゐた効果を得たかのやうに満足さ



うに云つた。『それでは、さ、白状した事件の顛末を話すのだ。』さう云つて裁判長は椅子の後ろの靠れによりかゝり、兩手を卓の上に打載せ、『事の次第を残らず話すがい、正直に有りの儘を云へば其方の爲めになるぞ。』

マスロオワは熱心に裁判長の顔を眞正面に見守つて黙つてゐた。

『事の次第ですつて？』マスロオワは急に早口で話し出した。『私、旅館に行きましたわ、そして室に案内されましたわ、そこにあの男がゐましたの、もう疾つくにぐでんぐでんに酔つ拂つて——あの男がですの——』その「あの男」といふ言葉を彼女は一種特殊な嫌惡の表情をして大きい目をして云ふのであつた。『私は歸らうとしましたの、でもあの男それを許しませんでしたの。』

彼女は黙つた、それは急に話の筋道を失つたかのやうな、でなければ何か他の事を考へるかのやうな恰好であつた。

『そして、それから？』

『それから私少しの間其處に居ましたわ、それから家へ歸りましたの。』

その時副検事は顔を上げ、へまな具合に片肘をついて身を支へた。

『何か質問があるのですか。』と裁判長は問うて、さうだといふ副検事の答に、それでは何か

質問をするがよいといふ目配せをした。

『私は被告が以前よりシモン・カルティンキンと知合ひであつたか否かの問をかける事を申出ます。』と副検事はマスロオワを見やりもしないで云つた。それから口を結んで六ヶ敷い顔をした。

裁判長はマスロオワに向つて其問ひを繰返した。マスロオワは恐さうに副検事を見た。

『シモンとですか、え、知合ひでございました。』

『本官が今爰に聞き度いと思ふのは、被告とカルティンキンとの知合ひがどんな知合ひであるかと云ふ事である。二人は度々相會する事があつたか。』と副検事は尋ねた。

『どんな知合ひつて、そりや、カルティンキンは私を御客の所へ連れて行くんですもの。知合ひつて夫れだけの事ですわ。』とマスロオワは答へて、副検事と裁判長とを交る交る不安さうに見た。

『本官が知り度いと思ふのは、カルティンキンが何故マスロオワのみを客の所へ連れ行くか、他の女を何故連れ行かないか、その理由である。』と副検事は狡猾なメフィスト式の微笑を浮べて尋ねた。

『何故ですか、それは私知りませんわ。』と被告は答へた。そして恐さうに邊りを見廻したが、



その時、ちらと彼女の視線はネクリュウドフの顔を掠めた。「それは連れて行き度いと思ふ者を連れて行くんでせうよ。」

「おれを見分けたんだらうか。」と思つてネクリュウドフは悚然とした。彼は血が自分の顔にさつと上つたのを感じた。がマスロオワは別段彼に氣を留めたでもないらしく、すぐ彼方へ向いて副検事を又恐さうに見つめた。

「それでは被告はカルティンキンと或る特別な親密な関係のあるといふ事を否定するものだな。よろしい、よく分つた。夫れ以上は質問無し。」

副検事は直ぐ様肘を卓より下ろし、何やら熱心に書き始めた。併し實際は何も書いてゐるのではなく、自分の覺書きの文字の上を鉛筆で二重に模して行くのであつた。彼は多くの檢事や辯護士などが計略上の質問を提出した上で自分達の發言事項に何等かの参考個條を作つて反對派の云ひ分を粉碎する積りのやり方を心得てゐたのである。

裁判長は直ぐは被告の方へ振向かなかつた、といふのは彼は其時金縁眼鏡の判事に、既に豫め案を立てて、ちやんと書き留めておいた質問個條をこれから始めようと思ふが、それに同意であるか否かと尋ねてゐたのである。

「それから何うした？」と裁判長は尋ねた。

「馬車で家へ歸りましたの。」とマスロオワは愈裁判長のみを見て、そしてはや何もかも信頼し打委せたかのやうな調子で答へた。「そして寝みましたわ。すると私がまだ睡附いたか睡附かないかの時分に、ベルタと云つて矢張り一緒に居ります女が私を起すのですよ、お起きよ、お起きよ、お前さんの御客が又見えたのよ、御酒が飲み度いつてさ。さう云つて起しましたのよ。でも其時はあの男はお錢はすつかり使つちまつてゐましたの。それで私を旅館の自分の室に使にやりましたわ、そしてお錢のある處と何れだけ取つて來ればよいといふ事を云ひましたわ。それで私馬車で行きましたの。」爰でも「あの男」といふ言葉を彼女はさも厭さうに云つた。

裁判長は其間に左隣の判事に何か囁いてゐたので、マスロオワの云ふ事には氣を留めてゐなかつた。けれども残らず聞き取つたといふ様子を見せるために、マスロオワのお終ひの言葉を繰返して、

「で、其方は馬車で行つた。そして、それから？」と尙ほさきを尋ねた。

「向うに着きますと、私はあの男に云ひつかつた通りの事をしましたの。でも私一人で其室にはひつたんぢやありませんわ。私カルティンキンと此處に居ります此女を呼びましたの。」と彼女はポオチュコワを指して云つた。



「嘘でござります、私ははひりはしませんよ。」とポオチョコワが喋り出した。が直ぐ様黙らせられた。

「二人の目の前で私赤い色の拾ルウブルの札を四枚取りました。」と彼女はポオチョコワを見もしないで云つた。

「其時にだね、被告はその四十ルウブルを取つた時、靴の中に幾ら、錢があつたか氣付かなかつたか。」と又もや副検事は尋ねた。

マスロオワは副検事にさう云つて問はれると、又ぞつと縮み上つた。彼女は副検事を何う思つてよいか分らなかつた、たゞ何しろ彼は彼女に對しては悪い事を考へ企んでゐさうで仕方がなかつた。

「私數へはしませんでしたわ、だけど慥に百ルウブル券が幾らもありましたの。」

「被告は百ルウブル券のあつたのを目撃したと。——よろしい。ほかに質問はない。」

「で、それから何うした。其方は其錢を持つて行つたか。」と裁判長は云つて、自分の時計をちらと見た。

「え、持つて行つてあの男に渡しましたの。」

「それで、それから？」と裁判長は又尋ねた。

「それからあの男また私を連れて行きましたの。」とマスロオワは云つた。

「それで、其方は何うしてブランドイに粉末劑を入れて其客に飲ましたのだ。」と裁判長は尋ねた。

「どうして飲ましたかつて。それは私ブランドイに其粉藥を入れましたわ、そしてそれを飲ませましたわ。」

「何故飲ましたのだ。」

彼女は黙つてたゞ深い溜息をついた。

「あの男矢張り私を放さなかつたんですもの。」と彼女はやつと答へた。「私はあの男は煩さくつて仕方がなかつたのですもの。私は廊下に出ましてね、カルティンキンに會ひましたのでさう云ひましたわ。どうかして歸して呉れないかしら、私くたびれちまつたからつて。するとカルティンキンが、俺等だつてあの客にやあうんざりしてまさあ、睡り藥を飲まさうぢやあるめえか、すりやあの客すぐ睡り込まあな、それでお前さん歸りやいゝやなつて云ひましたの。それで私、そりやいゝわねと云ひましたわ。私その睡り藥はちつとも毒にはならなと思つてゐましたもの。そしてカルティンキンは私に小さい紙包みをくれました。それから私は又室の内へ行きましたの。お客は衝立の彼方に寝てゐましたわ、そして又直ぐコニヤッ



ク(佛國のブ)を飲ませろつて云ひましたの。私は卓の上の壺を取つてコップに二つ注ぎましたわ、お客のと私のに。そして御客の粉薬を入れて飲ませましたわ。それが毒になる事知つてゐるなら、どうして私、そんな、飲ましたりなんかするものでございますか。」

「よろしい。それから指環はどうして其方の手に入つた？」

「あれはお客が自分で私に呉れましたの。」

「いつ呉れたのだね。」

「私があつた男と一緒に馬車で旅館に來ましてから、私が又歸らうとしますと、あの男は私の頭を打ちまして、櫛を折つたりしました、その室で。私は怒つて出て行かうとしました、するとあの男は指環を自分の指から抜いて私に呉れまして、其代りに歸らないで傍に居れと云ひましたの。」

そこで又もや副検事は空惚けた顔つきをして身を起し、なほ少し質問をし度いといふ許しを求めた。その許しを得ると彼は金線入りの襟に首筋を引付けながら問をかけた。

「本官は被告が商人スメルコフの室に幾時間居たのか、それを知り度いのである。」

再び彼女は恐怖に襲はれた。不安さうに彼女は副検事と裁判長とを交る交る見て、それから取急いで答へた。

「どの位おりましたか、私覚えてゐませんの。」

「被告は商人スメルコフの許を出てから、其旅館内の何處かに行きはしなかつたか、その覚えはないか。」

マスロオワは考へた。

「隣の空間に行きましたわ。」

「何故その空間にはひつた？」と副検事は尋ねた。

「馬車の來るのを待つてゐましたの。」

「カルティンキンも同じく其室に居たのではないか。」

「カルティンキンもはひつて参りましたわ。」

「何故カルティンキンはひつて來た？」

「お客のコニヤックがまだ残つてゐましたの、それで二人で飲んで終ひましたわ。」

「うむ、二人で飲んでしまつた。よろしい。そして被告はカルティンキンと何か言葉を交へたであらうな、何事を話した？」

女の顔は再び曇つた、が又眞赤になつて、そして云つた。

「何事を話したかつて？ 私ちつとも覚えて居りません。何とかあなた方の御考通りになす



つて下さいまし、私は悪い事は致して居りません、それは私どこまでも申します、何も話は致しませんでした。ありました事は、私一切お話し申しました。」と彼女は答へた。

「私はもう質問する事はありません。」と副検事は裁判長に云つた。そして兩肩を、へまに聳やかして、被告マスロオワがカルティンキンと共に人の居ない室に入つたといふ自白に就て自分の辯論の草案に何やら少し書き加へた。

廷内はしばらくの間しんと静つた。

「其方はもう夫れ以上何も申す事はないか。」

「何も残らず申しました。」と答へてマスロオワは深い溜息をつき、席に着いた。

それから裁判長は紙に何やら書きつけ、左隣の判事が何やら囁くのに耳を傾けてから、十分間の休憩を宣言し、そしてすつくと立つて出て行つた。

裁判官が皆立上ると、續いて陪審員も辯護士も證人も皆ぞろぞろと其處を出た、そして或る一廉の重要な公務の一部分をはや爲し終つたといふ様な氣持をさも愉快さうに味はつた。ネクリュウドフは陪審員室に入つて、その窓傍に腰をかけた。

## 一一

さやう、それがカテュウシヤであつた。

過ぎ去つた昔の事が再びネクリュウドフの前にありありと浮び出た。

彼がはじめてカテュウシヤを知つたのは大學の三度目の半學年の時、土地所有に關する起草中の論文を携へて其夏中を叔母達の許で過ごした時であつた。一體なら彼は母や姉達と一緒に夏はモスカウの近くにある母の所有地の邸で暮らすのであつたが、其年は姉が結婚し又母は外國へ湯治に行つたので、論文を書く仕事を持つてゐたネクリュウドフは其夏は叔母達の許で過ごさうと決心したのであつた。叔母達は甥であり相續人である彼を可愛がり、彼も亦叔母達を愛してゐた、叔母達の舊式な一切のやり方をも簡易な暮し方をも愛してゐた。

はじめて世の青年が他の指揮監督を俟たずたゞ本來の至純な自己其物によつて此の人生の美と意義との全體を覺認し得る彼の大愉快期、此の世に人と生れて正に知つてゐなければならぬ所の、自己と全世界との無限的完成の可能を認知し冷かな希望によつてよりも寧ろ滿腔の信頼を捧げて其完成に歸依没入し、以て理想するあらゆる完成の過程を證するに足る可き貢献の如何に重大なるかを覺認し得る彼の大愉快期を、ネクリュウドフは其夏しみじみと經驗した。其身も彼は大學でスペンサアの『社會平衡論』を通讀し、土地所有に關するスペンサアの意見に甚深の感銘を享けてゐた、それは特に彼が恰も一大地主の息子であつたから



である。彼の父親は富裕ではなかつたが、母親が殆ど一萬デッシェインの地面を持參して來たのであつた。その頃はじめて彼は土地私有の不正不當な所以を悉く理解した。そして道義的な衷心の要求の爲めに犠牲を捧ぐる事を無上の精神的愉快としてゐる一人であつた彼は、自分の土地所有權を受けないと決心した、そして其頃父親より受繼いだ土地を百姓達に分與する事にした。彼の論文の題材もその事であつた。

その田舎の叔母達の許で過ごした其年の彼の生活は、先づ朝は非常に早く、時としては三時頃に起き、日の出前に、或はまだ薄暗い味爽に家を出て山の麓を流るゝ川に泳ぎに行つた。そして草や花にまだ露のおいてゐる中に家に戻つて來た。朝の珈琲を飲んだ後で仕事の論文にかゝる事もあり、又その源泉たるスペンサアの本などを通讀する事もあつた、けれども書いたり讀んだりする事をやめて家を出て野や森を歩き廻る事も決して少くはなかつた。晝食前には庭の何處かで少し眠り、食後は叔母達と冗談を云ひ合つたり、自分の愉快を分けてやつて叔母達を笑はせたり娛ませたりした。それから又馬で散歩をするか、ポオトを漕いで遊ぶかし、夜になると又本を讀み、さもなければ叔母達と話をしたりトランプの一人遊をやつたりした。時としては氣が餘りに強く昂つて、夜半に眠れない事もあつた、殊に月夜にはよくそれがあつた、そんな時は彼は庭の中を様々な夢想や空想に浸りながら夜明けまでも

彼方此方へと歩き廻つたりした。そんな風に靜穩に幸福に、彼は田舎滞留の初めの月を送つて、半ば小間使として半ば養女として育てられてゐた足の早い目の黒いカテウシヤには氣も留めずに居た。ネクリウドフは母の羽交の下に大事に育てられて十九になつてもまだ全くの無邪氣な坊ちやんであつた。女性といふものは彼はたゞ自分の妻となるものとしてより外には考へてみる事も出来なかつた。自分の妻になれさうもないすべての娘達は、彼に取つては女性ではなくて、寧ろたゞ彼と同様の人間であるに過ぎなかつた。

たゞ其夏の昇天祭の頃、隣屋敷の貴婦人が二人の娘に一人の高等學校生といふ三人の子供と、自分の家に客として滞留させてゐる農民階級出の美術家を一人と連れて訪問に來た。

茶の出た後で、既に刈り込まれた家の前の芝生で遊び事がはじまつた時、カテウシヤも呼んで加へられた。

直ぐとネクリウドフはカテウシヤと一緒に逃げねばならない番になつた。ネクリウドフはいつも悦んでカテウシヤを見てゐた、けれども二人が特別に仲よく遊んだりする事であらうなどは、彼は一寸も思つてもみはしなかつた。

『あの二人はどうも捕まへる事出来ないなあ。』と氣輕な美術家は云つて、その短い、少し内側へ彎曲つた併し頑丈な足で非常に速く走つた。『轉けないやうに御用心。もうあの組に追つ



「ききは出来ませんぞ。」

「一、二、三。」と三度手を拍つ音がした。カテウシヤは可笑しさに吹出さずにはゐられなかつた、そして大急ぎにネクリュウドフと場所を入代つた、そして其の力ある小さい両手でネクリュウドフの大きい片方の手を握つた、そして急いで左の方へ走つた、糊の入つた上衣がバサバサと音した。

ネクリュウドフは美術家に捕まれまいと思つて急いで走つた、そして全力を出して其前を駆け抜けた。そして振返つてみると美術家はカテウシヤを捕まへようとして追つかけてゐた。けれどもカテウシヤは其敏捷しつぱいい小さな足で走つて、なかなか捕まれなかつた、そして左の方へ走つた。彼女の前には一寸した灌木の叢しげみがあつて、その後ろには誰も逃げ込んでゐなかつた。カテウシヤはネクリュウドフの方を見返つて、その叢の後ろで一緒にならうと頭で合圖をした。ネクリュウドフはそれと悟つて其叢の後ろへ走つた、ところが其處には彼の知らなかつた小さい凹みがあつて、蕁麻いんまが一ぱい繁つてゐた。ネクリュウドフは轉んで蕁麻に手を刺された。そして其時はや置いた夜露に濡れながら、笑ひながら彼は起上つて芝生の方へ行つた。カテウシヤは露に濡れた黒スグリ (die schwarze Johannisbeere) のやうに輝く目をして嬉しさうに微笑んでネクリュウドフの方へ飛んで行つた。二人は一緒になると手

と手と握り合つた。

「あなた蕁麻いんまに刺されて？　ね、さうでせう。」彼女は片方の手で髪かみの具合を直しながらさう云つて、せつせと息つきながらネクリュウドフを見上げた。

「あすこに凹みくぼみがあらうとは知らなかつたものだから。」と云つて彼は彼女を笑ひを含んで上より見下みくだしながら、彼女の手を離さなかつた。彼女は又なほ一層近く寄り添つた、そして彼は何うしてとは知らず自分の顔を彼女の顔に近く寄せた。彼女は避けなかつた。彼は彼女の手をきゆつと強く握り緊めたかと思ふと、彼の唇くちびるに敏捷しつぱいく接吻した。

「あれ、まあ、そんな。」と云つてカテウシヤは手を振り放して走つて行つた。

カテウシヤは叢しげみの所に行つた、そして小さい枝を二つ折り取つて、かつかと熱あつる自分の顔をそれで煽あふいだ。彼女はネクリュウドフをちらと見やつた、そして両手を矢鱈やたらに打振りながら遊び仲間の方に戻つた。

此時以來ネクリュウドフとカテウシヤとの間は變つて來た。互に引付けられる若い無邪氣な青年男女の間にいつも起つて來る一種固有な純潔な思は、亦二人の間に醸かされて來た。

カテウシヤがたゞ室にはひつて來たばかりでも、又は彼女の白い前掛を遠くからちらと見た許りでも、ネクリュウドフには周圍の一切が太陽の光を浴びてゐるやうに輝いて見えた。



一切が今迄になかつた感興と喜悅と意義とを齎し來つた、生きて行く事の喜びがたゞもう刻々に充ち満ちて來た。その思はカテウシヤとても同じであつた。それはネクリュウドフの側で云へば、たゞカテウシヤが傍に居る時とか近くに居るのを知つてゐる時とかに感ずるのみではなく、たゞカテウシヤといふ者が此世に居るといふ事を意識してゐるだけでさうであつた。又カテウシヤの方でもさうで、たゞネクリュウドフといふ男が居ると知つてゐるだけでさういふ悦びを抱いてゐるのであつた。ネクリュウドフは母より何か面白くない手紙を受取つたり、又は論文が思ふやうにはかが行かなかつたり、或は若い者にありがちな憂鬱に閉ざれたりする時は、たゞカテウシヤが居る、カテウシヤの顔を見れると思ふだけでよかつた、たゞさう思つてみるだけではや一切の不愉快は消え失せてしまふのであつた。

カテウシヤは何かと随分家事の手傳ひをしなければならなかつた、けれども夫れをしてしまつてから、又其他の暇の時には、本を読んだ。ネクリュウドフは自分の讀み終つたドストイエフスキイやトルゲニエフの諸作をカテウシヤにやつた。殊にカテウシヤはトルゲニエフの *dad Hilleben* が好きであつた。言葉を交したりするのは廊下で出會つた時とか、エランダで一緒になつた時とか、又は玄關先きでとか、たまにはカテウシヤと部室を一緒にしてゐる女中のマトレエナ・パウロフナの傍でとか、ほんの其折々々の一寸した時の

みであつた。たまには女中部室にネクリュウドフが茶を飲みに行く事もあつた、そしてマトレエナの居る傍で三人で取とめもない話などする事もあつた、それは亦娛しいものであつた。けれどもそれも全く二人つきりの場合だと、妙に話が喉につかへて出なかつた、そしてたゞ目と目とが他の事を云つてゐて、それは素より口と口との云つてゐる事よりも大切ではあつたが、口元さへ妙に氣遣はれて、一種特殊な不安に壓迫され、すぐ二人は分れ分れに行つてしまふのであつた。

二人の間の此の状態は、ネクリュウドフが叔母たちの家に最初逗留してゐた間變らなかつた。叔母たちも氣付いて愕いた、で、レネ・イワノフナ(ネクリュウドフの母)の外國の旅先きに手紙を出したりした。叔母の中の年上のマリア・イワノフナは、若しやドゥミトリイとカテウシヤの間に間違ひでも出來たら大變だと心配した、けれども夫れは餘計な苦勞であつた。ネクリュウドフのカテウシヤに對する愛は純潔な青年によくある無意識の愛であつて、その愛こそ却て彼をも彼女をも墮落に對して防ぎ護る神符であつたのである。彼は彼女を自分の物にしようなどとは思つてゐなかつた許りでなく、さうする事の可能を思つてみた許りでもはや自ら愕き怖れてゐた。であるから夫れよりも年下の叔母のソフィア・イワノフナが、物事に一圖なあのネクリュウドフの事であるから、どんな娘にしる夫れを一度可愛いと思つ



たら、その身分だの家柄だのには頓着なく直ぐ正式に結婚をしましなうかど氣遣つて  
ゐた觀察の方が、餘程眞實に近いものであつた。

若し當時ネクリュウドフがカテウシヤに對する自分の愛を十分に認めてゐたとしたら、そ  
して殊に誰かが彼にカテウシヤのやうな身分の低い娘と夫婦になどなる事は絶対に出來な  
いとでも云ひ聞かしたとしたら、彼は自分の純正な氣性の赴くまゝにどんな決心をしたか分  
らなかつた、一旦一人の娘に愛を注いだ以上どんな事があらうとも其娘と正當な結婚をせず  
には置かないと云つたに相違なかつた。けれども二人の叔母も自分達のそんな心配を當のネ  
クリュウドフには云ひはしなかつた、そしてネクリュウドフもカテウシヤに對する自分の愛  
を意識する事なしに再び旅立つて行つたのであつた。

彼はカテウシヤに對する自分の其心持は、たゞ自分の身心内に人生の歡喜が漲り溢れて  
ゐるからで、尙ほ又やさしい娘の彼女にも同じ悦びがあるからだと許り思つてゐた。けれど  
も彼が愈暇を告げて出立する時、そして叔母達と一緒にカテウシヤも玄關前まで出て來て  
其少し斜視になる黒い目に涙を湛へて見送つた時、その時彼は何だか二度とは得られない美  
しい尊い物を棄てて行くやうな氣がして、深い深い悲みを覺えないわけには行かなかつた。  
「さやうなら、御機嫌よう、カテウシヤさん、何かにつけて御世話にばかりになりましたね。」

と彼はソフィアの頭越しに云つて、輕快な馬車に打乗つた。

「さやうなら、どうぞ御機嫌よろしう、ドゥミトリイ・イワノオキツチ様。」と彼女は其響き  
のいゝ人懐こい聲で云つた。彼女は目に一ばい漲つた涙を落すまいと無理矢理に抑へて、そ  
して内に駈け込んでから思ふさま泣いた。

### 一三

それから三年が間ネクリュウドフとカテウシヤは遠く離れてゐた。彼が陸軍士官になつて  
所屬の隊へ赴任する途中に再び叔母達の家に寄つた時、その時やつと彼は又彼女を見た。け  
れども、もはや其時の彼は三年前の夏を其地で過ごした時の彼とは全くの別人であつた。

三年前には、彼は自分の事などは捨て、願みず、善い事ならば何であらうと身を投出して  
盡すといふ忠直な青年であつた。併し今はたゞ享樂にのみ日を送つてゐる、辭令に巧みな不  
身持な利己主義者であつた。昔は彼に取つて此の世界は莊嚴な神祕なものであり、彼はそれ  
を敬虔な歡喜を以て親ひ知らうとしてゐた。今は併し此世にある一切は彼には何でも簡單明  
瞭で、たゞ彼の身を置いてゐる生活状態に適合するか否か、其周圍の事情のみを顧慮して決  
定されてゐた。昔は彼に切要なのは自然に親しむ事であつた、又彼以前に生活し思索し感激



した幾多の詩人や哲學者に親しむ事であつた。今はたゞ人間の作つた諸制度や諸規則、それから彼同様の仲間との交際のみが必要でもあり、値打でもあつた。昔はあらゆる女は彼に取つて神祕であり敬虔な感激の本であつたが、今は女といふものはたゞ無上の娛み物、玩弄物たるに過ぎなかつた、彼自身の近い親戚の女性と同僚の妻君とだけは其例外にしてゐた。昔は金は彼には寧ろ厄介物であつた、母より貰ふ額の三分の一でも彼は不自由はしなかつたらうと思はれた、土地を百姓達に呉れてしまふ事も何でもなかつたらうと思はれた。それが今は母より月々仕送られる千五百ルウブルでやつとの事であり、その爲に母と面白くない言葉を取交はす事さへ珍らしくなくなつてゐた。昔は自分の精神的本質を本當の「我」と思つてゐた彼は、今はたゞ肉體の健康な愉快な動物的自我をそれと思ふやうになつてゐた。

彼がそんなに全くひどい變り方をしたのは何の爲でもなかつた、たゞ彼が自分を信ずる事をよして他を信ずるやうになつた爲であつた。それは又自分を信じて生きて行くといふ事が餘りに困難だからでもあつた。自分を信じて行くとすれば、どのやうな問題でもたゞそれを輕浮な愉快にのみ向ふ動物的自我に阿つて解決はされないに相違なかつた、寧ろ殆どあらゆる場合に其反對となる可きであつた。けれども他を信じ他に打まかせて世を渡るとすれば、其處にはもはや何も解決を要するものはなく、一切が既に解決されてゐるのであつた、しか

も夫れがいつも精神的自我に反對して動物的自我の好都合に解決されてゐるのであつた。のみならず彼が自家に忠實であつた時は、いつも彼は人々に苦々しく思はれてゐたが、他に打任せて生きて行くやうになると、彼の周圍は皆彼に賛同を吝まなかつた。

でネクリュウドフが正義だとか貧富だとかいふ事を考へたり、その話をしたり、又はそんな事を書いた本を読んだりしてゐると、彼の知人は皆彼の考を厄介視した、中には愚弄の種にするものもあつた。彼の母や叔母達は彼に名づくるに *notre cher philosophe* (我々の親愛なる哲學者)といふ柔和な譯名を以てした。併し若し彼が小説を読んで聞かしたり、いかゞはしい話をしたり、佛蘭西式劇場に道化芝居を見に行つたり、又それを歸つてから陽氣に話して聞かしたりすると、皆は彼を褒めそやした。彼が質朴な生活をしようと思ひ立つて、古い外套を着たり、酒を一滴も飲まない事にしたりと、それは氣違ひじみてゐるとか、故意に街つて奇抜ぶるのだとか云つて貶された。けれども獵だとか又は非常に贅澤な住居の設備だとかに夥しい金をかけたりすると、皆に其趣味を褒められもし高價な贈り物などされたりもするのであつた。彼が童貞を守つて、結婚する迄は女の肌に觸れたりしないと思つてゐる時は、彼は家族の者等に不具ではないだらうかと氣遣はれ、彼が實際一人前の男になつて或る同輩の關係してゐた佛蘭西女を横取りしたと彼の母の耳に入つた時は、母にさへ叱られる



い許りか却つて満足に思はれた。たゞ併しカテウシヤに關した話になると、そして彼が若しかして彼女と本當の結婚をしましはしないだらうかといふ事については、彼の母親は心配なしには居る事が出来なかつた。

ネクリュウドフが丁年に達してから、土地私有は不正だと云つて父より譲られた少しの土地を百姓達に分けてやつた時も、矢張り同様であつた。——母を始め一門の人達は愕き呆れた、ネクリュウドフの其のやり方は一家一門の者が彼に對して浴せかける非難と嘲笑の材料になつた。百姓どもは土地を貰つてそれで富裕にならなかつた許りか、働く事をしないで村中に居酒屋などを三軒も拵へたりして、その爲め却つて貧乏になつたではないかとは、彼が絶えず聞かされる冷罵であつた。

ネクリュウドフが近衛の隊に入つて其同僚達と同様に様々な事をするやうになり、賭博に金を使ひこんで、母に、基本財産にまで手をつけさせるやうな事をして、母は殆ど何の小言をも云はなかつた。寧ろ母はそれは當然な事である、のみならず好い事である、上流社會の者が其の若い時に種痘をすましたのであると思つた。はじめはネクリュウドフも戰つた、併し彼が自己の信念に忠實である限りは善であると思つてゐる事一切が他よりは惡とされ、惡と信じてゐる事一切が他よりは悉く善とされるので、その戦は餘りに辛かつた。その結果

ネクリュウドフは自分を捨て、他に打任せる事になつてしまつたのである。さうなつても其初めは自分より離れ去る事が彼には不愉快であつた、併しそれは長くは續かなかつた、そして其頃からネクリュウドフは直ぐ煙草も吹かし酒も飲むやうになつた。自己より離れるといふ不愉快は消えて、寧ろ重荷を卸した氣持を覺えた。

そしてネクリュウドフは其の新しい、四圍の誰彼にも善しとされてゐる生活に、自分の持前の情熱の全部を投げ出してかゝつた、そして兎もすれば猶ほ自分の心の底で或る何等かの善事に憧れて叫び訴へようとする聲を窒息させた。その生活改悪は彼がベテルスブルクに行つてから始まり、更に軍隊に入るに及んで愈其頂點に達した。

軍隊生活は人を全然無爲逸樂に陥れ、人間として誰しも持つてゐなければならぬ義務より引離し、その代りとして隊の名譽とか軍服や軍旗の名譽とかいふものに無理にも奉仕させるのである。そして世上の風紀を亂すのである。一面に於ては普通一般の人に對して此上もなく威張り散らし、他面に於ては上長官には奴隸的服従をするのである。

軍服の手前とか軍旗の名譽とかいふものがあり、それに亂暴狼藉や傷害殺人の免許がついてゐる此の軍隊生活の風紀壞敗作用が、搦てゝ加へて金持や上流家庭出の士官のみの採用される近衛聯隊でのおきまり通り、豪奢な放蕩によつて、又宮中や皇族間にも出入するやうに



なる事によつて、愈益其威を逞くして來ると、それは一旦其處に陥つた人の子を後には全然度す可からざる我利々々亡者にしないではおかぬのである。ネクリュウドフとても同じ事ではや軍隊に入り他の士官連と同じ生活をするやうになつてからは、忽ちさういふ亡者状態に入つたのであつた。

九六

他人手に丁寧なブラシなどかけられた贅澤な金筋入りの正服を着け、矢張り他人手になつた武器、他人手に磨かれ他人より捧げて渡される武器を佩き軍帽を被り、なほ又他人手に育てられ騎り馴らされ秣かはれた馬に打乗り、そして練兵をしたり、閱兵式や觀兵式に臨んだり、同じ亡者連中と共に砲を打たせ合つたり、劍を振つたり、銃を打つたり、又そんな事を他人にも教へたりするより外には彼には仕事はなかつた。それが一切であつた。そして若き老いたる高貴な方々、皇帝を初めとし其周囲の誰も彼も、皆それをたゞ可しと云ふばかりでなく、褒辭を下し皇帝の感謝を傳へるといふ有様であつた。

それから同輩が一緒に寄り集ると、何處から金を持つて來るのやら、誰も彼も無茶に費ふ、飲む、食ふ。將校俱樂部や一流の料理屋は其根城である。それから芝居に行く、舞踏に行く、女を買ふ、それから又馬乗り、閱兵式、劍振り、砲、それから又宴會、酒、トランプ、女。軍人でない者がそんな生活をしたければならぬとしたら、その心の奥に疚しさ恥かしさ

を感じないではゐられない筈であるのに、士官連はそれを恥ぢないのみか寧ろそれを彼等の本領としてゐるに至つては、軍隊といふものの墮落は特に云ふ迄もないのである。併し彼等はそれを誇として大言壯語する、殊に戦時に於て甚しい。そしてネクリュウドフが軍隊に入つたのも亦恰も對土耳其古宣戰の出た後であつたのである。「我々はや國家の爲めに身命を擲つて戦に赴く覺悟をしてゐるのである、だから斯様な愉快をやるのは單に許されてゐるばかりではない、實に我々に取つて必要なのである。だから今後も斯うして行くのである。」とは彼が其時期に於て最も明瞭に考へてゐた事である。彼は自分が以前に自分に課してゐた一切の道德的束縛より脱出した愉快を飽かず味ひ貪つた、そして絶えず昏々として我利々々亡者の慢性的状態に墮してゐたのであつた。

三年經つて二度目に叔母達の家に寄つた時の彼は、即ちさういふ心の彼であつた。

#### 一四

ネクリュウドフが叔母達の家に寄つたのは、恰も其處が先發聯隊の方へ行く途に當つてゐたからであり、又叔母達がしきりに彼に寄るやうに云つてやつたからでもあつたが、それよりも彼の第一の動機は又カテウシヤに會つてみたいのであつた。それは彼の心の奥に於て



恐らくカテウシヤに對する善からぬ考が頭を擡げてゐたのであつて、今や無拘束になつた彼の動物的性情は、その善からぬ考を彼に囁いてゐたのである。併し彼は自分でさうとは承認しなかつた。彼はたゞ嘗て愉快な日を送つた地を再び訪ひ度い、今は滑稽にも思はれるが人の好い叔母達、それとは知らさないでいつも自分を愛と悦びの空氣で包んで呉れた叔母達を訪ひ度い、それから自分に愉快な思出のあるあの可愛らしいカテウシヤにも會つてみたいのだ、とたゞさう思つてゐた。

三月末の復活祭前の金曜日に、車軸を流すやうに降る雨を冒して、ぶ濡れになつて彼は來た、そして随分寒がつたが、併し其頃の彼はいつも愉快さうにびんびんしてゐた。

「まだあの娘ゐるか知ら。」煉瓦の塀で圍まれた、よく見覚えのある古風な、雪の積んだ門内に馬車を入れながら、彼はさう思つた。彼はカテウシヤが彼の馬車馬の鈴の音を聞きつけて走つて出て來はしないだらうかと思つてゐたのであつた。けれども出迎へたのはたゞ前掛を裏けて桶を提げた跣足の女二人つきりであつた、それは其邊の敷石を洗つてゐたらしかつた。カテウシヤは其處に顔を出さなかつた、大階段の上でも前垂掛けで拭き掃除をしてゐたらしい下男のテイホンに逢つたきりであつた。年下の叔母のソフィアが絹服を着て頭巾を被つて直ぐ正面の室に出て來た。

「まあ、よく來たのねえ。」と云つてソフィアは彼に接吻した。「マリアの叔母さんは少し氣分が悪くつてね、それに御寺へ行つたので疲れておいでなの。今日は聖晚餐式をやつたのよ。」  
「それは御目出度う、叔母さん。」と云つてネクリュウドフはソフィアの手に接吻した。「こんなに濡れて來まして、どうも濟みません。」

「ぢやあお前の部屋に行くが、よ、ほんとに濡れ鼠ねえ。それにお前もう口髭を生やしたの。カテウシヤ、カテウシヤ、早く珈琲を出してお上げよ。」

「はい、只今。」と聞覚えのある愉快な優しい聲が廊下の方から答へた。

ネクリュウドフは悦しさに胸がどきどきした。「居るなあ」と彼は思つた。彼は日の出に會つたやうな氣持がした、そして、ここに、こゝして昔棲んだ自分の室へテイホンと一緒に行つて服を着更へた。

ネクリュウドフはテイホンにカテウシヤがどんな風に日を送つてゐたか、又まだ結婚しない模様であるか等と尋ねてみ度いと思つた。しかしテイホンが餘りに鹿爪らしく畏り過ぎて、お手をお洗ひ遊ばせなどと云つて彼の手に水をかけてやることに一心になつてゐるので、ネクリュウドフもカテウシヤの事を思ひ切つて尋ねてみる氣になれなかつた。で彼はただテイホンの孫の事や、年の老つた馬の事や、番犬のポルカンの事などを尋ねたりしたき



りであつた。皆無事で壯健だつた、ボルカンだけが去年恐水病に罹つて死んだとの事であつた。

ネクリュウドフが濡れた着物をすつかり脱いでしまつて乾いたのを着ようとしてゐる時、小刻みな早い足音が聞えて、コツコツと戸口を叩く音がした。その足音も其ノックもネクリュウドフにはよく覚えのあるものであつた。「おはひりなさい。」

カテウシヤは入つて來た。矢張り同じカテウシヤであつた、たゞ三年前よりも一段と可愛らしくなつてゐた、そして彼女の笑みを含んだ無邪氣な黒い目は矢張り以前のやうに下から彼を見上げるのであつた。三年前のやうに矢張り眞白な清潔な前垂をかけてゐた。彼女は包みから出した許りの香氣の高い石鹼とタオルを二枚と持つて來たのである、一つは露西亞流の大きいので一つは摩擦用の手拭であつた。壓してある文字の凹みも鮮かな、まだ誰の手に觸られた事もない石鹼と、二枚のタオルと、それにカテウシヤ其人と——どれも皆揃つて無垢清淨な氣持の快いもののみであつた。愛らしい彼女の唇は昔のやうに優しく蓄んで、包みきれない悦しさを湛へてゐた。

「ほんとに御機嫌よろしう、ようこそ來らして下さいましたのねえ、ド・ミトリイ・イワノ オキッチュ様。」と彼女は深い昂奮を覚えながら、やつと夫れだけ云つた。

「御機嫌よろ。御機嫌よろしう。」と云つて、彼は馴れ馴れしい前の云ひ方がよかつたか、それとも丁寧な後の方かと、それも惑つて彼女の様に顔を赤くした。「御壯健？御丈夫で？」  
「は、お蔭様で有り難うございますわ。叔母様があなた様の御好きの薔薇の香入りの石鹼を此處におよこしになりましたから。」と云つて彼女は其石鹼を卓の上に、タオルを椅子の上に置いた。

「旦那様はちやんと御自分の石鹼をお持ちになつてまさあ。」とティイホンはネクリュウドフの用意のよいのを褒めるやうな調子で云つて、様々な瓶だのブラシだの香料だの其他一切の化粧品を入れたネクリュウドフの銀の蓋の開いてゐる大きい旅行用化粧箱を指さした。

「叔母さんに好くお禮を云つて頂戴。私は此家に来てどんなに嬉しいんだか。」とネクリュウドフは云つた。彼は昔のやうな光明と悦びを心の奥で再び感じた。

カテウシヤは返辭の代りに微笑を見せて、そして出て行つた。  
いつもネクリュウドフを可愛がつた二人の叔母達は、今度は又いつも以上に悦んでもてなした。甥のド・ミトリイは今度は戦争に行くのである、行けば負傷もしやう、戦死もするだらう。それを思つて叔母達は非常に感動してゐたのである。

ネクリュウドフは此度の旅の豫定は叔母達の家にはたゞ一日だけ止る積りをしてゐたので



あつた。が再びカテウシヤに會つてみると、彼は二日間に行はれる復活祭過ぎまで逗留する事に都合をつけ直した。そして仲よしの同僚セエンボックに電報を打つて、オデッサで會ふと約束をしておいたが、彼も此地に来るやうにと云ひやつた。

再びカテウシヤに會つてみると、はや其日よりネクリュウドフは彼女に對する昔のやうな心持を覺えた。カテウシヤの白い前垂を見ると彼は昔のやうな感激を覺えずにはゐられなかつた。彼女の足音を聞き、聲を聞き、笑聲を聞くと、彼は再び昔のやうな喜悅を覺えずにはゐられなかつた。彼女の黒く輝き匂ふ目を見れば、殊に笑みを含んだ時の其目を見れば、又彼女が彼に會つて頬を赤くするのを見れば、彼は深い感激に驅られないわけには行かなかつた。自分は戀をしてゐるのだと彼は感じた、併しそれは昔の彼に取つて戀が一種不可思議な神聖なものであり、又彼自身それを自分に承認しても居らず、又若し戀をするとすれば夫れは人間一生の間にたゞ一度きりあり得るものと確信してゐた當時の、それとは違つてゐた。戀をしてゐるのだと今は自分で意識して、その意識が今は彼には愉快であつた。たゞ其の戀がどういふ處にあるのだから、又その結果がどんな事になりさうなのだから、それには彼は今はたゞ朦朧たる意識を持つてゐるのみであつた。

人皆にある通り、ネクリュウドフにも精神的資質と動物的資質との二つが根を張つてゐた

前者は他人にも幸福となるやうな幸福のみを自分の爲めにも求めるのであるが、後者は自分以外の全世界を犠牲にしてもたゞ自分だけに幸福になるものを得ようとする努力する熱情であつた。彼得斯堡に於ける生活と軍隊生活とによつて遺憾なく増長した我利々々亡者の時代の今は、彼の心身内に威を逞くしてゐるのは云ふ迄もなく動物的資質であつて、精神的資質はその爲めに全然壓服されてゐた。併し親しくカテウシヤを見れば、彼は又昔彼女に對して感じてゐた思を再び覺えないわけには行かなかつた。精神的資質が再び頭を擡げたのであつた、そして其權利を強硬に主張するのであつた。復活祭前の二日間、ネクリュウドフ自身十分に意識はしなかつたが、彼には絶えぬ内心の戦があつた。

内部よりの聲は彼に切りに促し迫つた、出立しなくてはいけない、もはや暫時も逗留してはいけないと。彼も其逗留が善い結果を生まうとは思はなかつた。けれども其危急な必要を彼自ら承認しないで逗留してゐるといふ事が、彼には非常に愉快であつた、暖い嬉しい氣持であつた。

復活祭の日曜の前の夕方になると、牧師と副牧師が早朝の供養をする爲めにやつて來た。その話す所によれば、彼等は寺から此邸までの三エルスト(一エルストは我が九町四十七間弱)の道を橋で、水溜りやら雪の消えて地の露出した箇所やらを非常に難澁してやつて來たのであつた。



ネクリュウドフは叔母達や男女の雇人達と共に供養の済むまで其場にゐて、絶えずカテウシヤを眺めてゐた。カテウシヤは入口の傍に立つて牧師に香爐を渡したりした。それからネクリュウドフは牧師や叔母達と復活祭の挨拶を交して寝に行かうとしたが、丁度其時叔母のマリアの女中のマトレエナがカテウシヤと廊下で、これからお寺へ行つて復活祭のパンと復活祭の御菓子を御供へするのだと云つて其準備をしてゐるのを聞いた。「おれも行かうや」と彼は思つた。

寺までの道が橋でも馬車でも行けさうになかつたので、叔母達の家にも自宅に居ると變らず何事も自由のきくネクリュウドフは、馬に鞍をおかせた、そして寝に行く代りに金びかの正服をつけ、しつくり肌につく騎馬用ズボンを穿き、マントを打羽織つて、肥つた老馬を絶えず嘶かせながら、雪と水溜りの道を寺の方へと騎つて行つた。

## 一五

其朝の禮拜はネクリュウドフの一生に取つて最も明るい強い思出の一つであつた。彼がただ處々に明るく雪の輝いてゐる深い暗闇を、雪消の水の中などを過ぎながら寺の前に來た時は、禮拜ははや始まつてゐた、彼の騎つて來た牡馬は寺の圍りに澤山點されてゐる燈火を見

て双方の耳を欬てた。

地主の甥のネクリュウドフを知つてゐた百姓達は、彼を地面の乾いた處につれて行つた、そこで彼は馬より下りた、百姓達は馬を杭に繋いで彼を寺の中へ案内した、寺にはや祭禮好きの民衆で一ぱいになつてゐた。右側には手製手織の長い上衣を着て木皮の靴を穿き、新しい白い足纏ひの布を着けた年上の百姓達や、新しい布の長い上衣に鮮かな色の帯を緊めて、長靴を穿いてゐる年若い男達が立つて居り、左側には赤い絹やら又は赤く明るい袖のついた天鵞絨の上衣やら、又は青赤緑其他の外装やらを着て踵の高い長靴を穿いた女の群が立つてゐた。その後ろには白い布や鼠色の長い上衣や其他古風な服などを着け、靴や足纏ひの布などをした遠慮深げな女達が立つてゐた。其の傍には香油をてらて、塗つた子供の群が立つてゐた。

男の百姓達は空に十字を切り頭を垂れ、顔にかゝつた髪を又後ろへ振りやつたりした。女達、殊に年の老つた女達は其のどんよりした目を蠟燭の燃え輝いてゐる聖像に向けながら、物を摘むやうに描へた指を頭の布ぎれや額や肩や脇腹などに強く當て、信心深げに何やら口の内に唱へつゝ、立ちながら上半身を屈めるもあれば跪いて祈るもあつた。子供達は大人達のする通りに眞似、見られると殊に熱心に祈るのであつた。聖像を安置してある金の



厨子は金紙を巻いた蠟燭の光に向一段と輝きわたつた。大きい吊燈籠には無数の蠟燭が立てて點してあつた。合唱の中には或は呻るやうな低音で又は細い高音で自由志願の樂人達の嬉しさに歌ふ聲が聞えた。

ネクリュウドフはずつと前の方へ行つた。前方の中央は特別席で、そこには何處かの地主夫婦が水兵服の男の子を連れて腰かけて居り、田舎の警察署長、飾りのある長靴を穿いた商人、何かの徽章をつけた村の長老が腰かけ、祭壇の階段の右手には地主の妻君の後ろにマトレエナ・パウロフナが煌びやかな淡紫の着物に白い肩掛をかけて立ち、その傍にカテウシヤは腹部に髪をつけた白の服に空色の帯をしめ、黒い髪には赤のリボンをつけてゐた。

一切が壯麗で嚴肅で華やかであつた。銀の刺繍をして金十字を無数につけた煌びやかな盛装の司祭の牧師、金銀を繡ひつけた袈裟を纏うてゐる副司祭の僧や役僧達、髪も油で艶やかに撫でつけ美々しく派手やかに着飾つた自由志願の樂人達、さては晴れやかな祭の歌、彩り飾つた蠟燭を手にする牧師達より絶えず繰返し授けられる一般民衆の祝福の言葉、——何もかも皆美しかつた、「基督は復活り給へり」、「基督は復活り給へり」と絶えず繰返される念誦の聲を浴びてゐる夫れ等一切が美しかつた。——けれども一等美しいのはカテウシヤであつた、白い服に水淺葱の帯をしめ髪に赤いリボンをつけて目は悦びに輝いてゐるカテウシヤが一等美しかつた。

ネクリュウドフは自分をカテウシヤが正面に目を上げて見こそしないが、自分が來てゐる事をちやんと知つてゐると思つた。又それは彼が祭壇の方へ彼女の直ぐ前を通つて行く時によく分つた。彼は彼女に用があるのではなかつたが、何となりとも言葉をかけたいと思つた。

「お祭が濟めば精進は終ひにするつて、叔母が云ひましたよ。」

彼を見る時いつもきまりである通り、彼女の愛らしい顔には、さつと若い血が上つた、そして悦びに満ち溢れてゐる黒い無邪氣な彼女の目は、つこりして彼を見上げた。

「私、存じますの。」と答へた。

その時一人の役僧が銅の壺を持つて群衆を分けて行つたが、カテウシヤに氣付かないで法衣の縁で彼女に軽く觸つた。それは其役僧がネクリュウドフに恭しく道を避けようとしたからで、全くの偶然に過ぎなかつた。しかしネクリュウドフはそれを怪しんだ、此處にある物一切、此世にある物一切は、たゞカテウシヤの爲めにあるのではないか、天地萬物何が蔑ろにされてもいゝがたゞ彼女だけはそれではいけないではないか、彼女は此世の最も尊い物一切の中心ではないか、それをあの役僧は知らないらしいが、と怪しんだ。金色の光眩



い聖像の厨子も、無數に燃え輝いてゐる蠟燭の光も、「復活り給へる祭は今ぞ、悦べ人々今日の日を」の歌も、此世にありとある美しい物は皆悉く彼女の爲めにあるとしか思はれなかつた。襲のある白い服を着けた彼女のすらりとした姿を見ると、なほ又悦びに輝いた其顔を見ると、彼はさう思はずには居られなかつた、又其顔はネクリウッドの魂の奏でてゐる歡喜の樂のすべてを彼女の魂も同じく切に奏でてゐる表情に相違なかつた。

朝の祭と晝の祭の間の時間にネクリウッドは堂を出た。人々は彼に道をあけてやり、又腰を屈めて敬つたりした。彼を知つてゐる者もあつた、「誰方様だね。」と尋ねてる者もあつた。寺の戸口の所で彼は立止つた。乞食が幾人も寄つて來た。彼は身に持つてゐた小錢は残らず施してやつた、そして階段を下りた。

はや夜はあけて明るくなつてゐたが、日はまだ出なかつた。人々は寺の前の墓地に出て來た。カテウシヤはまだ寺の内に居た、ネクリウッドは立止つて待つた。

人々は雪崩のやうに外に出て來た。その階段を下りて墓地へ行つて散らばらになるのが、鋏を打つた靴で敷石の上を歩むのでかつかつと音がした。ネクリウッドの叔母達の許に雇はれてゐる頭のびちびち慄へる菓子作りの身長高い爺はネクリウッドに呼びかけ、復活祭の挨拶を云つて接吻をした。喉骨の出でゐる皺だらけな彼の女房は小さい風呂敷の中からサ

フランで色をつけた鶏卵を一つ取り出してネクリウッドにやつた。それから又新しい長い上衣を着て緑色の帯を締めた丈夫さうな若い百姓が微笑を含み乍ら寄つて來た。

「基督は復活り給へり。」と唱へながら彼はネクリウッドの傍に來て、百姓らしい一種の氣持よい匂ひを浴せかけつゝ、其の健康さうな生々した唇でネクリウッドの唇に正面より三度接吻をした、その短い髭に觸つてネクリウッドはもさもさと擦ばゆかつた。

その男とネクリウッドが接吻を交して焦茶色の卵を其男に貰つてゐる時、マトレエナの紫陽花色の服と赤いリボンを結んだカテウシヤの愛らしい黒い髪の間が見えた。

彼女は自分の前に居る人々の頭越しに直ぐネクリウッドを見つけた、そして彼女の顔の輝き熱るのをネクリウッドも見た。彼女はマトレエナと一緒に寺の入口の所に立つて乞食等に施し物をやつた。鼻の代りに赤い贅肉の癒着してゐる一人の乞食がカテウシヤの前にやつて來た。カテウシヤは風呂敷より何か取り出して其乞食にやり、なほ其乞食に進み寄つて、少しの厭さうな心持も見せないのみか寧ろ嬉しげな目を輝かして、三度接吻をしてやつた。それをする時彼女の目はネクリウッドの目と見交はした、そして「斯うしてもいいこと？」と彼女の目は彼に尋ねるかに見えた。

「いゝとも、いゝとも。我が戀人、すべてが善い事だ、すべてが美しい。可愛い可愛い我が



カテウシヤ。」と彼の目も答へた。

110

彼女等が階段を下りると、ネクリュウドフは彼女の傍へ行つた。それは彼女と復活祭の挨拶を交はす爲めではなかつた。彼はたゞ彼女の傍に行き度かつたのである。

「基督は復活<sup>よみがへ</sup>り給へり。」とマトレエナは頭を少し下げて微笑みながら云つた、その調子は今日は萬人皆平等一如であるとても云ふかのやうであつた。彼女はハンケチを丸めて口を拭き、そして唇を尖らしてネクリュウドフの前に寄つて來た。

「まことに復活<sup>よみがへ</sup>り給へり。」と云つてネクリュウドフは彼女に接吻をした。

それから彼はカテウシヤを見返つた。カテウシヤは顔を赤くしながら彼の前へ寄つて行つた。

「基督は復活<sup>よみがへ</sup>り給へり。ド・ミトリイ・イワノオキツチュ様。」

「まことに復活<sup>よみがへ</sup>り給へり。」そして二人は二度接吻<sup>キス</sup>し合つた、それから尙ほ今一度するものだらうかと二人とも双方で考へるらしかつたが、するがよい、しなければならぬと決心したかのやうに又接吻<sup>キス</sup>を交はした。そして二人共打笑つた。

「牧師達の所へはあなた行かない？」とネクリュウドフは尋ねた。

「いゝえ、ド・ミトリイ・イワノオキツチュ様、私達こゝに居ますの、そして少し腰かけて休み

ますわ。」とカテウシヤは一廉<sup>ひとかた</sup>の仕事を首尾よく目出度く仕遂げたかのやうな悦びの溜息を深くついてさう答へ、おづおづした娘らしい、愛らしい、少し斜<sup>かた</sup>に見る目を正面<sup>まへ</sup>にあげて彼を見た。

男女間の戀に一度は尊い瞬間がある、その戀が絶頂に達して其戀には何等の意識的な考慮的な又何等の官能的な肉慾的なもの含まれない瞬間がある。その瞬間がネクリュウドフには今此の復活祭の日に來たのであつた。彼が今にしてカテウシヤの事を思つてみるに、彼が彼女を美しいとか愛らしいとか思つて見た一切の場合も、たゞ此の今の瞬間の前にしては皆影薄く消え失せてしまふものであつた。よく撫でつけられた光澤<sup>つや</sup>のある黒い髪の彼女の頭に、すらりとしたからだと娘らしい胸とを包んだ黴<sup>かび</sup>のある純白の着物に、さつと頬を染める若々しい血潮に、さてはおづおづした黒く輝く其目や其他彼女の一切に出てゐるものは、たゞもう處女の純潔な愛其物であつた。その愛はたゞ彼にのみ注がれてゐるのではなく——それはネクリュウドフ自身知つてゐた——全世界に對する愛であつた、又此世にある限りの美しいものに對して注がれてゐるのみならず、乞食にさへも注がれてゐるものであつた、彼女が今先き一人の乞食に接吻<sup>キス</sup>をしたのが即ち其の印であつた。

彼は前夜より其朝にかけて自分の身内にさういふ立派な愛のあるのを覚えてゐたので、今



彼女にもさういふ純潔な愛が充ち満ちてゐるのを知つた。取りも直さず彼と彼女とはさういふ愛に於て唯一人であつて二人でない事を感じた。

あゝ、彼が其時覺えた其心持を續けて行く事が出来たならば！

「さうだ、あの恐ろしい忌々しい所業は、あの復活祭の後に直ぐ出来てしまつたのだ。」と今は陪審員室の窓際の椅子に腰かけながら思ひやつた。

## 一六

寺より歸つて彼は叔母達と一緒に、精進明けにいつも精力をつける爲めに開かれる御馳走の席についた。そして軍隊でやりつけてゐる事とて葡萄酒やブランデーを矢鱈に飲んだ。それから彼は自分の室に行くと、服は其儘着ながら直ぐ横になつて睡入つてしまつた。戸をこつこつと叩く音に彼は目をさました。そのノックの音に彼はそれがカテュウシヤである事を知つた。彼は身を起して目を擦りながら伸びをした。

「カテュウシヤさんだらう。おはひり。」と立上りながら彼は聲かけた。

彼女は戸口を少しあけた。

「御食事が出来ましたの、來らつしやいな。」と彼女は云つた。

彼女はまだ同じ白い服をつけてゐた、ガリボンは髪に結んでゐなかつた。彼の目をちつと見た彼女の目は、何か非常に嬉しい事でも彼に告げ知らせるかのやうに生々いきくと輝き匂うてゐた。

「直ぐ行きます。」と答へて彼は櫛を取つて髪に當てた。

彼女は一寸の間戸口に立つてゐた。それを見た彼は櫛を放り出して彼女の方へ行つた。けれども丁度その時彼女は急に向きかへつて、いつもの輕快な敏捷まじつこい歩み方で、ついと廊下に出た。

「なんておれは間抜けだらう、引き留めればよかつたのに。」とネクリュウドフは思つた。

彼は急ぎ出て、直ぐ廊下で彼女に追ひついた。

彼は彼女に何の用があつたのやら、彼自ら知らなかつた、けれども彼女が彼の室に入つて來たので、其時彼は彼女に何かしなければならなかつたとやうに思つた、それは誰もする事であるのと思つた、そして夫れを彼はうつつかり逸してしまつたのであつた。

「カテュウシヤさん、お待ちなさい。」

彼女は振返つて、

「何か御用？」と云つて立止つた。



「用つて何もなければ、たゞ……。」

こんな場合に彼の身分位にある者のよくする事を彼は思ひ出した、そして自分乍ら無理に強ひて彼女の腰の邊りへ手を廻はした。

彼女は立止つて、ちつと彼の目を見た。

『いけませんよ、ドミトリイ・イワノキッチ様、およしなさいな。』と云つて彼女は涙の出る程顔を赤め、力を込めて彼を振り放した。

ネクリュウドフは手を離した。一寸の間は彼もどきまぎした、恥ぢた、そして自分乍ら愛想盡かした。その氣持をさうだと彼が思へばよかつた、併し其の羞恥が自分の魂の感ずる最も善い感情の一つだといふ事を彼は悟らなかつた。むしろ夫れをたゞ、まな馬鹿々々しい氣持に過ぎないと思つた、他の多くの者のするやうにしないではいけないと思つた。で彼は尙や度彼女に追ひついて抱きつき、彼女の襟首に接吻した。

その接吻は其前に二人が交へた二度のそれとは違つた種類のものではあつた、——最初のは灌木の叢の後ろで無意識にした無邪氣なものであり、二度目は今朝寺で交はした純潔なものであつた。今のはさうでなくて戦慄すべきものであつた、それは彼女もさう感じたのであつた。

「何をなさいますの。」と云つた彼女の聲は、無限に尊い何物かを今彼に再び取返しのかないやうに打壞はされてしまふかのやうな憤りを持つてゐた。そして彼女は逸散に逃げて行つてしまつた。

彼は食堂に入つた。曠衣をつけた二人の叔母と醫者と隣屋敷の婦人とがはや席に着いて、「サクウスカ」(食前に露西亞人のよく取る刺戟性の食物)や其他始めに食べる二三の料理や魚肉などにフォオクをつけてゐた。すべて平常と少しも變りはなかつた、併したゞネクリュウドフの現には嵐が猛り狂つてゐた。彼は其席で何の話があるのやら、何を話しかけられたりしてゐるのやら、少しも辨へなかつた、そして頓珍漢な返辭をしたりした。たゞカテュウシヤの事、カテュウシヤに廊下で追ひついて今先き接吻をした時の氣持、ただ夫れのみを考へた。外には彼は何も考へる事が出来なかつた。カテュウシヤが食堂に入つて來た時も、彼は目を上げて見はしなかつたが、すぐ夫れと知つた、そして彼女に自分の視線が行かないやうに勢から努めた。

食事を終ると彼は直ぐ自分の室に戻つて、ひどく昂奮しながら室内を長いこと彼方此方へと往き來した。彼は家の内に起る一切の物音に耳を傾けた、そしてカテュウシヤの足音を聞き取らうと待つてゐた。ネクリュウドフの身内に宿つてゐる動物性は今や管に其頭を擽げたのみではなかつた、最初に叔母達を訪問した時や今度も今朝迄は強く盛に生きてゐた精神的



の性情を、足下に蹂み敷いたのであつた。そして其の戦慄すべき動物性は獨り舞臺の威を逞くした。

ネクリュウドフは斯くして絶えずカテウシヤに耳を欬てゐた。しかし其日はとうとう彼女と差向ひに話を交はす機會が彼にはなかつた。恐らく彼女が避けてゐたのらしかつた。併し暮れてから、彼女は彼の隣室に行かねばならない用があつた。それは醫者が泊るので、カテウシヤは其室に醫者の寢床を展べねばならないのであつた。

彼は彼女の足音を聞き取ると、まるで悪事でも働くかのやうに息を殺して抜き足差し足で隣室に行つた。彼女はシイツの下に両手を差し入れて、枕の下に敷く褥しよねの端を寢臺の左右の隅にきちんと當てようとしてゐたが、ちらと見返つて微笑した。併しそれは以前のやうな嬉しげな爽やかな微笑ではなく、むしろ一種の怖ろしさうな心配さうな微笑であつた、あなたの爲なさらうとしていらつしやる事は悪い事ではありませんか、と彼に云ひたげな微笑であつた。一寸の間彼も亦立止つた。まだ心の戦ひに可能の餘地があつた。彼女に對する彼の本當の戀の聲は弱くはあつたが、併しまだ聞えない事はなかつた、それは彼女の様々の感情と彼女の生活とに就いて彼に訓ふる聲であつた。だが他の聲は彼に云つた、「それだ、それで貴様は絶好の機會を逸してしまふではないか、そして折角の仕合せを道化芝居にして逃してしま

ふではないか」と。此の後の聲は直ぐ前の聲を窒息させてしまつた。彼は意を決して彼女の傍へ寄つて行き、無拘束な動物的慾情の命ずるまゝに従つた。

彼は彼女を抱いて放さずに、寢臺の上に自分も一緒に轉がつた、そしてまだ夫れだけでは飽き足りないといふ思ひに、わくわくした。

「ド、ミトリイ、イワノオキツチュ様、放して下さいな、どうぞ、ね。」と彼女は聲を慄はした。「マトレエナが來ますわ。」そして彼女は身を振り放した。丁度その時實際誰やら廊下をやつて來る足音がした。

「ぢやあ今夜あなたの所へ行きますよ。」とネクリュウドフは云つた。「あなた一人つきりですうね？」

「飛んでもない事を。いけませんわ、決して決してそんな事。」と彼女は云つた。併し彼女の亂れ纏れた昂奮の全部はさう云つた言葉とは別であつた。

實際マトレエナが戸口の方へやつて來た。別な一枚の毛布を持つて室内へ入つて來た、そしてネクリュウドフを咎めるやうに見て、カテウシヤには毛布を取違へて持つて來てはいけないではないかと忌々しげに小言を云つた。

ネクリュウドフは黙つて室を出て行つた、併し最早彼は少しも羞恥を感じなかつた。マト



レエナが彼の仕打を好くは思つてゐない事、けしからぬ考を彼が持つてゐると見て取つてゐる事、それを彼はマトレエナの顔色に讀んだ。けれどもカテウシヤに對する以前の純潔な思から埒を越えて出て來た今の彼の動物的情慾は、もはや彼の全部を支配してゐるので、其他に何の考にも餘地など與へはしなかつた。彼は今肉體の慾情を満足させるには何うすればよいかを知つてゐた、そしてたゞ其事のみを考へた、それを爲遂げる手段方法のみを考へた。

其夜は彼は絶えず激しい昂奮に驅られてゐた。叔母達の室に行つてみたり、直ぐ又其處を出て自分の室に行つたり、それかと思ふと玄關の前に出てみたりした。どうしたら誰も居ない處でカテウシヤに逢へるだらうかと、絶えずそのみを彼は考へた。併しカテウシヤが彼を避けた、又マトレエナが絶えずカテウシヤには目をつけてゐた。

## 一七

人皆の寝む迄の時はさうして經つた。醫者は寢床につき、叔母達も寢んだ。ネクリウドフは毎日其時分にはマトレエナが叔母達の寢室に用があるので、あとにはカテウシヤ一人が女中室に居るのを知つてゐた。再び彼は玄關先きに出た。外は暗かつた、濕つぽく又暖か

で、白い霜は最後に残つた春の雪を溶かすのか、若しくは溶ける雪より立昇るのか、あたり一帯に罩めてゐた。家から百歩許り離れた處を流れてゐる河の方では、一種異様な音がしてゐた、それは氷の破れる音なのであつた。

ネクリウドフは玄關前の階段を降りて、水溜りやら雪の凍つてゐる處を過つて、女中部屋の窓の方へ行つた。彼は自分の耳にも入るくらゐに強く心臓の鼓動を覺えた。彼の息は窒つた、かと思ふと又直ぐ深い溜息となつて洩れた。女中部屋には小さなランプが一つ點つてゐた。

カテウシヤはたゞ一人卓の傍に腰かけて、何やら物を思ふらしく茫然と前を見てゐた。ネクリウドフは身動きもしないで、ちつと彼女を長いこと見てゐた。彼女が今誰にも見られてゐるとは知らないで、どうするのだらうと、それをネクリウドフは知り度かつた。二分間許り彼女は黙つて腰かけてゐた。それから彼女は目を上げて微笑したが、いやいや、いけないと何やら自分を咎めるかのやうに頭を振つた。そして急に兩腕を卓の上のせて少し靠りかゝり、前とは姿勢を變へて前の方をたゞ見つめた。

彼は立つてカテウシヤの方を見てゐた、そして聞くともなしに自分の心臓の鼓動を聞いた、又河の方より一種異様な音の響き來るのを聞いた。霜に閉されてゐる其の河の面には徐



徐として小止みなき自然の仕事が始まつてゐるのであつた。咆えるやうな呻るやうな又は、がらがらと強い音がするかと思へば、薄い玻璃の片らでも碎けるやうな音がした。

なほ彼は立つたまゝカテウシヤの物を案じてゐる顔を見つめた。その物案じの色は矢張彼女も心に或る惱を嘗めてゐるのであつた。それを思ふと彼は彼女に同情を覺えた。併し不思議にも其同情は彼女に對する彼の情慾を尙一層募らせた。

彼は窓をこつこつと叩いた。彼女は電氣にでも打たれたやうにはつと愕いた、その顔には恐怖の色がありありと讀まれた。それから彼女は飛び立つやうにして窓傍に行き、玻璃の面に顔を寄せた。恐怖の色は素より消えはしなかつた。彼女は両手を颯颯革のやうに双の目の左右に當ててネクリュウドフを愈それと知つた。彼女の顔は彼が未だ一度も見た事のないたゞならぬ色を浮べてゐた。彼が微かに笑つたので彼女も同じく笑を見せたが、それはたゞほんの成行きで笑つたのであつて、彼女の魂には笑どころか、有るものはたゞ恐怖のみであつた。彼は彼女に出て来るやうに手眞似をした。けれども、彼女は頭を振つて窓傍を離れなかつた。彼は尙ほも自分の顔を窓玻璃に近く寄せて、彼女に出て来るやうに呼びかけようとした。が其時彼女はふと何かに耳を欬てるやうな恰好をしたが、直ぐ戸口の方へ行つた。誰か室内で彼女を呼んだのらしかつた。

ネクリュウドフは窓から離れた。霧は非常に濃く深く立罩めてゐて、五歩ばかり離れると最早窓がはつきりとは見えない位であつた。たゞ一體に茫として暗い中からランプの赤い光が大きい暈になつて朦朧けて見えるのみであつた。河の方では相變らず咆えるやうな呻るやうな割れるやうな喚くやうな音がしてゐた。どこか近い處で鶏の鳴くのが霧の中に聞えた、すると夫れに和して他の二三の鳴く音がした。遠くでも村の方で同様に鳴く音がした、互に競うて高く鳴くかのやうであつた。河の音と鶏の鳴く音の外は、どこも此度もまだしんとして静かであつた。併しはや二番鶏の時刻であつた。

ネクリュウドフは又一二度其邊を行つたり來たりして、水溜りに足を踏み入れたりしてから、再び女中部屋の窓傍へ寄つて行つた。相變らずランプは點いてゐた。そしてカテウシヤはまだ矢張り一人つきりで、何やら決し兼ねた顔付で卓の傍の椅子にかゝつてゐた。彼が窓傍に來ると、彼女は直ぐ彼の方を見た。彼はこつこつと叩いた。彼女はさう叩くのが誰であるかを見もしないで直ぐと部屋を出た。外へ出る戸の軋つて開く音がした。彼は玄關先きで待ち構へた、そして彼女が出て来るや否やいきなり黙つて抱き締めた。彼女も彼に絡みついた、そして顔を上げた、その唇は彼と熱い熱い接吻を交はした。二人は玄關先きの隅の水のない處に立ちながら抱き合つてゐたが、彼はまだ満たされないものゝ希求にわくわくして



二二四  
わた。急に又室内で戸の開く音がして、マトレエナの腹立たしげな聲がカテウシヤを呼んだ。

彼女は振り放して女中部屋へ戻つた。扉に門をする音が彼の方へ聞えた。それから後は又しんと静かになつた。窓の赤い明りは消えた。河の面の氷の浴ける音が霧の裡に聞えるばかりであつた。

ネクリユウドフは窓傍へ行つた、併し誰も見えなかつた。彼はこつこつ叩いてみた、併し何の答もなかつた。彼は正面の入口から家の内へ戻つて自分の部屋に入つた、けれども睡れなかつた。彼は靴を脱いで廊下に出で、マトレエナとの間に少しの隔てをして部屋を同じくしてゐるカテウシヤの部分の方へ行つた。はじめはマトレエナの静かな躰が聞えたので、彼は直ぐ入らうとしたが、急にマトレエナは咳をして寝返りを打ち、ことごと寝臺の音をさせた。彼はちつと身動きもせず五分間許り立つてゐた。それから再び邊りがしんと静まつて、又もやマトレエナの静かな躰が聞えると、彼は又戸口の傍のカテウシヤの方へ、床板に音のしないやうに忍んで行つた。一切萬事しんとしてゐた。カテウシヤは眠つてゐないと見えて、その寢息が聞えなかつた。彼は彼女の名を囁くや否や、彼女は直ぐ起き上つて戸口に來て、たゞ様子だけは如何にも憤つて彼にさつさと行けと云ふかのやうに、

「何をなさいますの。そんな事なすつていい事？ 叔母様達の御耳にもはひらうもんなら、あなた……。」彼女の口はさう云つた。併し彼女の素振りには、「私あなたに身もおまかせするわ、もう私すつかりあなたの所有よ。」と云つてゐた。

それはネクリユウドフにも直ぐ分つた。  
「さ、一寸あけないか、一寸この戸をあけないか、どうぞ、どうぞ、頼むからさ。」と彼は囁いた。

彼女は何とも答へなかつた、併し彼女の手が戸の掛金を探してゐる音がした。掛金を彼女が外すと、彼は扉をあけて中に入つた。

彼は寢卷姿のままの彼女を抱いて掻き上げ、外へつれ出した。

「まあ、どうなさいますの。」と彼女は囁いた。

彼はそんな事に頓着はしなかつた、そして自分の室につれて行つた。

「あら、いけませんわ、あなた、いけませんわ。」と小聲に云つたが、さう云ひ乍ら彼女ははや自分から彼にしがみついた。

それから少し経つて、彼女はびくびく慄へながら、彼が何か云ふのを耳にも入れず、黙つて自分の部屋へ行つた。彼は又玄關前に出て其處に立止つた。



夜が明けた。河の方では氷の割れる音が尙ほ一段と高くなつてゐた。雷は併し薄れて消え、明け方の月がほんのりと現はれて、何やら黒い忌々しい物を力なく照らしてゐた。「これが何だ。おれは大きな幸福を嘗めたのか、それとも大きな不幸を経験したのか。なあに、これが世間一般の事ではないか。」と彼はさう云つて自ら慰めた。そして眠る可く自分の室へ行つた。

一八

翌日ハイカラのセエンポックはネクリュウドフと一緒に戦地へ連れ立つて行く爲めにやつて来た。そして其の上品振り、振り撒く愛嬌と、流暢快活と、鷹揚と、なほド・ミトリイとの交情の深さを見せる事によつて、直ぐ叔母達の大氣に入りとなつた。素より彼の鷹揚さは叔母達に非常に悦ばれたが、彼はその鷹揚さを過度に誇張してやる事によつて、なほ彼女等の驚嘆をさへ贏ち得た。彼は或る盲目乞食に一ルウブルを呉れてやり、此家の雇人達に心付けとして十五ルウブルを分けさせ、ソフィア・イワノフナ手飼ひのポロニヤ狎のズウゼト、カが腕に少し怪我をすると、自分が直ぐ結へてやると云つて何の惜氣も躊躇もなく自分の最上の麻のハンケチを裂いたりした。ソフィアはそんなハンケチは一打十五ルウブル以上

もする事を知つてゐた。ソフィアもマリアもそんな鷹揚さと氣前よさを今迄に見た事がなかつた。セエンポックが二十萬ルウブルの負債を背負つてゐる事、それは當人の彼も返還の見込なしにゐる事、それだから彼の其位の鷹揚や氣前よさ位が何でもない事なども彼女達は勿論知らなかつた。

セエンポックはたゞ一日泊つたきりであつた、次の日の夕方は直ぐネクリュウドフと一緒に出發する事にした。二人とも夫れ以上逗留する事は出来なかつた、はや餘日なく期間が押しつまつて、もう直ぐ戦地の聯隊へ行かねばならないのであつた。

その最後の日にネクリュウドフは、前夜の事をまざまざと思ひ浮べて、心の底に二様の感情の相戦ふのを覺えた。その一つは熱い肉情の思出で、その肉情の満足は彼の都合さへよければ尙ほ引續いて得られるものであるのに、日がないので残り惜しくもあれば、又併し兎も角も思を遂げて得意でもあるといふ心持であり、今一つは自分は非常に悪い事をした、これは是非とも立派に償ひをしなければならぬ、その償ひは彼女の爲めのみではない、寧ろより多く自分の爲めであるといふ意識であつた。

我利々々亡者の状態にあるネクリュウドフは、しかしたゞ自分の事のみを考へた、自分の爲た事が知れたら自分は悪口されるだらうか、悪口されるとすれば何の位の程度であらうと



考へた。彼女が何と感じてゐるだらうか、彼女がどうなるであらうかと、そんな事は彼は思つてもみなかつた。

彼は自分とカテウシヤとの関係をセエンボックに感付かれたなと思つた、そしてさう思ふ事が彼の利己心を取つては愉快であつた。

『成る程讀めたよ、君が叔母さんの家に満一週間も逗留する位の愛着があるのは無理はないね。』とカテウシヤを見たセエンボックは彼に云つた。『おれだつて君の場合だつたら御同様だね。素敵な娘ぢやないか。』

彼は又折角口説き落して手に入れたものを、底の底まで味ひ娛むことが出来ないで直ぐ旅立たねばならない残り惜しさを思つた。併し是非共出立せねばならないといふ事は、それで二人の間の関係を即座に断つて却つて好都合でもあつた、長引くと種々面倒な厄介な具合になるのは分りきつてゐた。彼は彼女に金をやらうと思つた、それは彼女の爲めでもなく、又彼女に金が要ると思つてでもなく、たださうする事がこんな場合に世間でよくある事だからであつた。彼は自分と彼女の身分や地位に釣合ふ位ゐの額をやる事にした。

出立の日の晝食後、彼は玄關先きで彼女を待ち受けた。彼女は彼を見るとさつと顔を赤め、あいてゐる女中部屋の戸口の方へ行くのだと目で辯解するやうに其方を見ながら通り抜

けようとした。併し彼は引止めた。

『私は立つからね。』さう云つて彼は百ルウニル券を入れた小さい封筒を彼女に握らせた。

『これを上げるから……。』

彼女は彼の云はうとした言葉の意味を悟つた。彼女の顔は險しく曇つた。彼女は頭を振つて彼の差出した其手を突き退けた。

『いや、たゞ、取つてお置きよ。』と彼は呟いて夫れを彼女の胸の隠しに差し入れ、顔に火の付いたやうな思をして何とも云へない淺間しさを覺えながら、呻き呻き自分の室へ走つて行つた。

長いこと彼は室内を彼方此方へ往つたり來たりした。激しい肉體の苦痛でも嘗めるやうに、彼は今の最後の場合を思ひ出しては、腕を悶きして呻いたり跳り上つたりした。

だつて何うすればよかつたのだ？ 誰でもする事ぢやないか。セエンボックと女教師との關係だつて同じぢやないか、よくセエンボックの惚ける通りぢやないか、伯父のグレイシヤだつてさうぢやないか、親父だつてさうぢやないか、田舎に行つて時私生兒を拵へたぢやないか、その私生兒のミイテンカは今もまだ生きてゐるんだ。誰だつて同じ事をするんだから、構ふ事はない、別に悪いといふ程ぢやない。さう云つて彼は自分を安心させようとし



た、併し其甲斐もなかつた。淺間しい思出は彼の良心を燃え爛らした。

一一八

彼は自分の所業の淺間しさを思つてみるならば、もはや彼は他の何人をも非難する事は出来なかつた。他の何人とも面を合せられる筈はなかつた。今迄は自明の事のやうに思つて、自分を一個の立派な名譽ある尊敬される可き青年紳士などと決め込んでゐた獨合點は、早速投げ捨てて踏み躪らなければならぬ筈であつた。彼の魂の奥の方では彼の行ひが夫れほど卑劣至極な残酷無二なものであつた事を知らないでゐるわけはなかつた。けれども今後なほ快活に陽氣に世を渡つて行かう爲めには、どうしても彼は自分を堂々たる立派な紳士と承認してゐなくてはならなかつた、それが彼には是非共必要なのであつた。さうするには今はたゞ一つの方法があるのみであつた、即ちもはや今度の事を考へない事であつた、思つてみない事であつた。で、彼は其の通りにしたのであつた。

それには彼の辿つた生活が極く都合よかつた、未知の地方へ行つた事も、同じ醜惡な同輩のゐた事も、出かけて行つた戦争も——皆彼に其爲めに役立つた。そしてそんな生活を長く續ければ續ける程、いよいよ彼は何事も忘れて行つた、そして終には一切萬事すつかり彼の記憶より消え去つてしまつた。

ただ一度、戦争が濟んでから、彼は彼女に會つてみたいと思つて、其田舎に叔母達を訪ね

た事があつた、そして聞いてみると、カテウシヤはもはや叔母達の許には居ず、彼が戦争に出發して行つた後すぐ暇を貰つて何處へか出て行つたとの事であつた。そして叔母達の話によると、もう甚い莫連女になり下つてしまつてゐるとの事で、さう聞いた時は彼も又心が痛んだ。彼女が生んだ子供は、月數で考へてみると彼の子供らしくも思はれるが、又別な者の種かも知れないとの事であつた。もう彼女は墮落のどん底に沈んで、恥もなければ人前も知らず、彼女の母親の通りになつてゐるさうだと叔母達は云つた。叔母達が彼女にさういふ宣告を下したのは彼には寧ろ好ましかつた、と云ふのは夫れに由つて彼は自分の爲た事に幾らか辯解の出来るやうに思つたのであつた。はじめは彼は彼女と子供を探し出し度いとも思つた、が又直ぐ思ひ直した、それは彼の魂の奥では餘りに恥しくもあり苦しくもある事だつたのである。又それは彼自ら強ひて過去の感情を獵り出して弄ぶ事のやうに思はれたのである。で彼は最早それ以上彼女の事に就いて何等の探索をも聞き質しをもしなかつたのである。そして彼の卑劣至極な行ひはすつかり忘却の霧の中に葬られ盡してゐたのである。

それなのに今や驚く可き偶然によつて彼は一切の過去を思ひ出さねばならなくなつた、彼が冷酷であつた事、残忍であつた事、卑劣至極であつた事、それ等一切の白狀を強ひられる場合に立到つた、さういふ非道な行ひをしながら過去十年を何等心に不安を感じる事もなく



生きて来る事の出来た罪の程を思はずにはゐられない今となつた。併し彼はそれを白状する境地とはまだまだ随分遠く離れた所にあつた、たゞ一切の事を今や皆の者に知られるだらう、彼女も彼女の辯護士も一切を述べるであらう、そして自分は世間の罵詈雑言の的となるであらうと、たゞそれを思うて恐れ氣遣ふのであつた。

## 一九

法廷を出て陪審員室に行つた時のネクリュウドフの心はさうであつた。彼は窓際の椅子に腰をかけて、あたりに取交はされる會話に耳を傾けながら、絶間なく其を吸つた。

陽氣な商人はスメルコフのやり方に如何にも十分同感が出来らしく、

「ね、皆さん、その男は随分手際よく飲んだらしいぢやありませんか、全く西比利亞流です。そしてあの別嬪の例で想像してみても、女の扱ひ具合は先生よつく飲込んでゐるまさらね。」

陪審長はまだまだ何事もよく一々吟味して調べて行つてみなくては分つたものぢやないと云つた。ベエテル・ゲラッシュモキッチュはヘプライ出の何處かの店員らしい男と何か話し合つて、二人共打笑つた。ネクリュウドフは誰かに話しかけられると、止むを得ずたゞ至極簡単に

に受答へだけして、なる可くは觸らずにそつとして置いて貰ひ度かつた。

法廷取締が跛を曳いて陪審員達を中休み後の開廷に呼びに来た時は、ネクリュウドフは不安に襲はれた。彼は自分も参加つて他を裁判するのではなくて、自分が裁判されてるかのやうな氣持を覺えた。彼の魂の奥の聲は彼に云つた、お前は一文半錢の値打もない人間だ、お前は人に顔を合せる面目はない筈だと。けれども彼は表面には平氣を装うて、法廷に入るといつもの萬事心得たやうな慣れきつたやうな調子で陪審長の次の自分の席に着き、片足を他の足の上に重ねて鼻眼鏡を弄つた。

被告も外に出されてゐたが、今や又引かれて入つて來た。

法廷には新たな顔が見えてゐた、即ち證人が出たのである。ネクリュウドフはマスロオワが、天鵝絨と絹の服を着た極くめかし込んだ肥つた女の方を幾度も見やるのに目を留めた。その女は、大きな紐を結んだ丈の高い帽をかぶり、肘まで露はした腕に上等な携帯袋をかけて、手摺の前の第一列目の席に着いてゐた。ネクリュウドフが後で聞くと、その證人が即ちマスロオワの家の女將であつた。

證人の審問が先づ姓名、宗教、其他を定例によつて訊ね質す事から始まつた。それから原告と被告の辯護士や檢事等の間に、證人等に對する審問を彼等に誓約をさせた上で爲す可き



か否かの吟味があつて、前の牧師は再び曳摺るやうな重々しい歩調で入つて来た、そして胸間の金十字の位置恰好を直し、前と同じ飲込み顔な勿體振つた静けさで證人達に誓約をさせた。その誓約式が終ると、キタイエワと云ふマスロオワの女將一人を除いて他は皆別室へ連れ行かれた。彼女は今度の事件に就いて知つてゐる一伍一什を述べるやうにと云はれた。稍無理な作り笑ひを浮べながら、又事柄の折々節々に頭を振つたり頷いたりしながら、彼女は詳しく述べ立てた。

彼女と知り合ひの旅館の雇人シモンがリュウボフを呼びに來た事。暫く經つてリュウボフは其客の商人と一緒に彼女の家に戻つて來た事、そして其時はや其商人は非常に酔つ拂つてゐた事。『そして私の家で尙ほ飲み續けましたのよ、其お客は、お金がなくなるまで。お金がなくなるまで此のリュウボフを旅館の自分の室へ取りにやりましたの。そのお客この妓には非常に逆上せてゐましたからねえ。』と女將は被告をちらと見やつて云つた。その時マスロオワは微笑んだらしかつた。ネクリュウドフにはさう見えた。そして其微笑がネクリュウドフには厭なものであつた。同情と嫌惡の混り合つた一種不思議な不安な感情が彼の身内に頭を擡げた。

『あなたは被告をどんな女と観てゐたのですか。』裁判所側よりマスロオワに辯護人として

定められた司法官試補は顔を赤くして口籠り乍らさう訊ねた。

『いゝ女でしたのよ、それはそれは。』とキタイエワは答へた。『教育もありますしね、氣も利いてゐますし、何しろ良い家庭で育つたのですからねえ、それに佛蘭西語の本も讀めるのでございますよ。御酒も少しはちよよいちよよい戴きますのですけれど、本性を忘れた事なんぞ一度もありませんでしたわ。それはそれは本當に好い女でねえ。』

カテユウシヤは女將を見たが、それから直ぐ陪審員達の方へ目をやつた、そして其目はネクリュウドフの顔に止つた。彼女の顔には曇りが出て其上なほ嚴とした色があつた。それは一寸の間ではなかつた、そしてネクリュウドフは全身ぞつとした、が併しそれでも彼は彼女の檢分するやうな其の斜の目より自分を離す事は出来なかつた。彼は氷の溶けるあの夜を思出した、霧が消えると夜明前の空にかゝつた半月が何やら黒い忌々しい物を照らしてゐた光景を思ひ出した。今彼を見た彼女の目、程なく外れて行つた其の黒い二つの目は、彼に昔のあの黒い忌々しい何物かを思出させずにはおかなかつた。

『おれを見分けたのだ、氣がついたのだ。』とネクリュウドフは思つた、そして悚然とした、さあどんな事になり行くか知れないぞと思つた。けれども彼女は彼を見分けて夫れと知つたのではなかつた。靜かに彼女は裁判長を又もや見やり、そして溜息をついた。ネクリュウド



フもほつとした。あゝ、早く済んで呉れないかなあと彼は心に願つた。彼は今丁度獵に行つて傷を負うた半死の鳥を殺さねばならない時のやうな心持を覺えた。殺さうとすると憫れさが湧いて仕方がなかつた。死にきれない鳥は獵袋の中で跳き苦しんで切りに免れようと焦つてゐる。それを見るのは厭で堪らない、辛くて仕様がな、一思ひに速く殺してしまへばいい、そして早く忘れてしまふがよい、さうしなければならぬのであつた。證人審問の間のネクリュウドフの氣持は、即ちそれと少しも變らない可哀さと厭さの混合であつた。

二〇

けれどもネクリュウドフの心のまゝにはならず、事件は長いこと續いた。證人一人宛の審問や鑑定人の陳述が済んで、檢事や辯護人等の例に依つて例の通りな勿體振つた仰山な顔付をして提起する冗漫な種々の質問も終ると、裁判長は陪審員達に二個の證據品を見せた。一つは菱形の金剛石を嵌め込んだ大きい厚い指環で、それをスメルコフといふのは食指に差してゐたものと見えた。それと今一つは毒を檢分するに用ひられた濾過器であつた。どれにも封をして札をつけてあつた。

陪審員達は直ぐ證據品の調べにかゝらうとしたが、副檢事は又もや立上つて、證據品檢分

の前に屍體検査の報告書を朗讀して貰ひ度いと請求した。

成るだけ早く事件を片付けてしまひ度いと思つてゐる裁判長は、そんな報告書の朗讀などをしたところで、たゞ退屈と欠伸の種になつて晝食が遅くなるばかりで、何の役にも立たない事は知つてゐた、また副檢事が其報告の朗讀を請求するのをもたゞ自分にさうする権利があるといふ事を見せる爲めのものだといふ事も裁判長は知つてゐた。けれども其朗讀を拒むわけには行かないので、同意した。

書記は報告書を取り上げ、泣くやうな聲で朗讀を始めた。

『外部ノ檢分ニヨリテ分明シタル事項左ノ如シ。

一、テラポイント・スメルコフ、身長貳アルシン拾貳エルシヨック。

(一アルシンニ二尺四寸弱。  
二エルシヨックニ一尺四寸

強。貳アルシン拾貳エルシヨックニ六尺四寸五分強。)

『しつかりした男でしたやねえ。』と商人はネクリュウドフの耳に囁いた。

『二、年齢ハ外見ヨリ判斷スルニ四拾歳ニ近キモノノ如シ。

三、屍體ハ肥大ニシテ肉軟カナリ。

四、皮膚ハ全身ニワタリ綠色ヲ帶ビ、所々ニ黒斑ヲ見ル。

五、全身ノ皮膚下ニ大小無數ノ氣泡ヲ生ジ、其ノ中ノ若干ハ潰裂シ、大ナル膜狀ノ瓣ヲナ



シテ下垂セルモノアリ。

一三六

- 六、頭髮ハ濃密ニシテ暗赤色ナリ、觸ルレバ容易ニ脱落ス。
- 七、兩眼甚シク凸出シ、角膜ハ曇ツテ光輝ナシ。
- 八、鼻孔、耳腔、及ビ口内ヨリ泡沫ト血液ヲ混ジタル液體流出セリ。口ハ半バ開キアリ。
- 九、頸部ハ顔面及ビ胸部ノ腫脹セル爲メ殆ド判別スル能ハズ。
- 十、曰ク何。曰ク何。

そんな調子で四頁に渡つて忌々しい肥太<sup>ふと</sup>つた大きな腫れ上つた屍體の外部檢分の巨細を二十七個條に分けて書き留めてある報告書が朗讀された。ネクリュウドフの催してゐた一種不安定な嘔吐感は、それによつて尙ほ一段と刺戟された。カテウシヤの生涯と、死體の鼻より流れ出てゐたと云ふ泡だつた液體と、その飛び出た眼球と、彼<sup>かれ</sup>ネクリュウドフ自身の彼女に對したやり方と、——それは彼に取つては皆同一物としか思はれなかつた、そして其思に彼は壓迫され窒息されるやうな氣持を覺えた。朗讀が終ると裁判長は、ほつと息をついて頭を上げ、それで済んだかと思つた。が書記は直ぐ又内部檢分の報告書の朗讀を始めた。

裁判長は又頭を垂れ、頬杖をついて目をつぶつた。ネクリュウドフの隣席の商人は睡さに辛抱が出来ないらしく、ふらりふらりと漕ぎ出した。三人の被告と其後ろの憲兵とは身動き

もしなかつた。

『内部ノ檢分ニヨリテ知り得タル事項左ノ如シ。

- 一、腦蓋骨ノ皮膜ハ容易ニ腦蓋骨ヨリ剝離シタリ。血液ノ浸出少シモナシ。
  - 二、腦蓋骨ハ普通ノ硬度ヲ有シ、毫モ損傷サレ居ラズ。
  - 三、腦膜ハ灰白色ニシテ、直徑約四吋ノ暗黒色ナル斑點二個ヲ有ス。曰ク何。曰ク何。
- と尙ほ其他十三個條に渡つて記述してあつた。

そして鑑定人の姓名を列記し、其次に醫師の署名と結論とが附してあつた。それは今の報告書や其他に記載された胃に於ける諸變化と腸及腎臓内の小變化によつて、スメルコフの死が酒と共に胃中に達した毒の作用の結果である事が分明してゐると論結したものであつた。『随分見事に飲んだらしいんでさねえ。』丁度その時又目を覺ました商人はさう私語<sup>ひそかごと</sup>いた。

報告書の朗讀は殆ど一時間もかゝつたが、それでも副檢事はまだ満足しなかつた。その朗讀が終ると裁判長は彼に向つて、

『内臓の検査報告書は朗讀の必要もありませんね。』

『本官は朗讀を請求します、是非朗讀して貰ひます。』と副檢事は裁判長を見ないで屹<sup>かた</sup>として云つた。身を半ば起してさう云つた彼の調子は、朗讀を要求する權利が自分にはあるのだ、



そして自分は其権利を棄てはしないのだ、若し此の要求が拒まれるなら此の裁判の破毀を迫つてもいいのだと吹聴してゐるものであつた。

髻を一ぱい生やして柔和さうな目をしてゐる胃加答兒に惱んでゐる判事は、如何にも力なげに弱りきつて裁判長に私語いた。『何の爲めに又朗讀をやるんですかね。誰だつて閉口するぢやありませんか。どうも新參の爺どもは綺鹿には掃かないで、時間ばかり潰していけませんね。』

金縁の眼鏡をかけた判事はたゞ苦々しげな陰氣な顔をして黙つて、見るともなしにたゞ前方を見てゐた。彼は自分の女房に就いても又一般の人生に就いても何等の善をも期待しないかのやうな表情をしてゐた。

内臓検査報告書の朗讀は始まつた。

『千八百何年二月十五日、下名ノ者ハ醫務局ノ命ヲ受ケ』

と書記は、臨席者一同の催してゐる睡氣を覺ましてやらうと思ふかのやうに、聲を張上げ屹とした調子で讀み出した、

『醫務監助手ノ立會ヲ求メ、第六萬三千八百四十五號ノ内臓檢分ヲ遂グ、

一、右肺及ビ心臓(六磅玻璃器ニ入ル)

二、胃中ノ殘留物(六磅玻璃器ニ入ル)

三、胃(六磅玻璃器ニ入ル)

四、肝臓、脾臓及ビ腎臓(三磅玻璃器ニ入ル)

五、腸(六磅玻璃器ニ入ル)……』

朗讀が始まりかけると裁判長は左右の判事に交る交る何か嘸き、その賛同を得たので其處までで朗讀の中止を命じた。

『當法廷は内臓檢分の報告書朗讀を不必要と認めます。』

書記は直ぐ讀むのを止めて其書類を閉ぢた。副検事は憤々した顔つきで何やら切りと書き止めた。

『陪審員の皆さん、證據品の檢分を願ひませう。』と裁判長は云つた。

陪審長と二三の陪審員は立上つて、場慣れない變な恰好に手を振つて卓の前に行き、順々に指環と濾過器を見檢めた。商人は其指環を自分の指に差してみたりした。

『大きな指を持つてた男だなあ。』と彼は自分の席に戻つてから云つた、『胡瓜位ゐはありましたらうなあ。』さう云つて彼は毒殺された商人が巨人とも云はる可き男だつたらしい事を想像して面白がつた。



證據品の吟味が済むと、裁判長はそれで取調べは終つた旨を云ひ渡し、そして成る可く速く事件全體を済まし度いので、すぐ副検事に發言を許した。それは副検事も同じ人間だらうから、其も吸ひ度からうし、晝食もし度いだらうし、それで臨席者一同に對しても其處に同情を持つてゐさうなものと思つて、手短かに一二分何とか云つて直ぐ閉廷にして呉れるだらうと豫期したのであつた。けれども副検事は自分にも他人にも思遣りがなかつた。彼は容體振つて徐々と立上り、兩手を卓につき、頭を少し横に傾けながら、被告等には一瞥を與ふる値打もないかのやうにたゞ室内一體を見渡した。それから報告書朗讀の際に腹で十分下拵へをしておいた論旨を滔々とやり出した。

「陪審員諸君、今我々が臨んでゐる此の事件は、實は著しき特殊の犯罪と云ふべきであります。」

副検事の辯論は、彼自らの考へてゐる所では、今迄に多くの有名な辯護士が爲した有名な辯論と同様に、社會的に極めて重大な意義を有するものであらねばならなかつた。傍聽席に居るものはたゞ何處かの裁縫女と料理女とシモンの姉との三人の女に、なほ一人何處かの御

者が一人と、たゞ夫れだけで、決して社會の各階級の者が聴きに來てゐるのでも何でもなかつた。併しそんな事は何うでもよかつた。どんな大辯論も矢張り始めは却つてちつぽけなものとして遇せられる。彼もそんな聽衆などには頓着なく、たゞ飽くまで自分の自ら課してゐる問題の高處に止つて居ればよいのであつた、換言すれば、一犯罪の心理的意義の深淵を探り由つて以て社會の害毒を把握抉剔すればよいのであつた、それが彼の使命の原則なのであつた。

「我が陪審員諸君、諸君は今爰に實に十九世紀末の特色顯著なる一犯罪に對して居られるのであります。其の犯罪たるや現代社會の諸要素を侵してゐる彼の腐爛朽敗の根本的現象の各特色を遺憾なく具有してゐるものであります、其の侵されてゐる諸要素は實に今回の犯罪の放射してゐる燃焼的光線とも云ふべきものの中に觀取されるのであります……。」

副検事の演説は非常に長かつた。一面に於て彼は今自分が頭の中で紡ぎ出したあらゆる偉大な思想を見せてやらうと思ふのであり、他面に於ては自分の辯舌が一時間でも一時間半でも間斷なく滔々として懸河の勢を保つて走つて行くといふ事を他にも自分にも證明しようとするのであつた。其間に併し唯一度彼は唾飲みをして可なりの間途切らした、が又直ぐ考の絲口を拾ひ繼いで辯じ行き、なほ一層の美辭麗句を僱ひ來つて中絶の個處を巧みに糊塗し



彌縫し粉飾して行つた。或は身の重みを一方の足より他方のに托し替へ陪審員達の方を見て話しかけるやうな聲で云つたり、或は目をノオトの上に注いで落着き拂つた事務的口調で悠悠と述べ、それから急に勃然と怒るやうな高い力ある聲に轉じたり、又は傍聽席を見渡したるも再び陪審員達を顧みたりして、抑揚頓挫の限りを曲盡した。たゞ被告だけには彼は一瞥をも與へなかつた。被告の方では三人とも珍らしさうに彼の囁る口元を見つめてゐた。當時の法曹界に流行し重視されてゐたあらゆる新説や新語や、又科學の蘊奥として認められた所の而して現に認められてゐる所のあらゆる結論や術語は、どしどし盛に引用された。遺傳説あり、先天的犯罪論あり、ロンブロンソオ出で、進化論現はれ、生存競争、催眠法、暗示論、シャルコオ、デカダン……といふやうな勢であつた。

商人スメルコフは副検事の説明によると、豪宕豁達な偉丈夫的典型の人物であつたが、其の朴直な信頼心と大きな度量の爲めに却つて墮落の深淵に沈淪してゐる小人等の手にかゝつて其犠牲となつた者だとの事であつた。

シモン・カルティンキンは奴隷生活の隔世遺傳の産物であつて、教育もなければ思慮分別もなく、宗教すら持たない無恥劣悪な人間であつた。オイフェミアは其の情婦で、これ亦遺傳の犠牲であり、腐敗墮落の一切の特徴を具へてゐる者であつた。

しかし此犯罪の絶對的根元はマスロオワであつて、デカダンの代表を一身に遺憾なく引受けてゐる者だとの事であつた。

『この女は、』と副検事はマスロオワを見はしないで云つた。『教育もあるのです、それは我々が女將の口より現に聞いた所です。此女は読み書きも心得、佛蘭西語さへ操るので、そして此女は孤兒です、犯罪の萌芽は既に持つて生れてゐると思はれます。立派な上流の家庭に引取られて育つたのですから、正當な立派な生涯を送られる筈なのです。然るに此女は其の恩人を棄て、自分の情慾の狂ふまゝに身を委ねたのであります。その教育ある事によつて、そして、我が陪審員諸君、今我々が女將の陳述によつて得たる如く、取り分け物事に敏捷であり巧妙である事によつて、彼の暗示の名稱を以て呼ばれる所の、最新科學殊にシャルコオ學派の研究が提示する玄妙不思議な天賦性によつて、それ等を巧みに操る事によつて此女は他人の身心を蠱惑するのであります。その蠱惑の才能によつて此女は堂々たる立派な露西亞的巨人を、溫良な寛大な親しむ可き而して富裕な客人を掌中の弄具としたのであります、そして其客に信頼されたのを奇貨居く可しとして、先づ其室の金品を窃取し、亞いで無情にも其一命を奪つたのであります。』

『どうです、先生随分析外れを云ふぢやありませんか。』と裁判長は氣六ヶ敷げな顔をした判



事に私語いた。

『誇大狂ですよ。』と其裁事は相槌を打つた。

『我が陪審員諸君、』と副検事は其のすらりとした脇腹邊りを妙に氣取つて紆らせながら云ひ續けた。『此の被告三人の運命は實に諸君の手の中に存してゐるのです、併し又社會の運命も或程度迄は諸君の手中にあるのです、諸君は實に今如何なる判決を下されるかによつて社會に夫れだけの影響をされるのです。どうぞ此の犯罪の重大な意義の深所を御勘考下さらん事を希望します、そして社會が例へばマスロオワと云ふが如き所謂病的個人によつて脅かされてゐる危険の程を篤と御考慮下さらん事を願ひます、そして此の社會をさういふ惡の傳染と蔓延とに對して防禦して貰ひ度いものがあります。此の社會の善良な健全な諸要素をどうぞ十分に保護して貰ひ度いものであります。』

そして今これから爰で判決さるべき事件の重大さに壓倒されるかのやうに、併し實は自分の辯論の大仕掛けに我乍ら驚喜したらしい恰好で、副検事は重々しげに席についた。

彼の演説の意味は、言葉の綾を除いて云へば、畢竟マスロオワは其客をたらしこみ其信用を得て鍵を托されて旅館の其客の室に入り、金を取つた。そして夫れを皆自分の所有にしやうと思つたが、シモンとオイフミアに見付けられたので三人で分ける事になければなら

なかつた。それから其犯罪の痕を隠さう爲めに女は客と共に再び其旅館にやつて來た、そして其處で客を毒殺した、と云ふのであつた。

副検事の辯論が終ると、辯護士席からフロックを着て胴衣の大きい楕圓形の胸開きに糊の利いた白いシャツを見せてゐる中年の男が立上つて、カルティンキンとポオチュコワの爲めに思ひきつた辯護の演説をした。彼は兩人より三百ルウブルを受取つて頼まれた辯護士で、極力兩人の無罪を主張し、罪の一切はマスロオワにあると嫁りつけた。

彼はマスロオワが金を取る時カルティンキンとポオチュコワとが立會つてゐたといふマスロオワの陳述を排斥した、そして既に毒をコップに入れたと云ふ嫌疑を受けてゐるやうな女の陳述に重きを置くべきものでないと主張した。

『二千五百ルウブル位の金額は』と其辯護士は云つた、『時としては一日に三ルウブル乃至五ルウブルを客より貰ふことのある正直なよく働く者が二人で節約して貯蓄したものとして少しも怪しむべきではありません。商人スマルコフの所持金はマスロオワが取つたのであります。それをマスロオワは誰かに預けるか呉れるかしたのでありませう、或は失つたのかも知れませんが、何しろ常規を以て律する事の出来ない者の仕事ですから。毒殺はマスロオワたゞ一人で爲し遂げた所のものであります。』



そして彼は陪審員達に、カルティンキンとポオチュコワとを無罪放免にするやうに、しかし窃盜に關しては有罪と認めるとの事ならば、少くとも毒殺には關係のない事、又何等豫め其下心などなかつた事を言明して貰ひ度いと希望した。

そして最後に其辯護士は矛を副検事に向けて一言した。副検事の只今試みられた光彩陸離たる辯論は實に遺傳に關する科學的問題を十分に説かれたものではあるが、しかし遺憾乍ら今此の場合には適合しない、と云ふのはポオチュコワは兩親の知れない子であるから、と云つた。

副検事は險しい顔をして何やら少し書き留めた、そして馬鹿を云ふなと云ひたげな嘲笑を微かに浮べて兩肩を揺つた。

それからマスロオワの辯護人が立上つて、おづおづと口籠り勝ちに其の辯護演説をした。彼はマスロオワが金を盗む事に與らなかつたと否定する事は出来なかつた、たゞマスロワはスメルコフを毒殺する意志を有つてはゐなかつた、スメルコフに粉末劑を入れて飲ましたのはたゞスメルコフを睡らせようためであつた、といふ事だけを主張した。それから彼は事件の大局に着眼して立派な辯論をしようと試みた。即ちこのマスオロワが斯様に墮落したのも元は或る男に誘惑されたからである、そして其男は此のマスロオワが墮落の重荷を一切自

分に背負つて苦しんでゐる間も何の處罰を受けるでもなく自由勝手に世を渡つてゐる、と云ふ主意を述べた。しかしそれは心理説明の横道に入り過ぎて餘りに事件よりかけ離れたので全然失敗に終り、むしろ氣の毒に思はれた。そして彼が一般に男の無情なこと、女の哀れむべき無援のものである事を吃り乍ら云つた時は、裁判長は氣の毒な餘り何うかして今少し事件の本筋に接觸を保つて説かせたいと思つて暗示してみた位であつた。

その辯護人の後に再び副検事は立上り、先づ最初の辯護人に對して自分の遺傳説を辯護した。よしやポオチュコワが兩親の知れない娘であらうとも、遺傳説の正當な所以は毫も其爲めに害はれるものではない、と云ふのは抑も遺傳の法則は科學的に十分の根柢を持つてゐるものであつて、我々は單に遺傳より犯罪を探究し得るのみならず、又犯罪よりして遺傳を闡明し得る位に確實なものである、と云ふのであつた。次にマスロオワが墮落の生涯を送るやうになつたのは誰だか想像によつて描き出された男(副検事は特に想像によつて描き出されたといふ言葉を意地悪く強く調子を込めて云つた)の誘惑が元だとの辯護に就いては、あらゆる事實を調べてみると、寧ろ彼女の方が彼女の手に陥つた無數の犠牲者を誘惑したのである、と反駁した。そして其理由を云ひ終つてから彼はさも勝ち誇つたやうな恰好で席に着いた。



それから被告各自に自分の辯護をするやうに促された。

オイフミア・ポオチュコワは、自分は何も知らない、又決して一緒に事をしたのでないと繰返した。マスロオワたゞ一人が罪人であると頑強に云ひ張つた。

シモン・カルティンキンはたゞ一度繰返したのみであつた、『どうか皆様の御考通りにして下さいまし、ですが私は罪はありません。罪があるなんて、それは違つてゐます、はい。』と。

マスロオワは何とも云はなかつた。自分を辯護する爲めに何か云ふ可き事があるなら云ふがよいと裁判長に勧められても、彼女はたださう云ふ裁判長の顔を見、また追つかけられてゐる兎か何かのやうに不安さうに四邊を見廻はすのみであつた。それから彼女は目を落して泣き出した、歎歎あげた。

『どうなさいました?』と隣席の商人はネクリュウドフに尋ねた。彼はネクリュウドフが放つた一種異様な聲を聞いたのである。それは堪へに堪へた噎び泣きであつた。

ネクリュウドフは、彼自身の今の此の場合が何を意味してゐるかを未だ少しも知らなかつた、そして今無理に堪へた噎び泣きも、又目に一ぱいになつた涙も、皆たゞ彼自身の弱い爲だとした。涙を隠す爲めに彼は鼻眼鏡をかけ、そしてハンケチを出して鼻を鳴らした。

今此の法廷に居るすべての人に自分の犯した罪を知られるならば、自分はどのやうに罵ら

れどのやうに恥ぢしめられるであらうといふ恐怖は、今彼の魂の中に起りつゝある或る尊い作用を息詰まらした。目前の其の恐怖が先づ何よりも強かつたのである。

### 二三

被告等の最後の陳述が終ると、裁判所側より陪審員一同に對する諮問條項の按排其他の形式に就いて原告被告双方の協定に稍長い時を費やし、それが出来上ると裁判長は陪審裁判施行の要點を説き示した。

彼自身は早く切り上げて出て行きたくて堪らないでゐたが、公務に忠實な彼の習慣は、一旦やり出したからには等閑にして鼻をつける事は出来なかつた。で彼は、陪審員達が被告を有罪と認めるならば有罪の宣告を下す権利があり、無罪と認めるならば無罪の宣告を下す権利があるといふ事、若し又一部分を有罪と認め餘の部分が無罪と思料するならば、即ち其一部分を有罪として餘を無罪とする旨の宣告をなすべき事、そして其権利は十分の道理によつて行つて貰ひ度いといふことを述べた。なほ又一諮問條項に就いて然りといふ答を下すならば、それは其條項中に含まれてゐる一切を然りと肯定する事であるから、若し其條項中の一切を肯定するのではないならば特に其旨を明かに示さなければならぬといふ事、その事も裁



判長は陪審員達に飲込ませて置きたいと思つた。が、ちらと時計を出してみると、はや三時に五分前だつたので、彼は直ぐ事件の顛末の説明に移つた。

「事の次第は次の通りであります。」と云つて彼は、辯護士や検事や證人等が既に述べた一切を更に繰り返し始めた。

裁判長が述べてゐる間、判事は二人とも仔細らしく十分氣を付けてゐるかのやうな顔付をして耳を傾けてゐたが、ちよいちよいと時計を出して見た。裁判長の説述は堂々たるものでなければならぬとされてゐる通り立派ではあつたが、たゞ少し長過ぎたのである。検事もさう思つた、其他裁判所側の者一同も、否其室に在る者皆さう思つた。

それで手数は一切済んだらしかつた。が裁判長は尙ほ陪審員一同に附與されてゐる権利の重大な所以に就いて今少し云つて置く必要を感じた。で、陪審員たる者は十分に心を付けて其権利を行はなければならぬ事、決して権利を濫用してはいけない事、彼等は既に誓約をしてゐる事、評議室の祕密は神聖に守らねばならない事、其他何、其他何と裁判長は云ひ聞かした。

裁判長が口を利き出してから、マスロオワは一寸も目を落さないで、一言も聞き洩すまいと思ふかのやうに絶えず裁判長を見つめてゐた。それでネクリウッドは彼女の視線とぶつ

かる心配なしに、これ亦絶えず彼女を見やつた。久しく相見なかつた戀人に逢ふと、はじめは其顔に夫れ迄の間に次第に出来た表面的な變化のみが目につくが、長く見てゐると段々と昔の舊の顔が出て来て、變つた所は心の目に取つてはいつの間にか消えて失くなり、二つとはない固有獨特な相が現はれて来るものであるが、それは今のネクリウッドに於て亦さうであつた。即ち獄衣を纏うてはゐるが、又からだも肥え太り胸もふくよかに丸みを増してはゐるが、又顔も頬より下が著しく太つてこそ居れ、額と額こめかみとに小皺が見え目が少し脹れぼつたくなつてこそ居れ、紛ふ可くもないあのカテウシヤであつた、十年前の復活祭の時生き生きとした悦びに満ち輝いて、あどけない笑みを含んだ懐しげな目を上げて可愛い彼をぢつと見たあのカテウシヤであつた。

「それにしても何といふ不思議な偶然であらう。十年が開たゞの一度も逢つた事はなかつたのに、恰も自分の陪審日に此事件が取裁される事になつて今爰に此の被告席で此女と顔を合はせると云ふのは、よくも廻り合はせたものである。一體どう云ふ事に成り行くのであらう。何にしても早く済んで呉れるといふが、早く片付いて呉れるといふが。」

悔いは彼の魂の奥に少しづつ其頭を擡げかけてはゐたが、併し未だ彼はそれに服従はしなかつた、まだ單に一時の偶然とより外には思はなかつた、程なく經過して終ふ事であつて、



それ以上自分の生活に煩ひをかけるものなどとは思はなかつた。彼は室内で尾籠をした  
 小狗が飼主に領首を掴まれて自分の爲た尾籠の痕へ鼻先を突きつけられる時のやうな氣  
 持を覺えた。小狗はひゆんひゆん泣いて、自分の粗忽のあとへ行かうとせず、四肢で突つ張  
 つて避けようとする、そして自分の爲た事は忘れてしまはうとする、けれども飼主はきかな  
 い、そして小狗を懲らしめずにはおかないのである。ネクリュウドフも其通りで、自分の所  
 業の悪かつたことを感じてはゐた、そして又目に見えない或力強い手に領首を握られてゐる  
 やうな感じをも覺えてはゐた。が併しまだ十分には彼は自分の爲た事の意味を飲み込まずに  
 ゐた、そして其或力強い手の所有者の誰であるかをも知り得ないでゐた。まだ彼は自分の目  
 前に今横はつてゐる事件を自分の所業の結果と思ふのは厭であつた、さうではないと思はう  
 と努めた、しかし目に見えない容赦ない手は彼の領首を離さなかつた、いやでも應でも彼は  
 自分の所業の前に突きつけられた、それで到底免れるわけには行くまいと感じた。

まだ彼は圖々しい態度を見せた、習慣通りに片足を他方の足に重ね、平氣な様子で其鼻眼  
 鏡を弄りながら、前列の第二番目の席に、萬事心得て飲み込んでゐるかのやうな取澄ました  
 顔付をして腰かけてゐた。けれども彼の魂の奥の方では彼ははや自分の所業の淺間しかつた  
 事、冷酷であつた事、安逸遊惰な背徳無頼な我利々々亡者的な自分の生涯が一文半錢の値打  
 もなかつた事を思はずにはゐられなかつた。そして恐ろしい一種の幕、十二年の長きに亘つ  
 て彼の罪惡と其後の彼の全生活とを殆ど奇蹟によつての如く被ひ隠し來つた恐ろしい幕は、  
 今や漸く動き初めたのである、そして彼は幕の彼方を早やちらちらと見ないわけには行かな  
 いのである。

### 三三

裁判長はやつと云ひ終つた、そして進み出て來た陪審長に諮問の個條書きを渡した。陪審  
 員一同は寛がれるのを悦んで立上り、何だか自分達の品位を誇るやうな恥ぢるやうな妙な、  
 まな恰好で腕を振り乍ら、列を作つて評議室へと行つた。彼等が出てしまつて戸が閉まる  
 と、一人の憲兵は直ぐ戸の傍へやつて來て劍を抜いて其切尖を自分の肩の前にして警戒し  
 た。裁判官等も席を立ち、被告等も外へ連れ行かれた。

陪審員達は評議室に入るや否や、前の時のやうに何よりも先づ卷頁を取り出して吸ひ始  
 めた。法廷でめいめいの席についてゐる間、自分で夫れと氣付いてゐたとゐなかつたとに拘  
 らず兎に角誰しも皆多少覺えてゐた一種の鹿爪らしい不自然さは、評議室に入つて眞に火を  
 點けるや否や直ぐ何處かへ消えて行つた。のんびりと氣が軽くなつて一同思ひ思ひの席に着



くと、直ぐ様盛んな會話が始まつた。

一五四

『あの若い女に罪はありませんよ、あなたは騙されたのです。』と人物のよささうな商人は云つた。『あの女は許してやらなくちやいけませんね。』

『それも篤とこれから吟味ませう。』陪審長は相手になつて云つた。『併し我々は個々個人の情實的觀察に陥つてはなりませんからね。』

『裁判長の事相概説の注意は見事でしたね。』と大佐は云つた。

『さうです、あまり見事なんで私なんぞは睡り込んでしまつた位です。』

『大切な點は斯ういふ事ですよ、あの旅館の雇人二人がマスロオワと共謀になつてゐなかつたとすれば、彼等が錢の事を知らう道理はありませんからね、此事は篤と考へてみなくちやなりませんよ。』ヘブライ型の店員はさう云つた。

『それでは何ですか、君の意見ではマスロオワが錢は盗んだといふのですね?』と一人の陪審員は尋ねた。

『それは決してさうぢやないと私は思ふ。』と親切氣の深い商人は何處迄も辯護した。『あの目の赤い鬼婆めの爲業でさ。』

『いや、何奴も皆油斷のならない代物ですよ。』と大佐は云つた。

『でもあの年上の女は室には入らなかつたつて云つたぢやありませんか。』

『それで君はあの婆の云つた事を信用なさるんですか。私は金輪際あの鬼婆の言葉なんぞを本當とは思ひませんぢや。』

『そりやあなたが本當にしなけりやしないまでのことぢやありませんか。』と店員は云つた。『鍵を持つてたのはあのマスロオワですからね。』

『さうですとも、それが何うしたと云ふんです。』と商人も負けてはゐなかつた。

『ではあの指環は?』

『あれはマスロオワが云つたぢやありませんか。』と商人は又もや聲を張り上げた。『あの西比利亞男は性急屋で、おまけに酔つ拂つてると來てるんでせう、だから先生あの女を一つ撲り飛ばしたんでさね、それからそれが直ぐ後悔になり氣の毒になつたのさ。で、これをやるから泣くな泣くな、と云つたのでさ。そんな調子な男ですよ、私が聞いたんぢやあ、八ブウドもある胴體だつて云ひますからね。』(一ブドは四貫、二百六十八丸強)

『そんな事は何うでもいゝでせう。』とベエテル・ダラッシモキッチュは商人の云ふのを遮つて、『要するに問題はあの女が全體を企んで他の二人を説き伏せたか、但しはあの雇女が企んだか、そこにありますよ。』



「あの雇女が一人で考へ出した事とは思はれませんね。」  
そんな具合で纏りの無い話が可なり長いこと續いた。

「それでは、何うです、皆さん。」と陪審長はしまひに、「卓に着かうちやありませんか。そして熟議させよう。さ、どうぞ皆さん着いて下さい。」そして自分は其長官として端の上席に着いた。

「あんな賤業婦なんてものは、そりややくざな者でしてね。」と云つて店員は、マスロオワが第一の罪人であるといふ自分の説を強める爲めに、嘗て自分の知人が矢張り或る同じ賤業婦の爲めに散歩道で時計を盗まれた話を持ち出した。

すると丁度よい機会になつたので、大佐は尙ほそれよりも巧妙な不思議な銀の茶器の盗難事件を話し出した。

「皆さん、此の諮問條項に就いて吟味して行く事にしようぢやありませんか。」と云つて陪審長は鉛筆で卓の面をこつこつと叩いた。

一同黙つた。

諮問條項は次の通りであつた。

第一條。クラビラ郡ボロク村ノ百姓シモン・ペトロフ・カルティンキン、三十四歳ハ千八百

何年一月十七日商人スメルコフヨリ金品ヲ窃取センガ爲メ殺害ノ目的ヲ以テ他ノ兩人ト共謀シ、コニヤク酒ニ毒ヲ混ジテ與ヘタルモノナリヤ、而シテスメルコフヲシテ死ニ至ラシメ貳千五百ルウブルノ金子及ビ金剛石指環壹個ヲ窃取シタルモノナリヤ。

第二條。町人ノ娘オイフェミア・イワノフナ・ポオチュコワ、四十三歳ハ第一條ニ記載サレタル犯罪ニ加擔シタルモノナリヤ。

第三條。町人ノ娘カタリイナ・ミハエロオワ・マスロオワ、二十七歳ハ第一條ニ記載サレタル犯罪ニ加擔シタルモノナリヤ。

第四條。若シ被告オイフェミア・ポオチュコワニシテ第一條ニ記載サレタル犯罪ニ加擔シ居ラズトセバ、然ラバ其ノマウリタニア旅館ニ奉公中千八百何年一月十七日、同旅館ノ該室ニ滞在中ナリシ旅客商人スバルコフノ鞆ヨリ貳千五百ルウブルヲ窃取シタルノ罪ハ認ム可キモノナルヤ、而シテ其ノ目的ヲ以テ質鍵ニヨリ該鞆ヲ開キタルノ罪ハ認ム可キモノナリヤ。

陪審長は其第一條を読み上げた。

「で、此の箇條に就ては皆さんは何とお考へになりますか？」

それには誰も皆卽座に答へた。「さうです、あの男は有罪です。」と云ふに皆一致した。それ



一五八  
でカルティンキンは毒殺にも金員竊取にも與つた罪人とされたのである。たゞ年の老つた一人の勞働組合員はカルティンキンを有罪とする事に同意しなかつた、そして何れの點に就ても否定した。

陪審員は此男きつと事情が分らずにゐるのだなと思つて、カルティンキンとボオチュコワとの有罪な事はすべての事實に就いて調べてみて疑ふべき餘地はないといふ次第を説き明かして聞かした。けれども其男は事の次第残らず知つてはゐるが、しかし容赦してやらなければならぬと答へた。『我々は誰だつて皆聖人ぢやありませんからね。』と云つて其主張を曲げなかつた。

第二のボオチュコワに關する條項では、長い間種々と評議が続いた上で『無罪』といふ決議になつた、それは彼女が毒殺に與つたといふ明確な證據が一つも無かつたからで、辯護人が其點は特に力説した所であつた。

マスロオワを無罪放免にし度いと思つてゐた商人は、ボオチュコワこそ事件全體の張本人であると主張した。彼に同意した陪審員も少くはなかつた。しかし飽くまで嚴格に規則通りに取り裁いて行かうと思つてゐる陪審長は、ボオチュコワが毒殺に與つてゐるといふ證據の一つもないのを如何ともし難いと云つて賛成しなかつた。その論戰が長く續いた上で、陪審

長の意見が勝を占めた。

ボオチュコワに關する第四條では、『さうです、第一條の罪がないなら、此の第四條の罪は確にあります。』といふ事に議論が纏まつた。が、勞働組合員の熱心な請求によつて、『併し酌量スベキ事情ノ下ニ』といふ但書が添へられた。

第三條のマスロオワに關する諮問は激しい論難辯駁の種になつた。陪審長は彼女は毒殺の件でも又竊盜の件でも有罪だと主張した。商人はそれに反對した、大佐と勞働組合員も商人と同意見であつた。餘の者は何れとも決しかねた。併し陪審長の意見が次第に勝利に近づいて來た、それは主として、一同がはや疲れて、成るだけ早く一致する意見を見出して身體の自由を得たいといふ氣になつたからであつた。

裁判の進行中に分明した一切の事によつて考へて見ても、又ネクリュウドフがマスロオワを知つてゐる限りの事によつて考へて見ても、彼女には毒殺の罪も竊盜の罪もあらうとは何うしても思はれなかつた、それでネクリュウドフは誰もそれは充分飲み込んでゐる事だらうと初めは思つてゐた。ところが商人の辯護はたゞマスロオワが氣に入つたので辯護するらしいことはあり／＼見えてゐたほどで、其の辯護が拙いのに、其處に持つて來て陪審長が反對するのと、又何よりも皆が疲れて來たのとで、マスロオワを有罪にしさうな形勢になつて



来た。それでネクリウッドは反対し度いと思つたが、自分がマスロオワを辯護するのは氣になつた。自分と彼女との關係を直ぐ皆に知られはしないかと恐れた。さうかと云つて其儘にしておくわけには行かない事であつた、どうしても反対せずには置かれぬ場合であつた。顔色を赤くしたり青くしたりして思ひ苦しんだ上、愈決心して云はうとしたら、其時まで黙つてゐたベエテル・デラッシモキッチュが、陪審長の横柄顔が何より小癢に觸つてゐたらしく、急に反対の鋒を向けた、そして丁度ネクリウッドが云はうと思つた事を云ひ出して呉れた。

『私に發言をさせて貰ひます。』と彼は切り出した。『あなた方は彼女が鍵を持つてゐたから盗んだのだと仰しやるが、彼女が行つてしまつた後で、あの二人が贖金で鞆を開ける事は出来なかつたものでせうか。』

『出来ませうとも、出来ませうとも、さうですとも、さうですとも。』と商人は受合つた。

『あの女が金を何の爲めに取りませう、あの女の境涯でそれだけの金を抑も何處に隠して置けるのです。』

『さうです、さうです、私も同一意見です。』と商人は聲援した。

『それよりも寧ろ彼女が金を取りに来たので、これ幸ひと二人の雇人が機會を利用して、あ

とで一切の罪を彼女になすり付けたと観る方が、遙かに穩當ではありませんまいか。』

ベエテル・デラッシモキッチュは激した語調で云つた。それで陪審長も亦自づと激して、反対意見を頑固に執拗に主張した。しかしベエテル・デラッシモキッチュは何うしても夫れ以外には思はれないといふ確信を以て云つてゐるので、陪審員の大多數も次第に彼に賛意を表し、金と指環を盗む事にマスロオワが與つてゐない事、指環は商人スメルコフに貰つたものである事を認めるやうになつた。次にマスロオワが毒殺に與つて有罪であるか否かといふ點に移ると、彼女の熱心な性急な辯護人たる商人は、彼女にはスメルコフを毒殺する意志はなかつたのであるから無罪の宣告を下さなければならぬと再び力説した。しかし陪審長は、スメルコフに粉末劑を混じて飲ましたと彼女自身で白状した以上は、彼女を無罪放免にするわけには行かないと云つた。

『でもあの女がそれを飲ましたのは、たゞ睡眠劑の阿片だと思つて飲ましたんですよ。』と商人は云つた。

『阿片でだつて其男を殺せた筈ですとも。』と云つて、よく脱線したがる大佐は、自分の義理の兄の妻が阿片の毒に中つて危く一命を落す所だつたが、幸ひ近所に醫者が居て直ぐ馳せつけて手當てをして呉れたので幸と助かつたといふ長々しい話をした。大佐の話し方は感動を



強ひるやうな自慢さうな調子だったので、誰も其話の腰を折らうとする者はなかつた。たゞ店員は大佐の例に感染して、これ亦自分の話をやり出さうとした。

「しかし習慣になると四十滴飲んでも何ともない者も随分ありますよ。私の親戚の一人などは……。」

だが大佐はそれに遮られずに、自分の義理の妻に就いて阿片の作用した次第を尙ほ語り續けた。

「ですが、もう五時ですよ、皆さん。」と一人は注意した。

「あ、さうですね。それでは皆さん、」と陪審長は一同に向ひ、「それでは我々はマスロオワを有罪とはしませう、併し窃盜の意志はなかつた、そして又實際盗みもしなかつたとしてね。これでいゝでせうか？」

ベエテル・ゲラッシモキッチは自分が勝つたので、さも嬉しさうに賛成した。

「ですが何うか情狀を酌量して貰ふと云ふ事にしてですよ。」と商人は付け加へた。

皆はそれで一致したが、たゞ労働組合員のみは飽くまでも云ひ張つた。「いや、無罪です、無罪です。」

「なあに、つまり斯うなるぢやありませんか。」と陪審長は説明した、「竊盜の意志はなかつ

た、そして又實際盗みもしなかつたとすればですね、それは畢竟無罪といふ事になるぢやありませんか。」

「そして餘の部分即ち最後の部分に就いては、どうか情狀を酌量して貰ふと云ふ事にしてです。」と商人も満足げに念を押した。

誰も皆辯論の爲めに疲れてゐた、それで「殺害ノ意志ナク」と付け加ふべき事を誰も思ひ付かなかつた。

ネクリュウドフは昂奮してゐて亦それに氣付かなかつた。

で諮問の個條書きは右の通りな評議の結果の答を附せられて法廷へ廻送された。

佛蘭西のラブレエの書いたものに、嘗て或る訴訟の敵味方が共に或る一人の法律家の許に訴へて行つたら、その法律家はあらゆる規則を引つ張り出したり小六ヶ敷い馬鹿臭い羅句文を二十頁程も読んで聞かしたりした揚句、骰子を振つて偶數が出るか奇數が出るかを試みさせた、そして若し偶數が出たら原告が正、奇數が出れば被告が正と云ひ渡したといふ話が載つてゐる。

今この場合が亦それであつた。前述の判決が出来上つて、それと異つた判決が出来上らなかつたのは、決して前述のが正で然らざるものが不正だからではなかつた。一同が一致した



から前述の判決が出来たのではなく、裁判長がいつも附加へる注意事項の一つを今度は長い事相概説の後に打忘れたからであつた、即ち陪審員は諮問に答へて評定の次第により「有罪トハ認ムルモ、殺害ノ意志ハ之ヲ認メズ」と書いてもよいとの注意を裁判長が省略したからであつた、次には大佐が自分の義理の兄の嫁の話の長たらしく喋り続けたからであつた、第三にはネクリウッドフが餘りに昂奮し過ぎてゐて「有罪トハ認ムルモ、殺害ノ意志ヲ認メズ」の脱落に気が付かず、「窃盗ノ意志ナク」の附加を以てはや告訴の全部を否定したものと早飲み込みをしてしまつたからであつた、第四には丁度其時ベエテル・ダラッシュモキッチュが一寸室を出てゐたからであつた。彼は陪審長が諮問個條書きと其答へとを後で読み上げる時に室に居なかつたのである。それから第五には皆が倦み疲れてゐて成るだけ早く外に出たいと思つて居り、随つて成るだけ事が早く済みさうに思はれる意見に賛成したからであつた、そしてこれが最も大きな原因であつた。

陪審員達は鈴を鳴らした。劍を抜いて尖を肩に當て、入口の前に立つてゐた憲兵は其劍を鞘に納めて脇へ退いた。裁判官等は再び席に着いた。陪審員達も順々に評議室から出て來た。陪審長は鹿爪らしい顔付をして諮問個條書きを持つて來て、裁判長の前に進み出で夫れを手渡しした。裁判長は「わたり、夫れに目を通して見たが、さも愕いたらしい様子で左右の判

事に何やら相談するらしかつた。裁判長は陪審員等が「窃盗ノ意志ナク」といふ附け加へをして置きながら、肝腎な「殺害ノ意志ナク」を附け加へなかつたのに愕いたのである。陪審員等の評決によれば、マスロオワは盗みはしなかつたが、何等の目的もなく人を毒殺したといふ事になるのであつた。

「ね、どうです、何といふ馬鹿な事をしたもんでせう。」と裁判長は左側の判事に云つた。「これぢやあ懲役ですよ、所で彼女は無罪なんですからね。」

「何、何ですつて、無罪ですと？」と氣六ヶ敷屋の判事は尋ねた。

「えい、さうですとも、分りきつてゐますよ、無罪ですよ。私の意見ではこれは第八百十八條を適用す可きですね、陪審員の評決を法廷に於て不當と認めたる時は法廷は之を破棄する事を得といふ、あの條文に當て嵌めるがいと思ひますね。——君は何う思ひます。」と裁判長は柔和な顔の判事に向き直つて尋ねた。

「私もそれがいと思ひます。」

「それで、君は？」と裁判長は意地悪屋の判事に尋ねた。

「斷じて不賛成です。」と意地悪屋はきつぱり答へた。「さうでなくても新聞はいつも陪審員が罪人を放免すると云つて悪口してゐるぢやありませんか、だのに今法廷自身がそんな事を



したら世間は何と云ふでせう。私は賛成出来ません、断じて出来ません。』

裁判長は時計を見た。『氣の毒だなあ。だが何うすればいゝんだか。』そして裁判長は又諮問個條書きを陪審長に渡して読み上げさせた。

一同起立した。陪審長はからだの重みを片方の足に托してみたり、又他方のに托してみたり、咳拂ひをしたりして、そして諮問の條項と其答へとを一々順々に読み上げた。書記も辯護士も又副検事さへも、今法廷に居る凡ての者は愕きの色を顔に浮べた。

被告は三人共ば、かんとして腰かけてゐた、諮問の答が何を意味するか彼等には分らないらしかつた。朗讀が済むと一同席についた、そして裁判長は副検事に何れの刑を求めんか尋ねた。

副検事はマスロオワに就いて思ひ掛けない勝利を得たので、それも自分の雄辯の爲めだと信じて意氣揚々として卓上の或る本を開き、立上つて、

『シモン・カルティンキンは刑法第一千四百五十二條及び一千四百五十三條により、オイフェミア・ポオチュコワは刑法第一千六百五十九條により、カタリイナ・マスロオワは刑法第一千四百五十四條によつて刑に處すべき事を請求します。』

いづれも皆課せられ得べき刑の最も重きものに問うたのである。

『法廷は右の判決を議する爲めに暫時別室に赴きます。』と云つて裁判長は立上つた。

裁判長に續いて皆立上り、一廉の立派な仕事を仕遂げて氣が軽く清々したと云ふやうな心持で室を出る者もあり、室内を彼方此方と往つたり來たりする者もあつた。

『どうです、あなた、我々は何うも、へまな手ぬかりをやりましたね。』と云つてベエテル・ダラッシモキッチュは、丁度その時陪審長と何やら話してゐたネクリュウドフの傍へ寄つて來た。

『懲役を課したんですからね。』

『何ですつて？』とネクリュウドフは今は學校教師の馴れ馴れしげな打寛いだやうな所を不愉快になど感ずるでなく、愕いて尋ねた。

『なあに、何ですつてもありませんよ。我々はあの諮問書の答に「粉末劑ヲ飲マセシ事實ハ之ヲ認ムルモ、殺害ノ意志アリシモノトハ認メズ」と附け足す可きを忘れたんですからね。それで今書記が私に云ひますには、副検事は十五年の懲役を課するさうですよ。』

『えゝ、さうです、今さう決定しました。』と陪審長は云つた。

そこでベエテル・ダラッシモキッチュは陪審長を難じた。彼女に金を盗む意志がなかつたと決定したからには、殺害の意志も無かつた事は云はなくても分りきつてゐるではないか、だのに何故それを記入して置かなかつたかと詰つた。



「だからさ、我々が評議を終つて出て行く前に、私は答を一通り読み上げたぢやありませんか。」と陪審長は辯解した。「読み上げたが、誰も異議を唱へなかつたぢやありませんか。」

「その時は私は一寸室を出てゐたんだが、」とベエテル・デラッシモキッチュは、「それにしても、あなたは何うして夫れを忘れてゐたんです。」

「私は其點をちつとも考へてゐなかつたのですから。」とネクリュウドフは答へた。

「ふん、矢つ張しあなたもうっかりしてゐたんですか。」

「だが、どうかして修正が出来さうなものですな。」とネクリュウドフは云つた。

「さあ、駄目でせうね、もう後の祭りですよ。」

ネクリュウドフは被告等の方を見やつた。自分達の運命が今きまつたとは知るか知らぬか、矢張り同じく身動きもせず手摺の彼方に憲兵の前に腰かけてゐた。マスロオワは誰を見ても一寸軽く笑つた。ネクリュウドフの心には又もや不快な思ひが動いた。彼女が無罪の云ひ渡しを受けて直ぐ様放免されるであらうと期待してゐた先程までは、彼は今後彼女に對して何ういふ處置を取らうかしらと迷つてゐた、又それは容易くきめられる事ではなかつた。が今懲役とか西比利亞追放とかいふ言葉を聞くと、もはや彼女との何等の交渉も急に不可能になるのであつた。傷を受けてまだ死にきれずに獵袋の中で苦しんでゐる鳥は、今後永久に腕

き狂うて外へ出ようとするであらう、そして永久に其苦しみを忘れないであらう。

## 二四

ベエテル・デラッシモキッチュの云つた通りであつた。裁判官一同が評議から戻つて來ると、裁判長は一枚の紙を展ひらげて讀み上げた。

「皇帝陛下ノ命ヲ奉ジ

一千八百何年四月二十八日、N州區裁判所刑事部ハ陪審員諸氏ノ評決ヲ俟ツテ、刑事訴訟法第七百七十一條、第七百七十六條、第七百七十七條ノ條文ニ基キ、百姓シモン・カルティン・キン三十四歳及ビ町人ノ娘カタリイナ・マスロオワ二十七歳ノ一切ノ公權ヲ剝奪シ、之ヲ西比利亞ニ送致シ懲役ニ服セシムベキ事ヲ判決ス。カルティンキン刑期八年、マスロオワ刑期四年、共ニ刑法第二十五條ノ規定ニ從フ可キモノトス。

百姓ノ娘オノフ・ミア・ゴスチ、ニワ四十三歳ニ對シテハ刑法第四十九條ノ規定ニ基キ之ガ一切ノ公權ヲ剝奪シ之ヲ三年ノ禁錮ニ處ス。裁判ノ費用ハ被告三名ニ於テ等分ニ負擔スベキ事、若シ被告ニ其能力ナキ時ハ之ヲ國庫ノ支辨トス。

證據物件ハ之ヲ公賣ニ附シ、指環ハ之ヲ所有者ニ返還シ、試験用玻璃器ハ之ヲ破碎スベキ



カルティンキンはからだを少し前へ屈めて立ち、手の指は一ばいに擴げたまゝ、兩股の外側に當て、頬の下部をびりびりと動かしてゐた。

ポオチュコワは飽くまでも落ち着き拂つて黙つてゐた。

しかしマスロオワは判決を聞くと満面に朱を濺いだ。「私は罪はありません、罪はありません。」と矢庭に室内一ばいに響き渡る聲を揚げて叫んだ。「この男が爲た事です、私は罪はありません。私はそんな事しようと思ひませんでした、考へてもみませんでした。私は嘘は申して居りません、嘘は申して居りません。」

そして彼女は腰掛の上に泣き崩れた、聲も惜まず泣きじやくつた。カルティンキンとポオチュコワは外へ引かれて行つたが、マスロオワはまだ腰掛の上で泣いた、餘儀なく憲兵は彼女の獄衣の袖を引つばらなければならなかつた。

「いや、これを此儘にしておけるものか。」と獨語しながら、ネクリュウドフは前の不愉快はすつかり忘れてしまひ、自分ながら何故とは分らず今一度彼女を見ようと思つて急いで廊下の方へ出て行かうとした。戸口の所は人が一ばいで、こんでゐた、事が終つたので愉快さうな顔をしてゐる辯護士や陪審員等も見受けられた。それで彼は戸口際に一二分立止らねばなら

なかつた。そしてやつと廊下に出てみると、はやマスロオワはすつと向うに行つてしまつてゐた。彼は大意に急ぎ、平常の取澄ましたやうな萬事飲み込んだやうな調子はすつかり忘れて彼女の方へ益々足を早め、やつと追つ付いて立止つた。

彼女はもはや泣くのは止めてゐたが、たゞ時々歎<sup>う</sup>げた。赤くなつた顔を彼女は頭の布片の端で拭いた。そして彼女は彼には氣も付かずに行つてしまつた。ネクリュウドフは急いで取つて返して裁判長を探した。裁判長は疾<sup>く</sup>に法廷を出たが、その脱帽室に來てゐる所でネクリュウドフは追つついた。

「裁判長殿。」とネクリュウドフは丁度裁判長が明るい色の外套を引つかけ銀金具の頭のついたステッキを玄關番に渡されてゐる所に急いで行つて、「只今判決になつた事件に就いて一寸あなたと御話がし度いと思ひますが、私は陪審員の一人です。」

「あ、ネクリュウドフ公爵でしたか。どうか御遠慮なく。以前にもお目にかかつた事がありましたね。」と云つて裁判長は彼に握手した。彼は嘗てネクリュウドフに始めて會つた或る夜會の時、ネクリュウドフが他の誰より上手に愉快さうに舞踏した事を今も心地よげに思ひ出した。「で、お話と云ふと？」

「あのマスロオワに就ての諮問書の答には間違があるんです。あの女に毒殺の罪はありません。」



一七二  
ん、それだのに懲役の宣告を受けたのです。」とネクリュウドフは緊張した真剣な顔で云つた。  
『裁判所はあなた方御自身の與へた答に基いてあの判決を下したのですよ。』と裁判長は出口の方へ行きながら云つた。『裁判所側の意見でもあの答は事件の真相に適合しないと思つたんですがね。』

裁判長は自分の失念をも思ひ出した。陪審員達があの答書に『事實ヲ認ム』と書いて殺害の意志を否定して置かないならば、それでは殺害の罪を肯定する事になる由を彼は豫め陪審員達に云はうと思ひながら、早く事を済まさうと急いだために、云ひ落してしまつたのであつた。

『さうでした、我々陪審員の手ぬかりでした。しかし何うかして修正は出来ないんですか。』  
『破毀の理由はありますよ。辯護士に頼むですね。』さう云つて裁判長は帽子を少し斜に被り、ますます出口に近く行つた。

『怖ろしい事です。』

『御承知でもありませんが、あのマスロオワには運命が二通りあるきりなんです。』と云つて彼はネクリュウドフに出来るだけ丁寧に親切にしようと思つた。外套の襟の外へ左右の頬髯を揃へやつて、ネクリュウドフと腕を組み可く自分の片腕を差し延べ、そして戸口より出か

けた。『あなたも矢張りこれからお出になるんでせう。』

『さうです。』と答へてネクリュウドフは急いで外套を着け、裁判長と一緒に明るい爽やかな日の光のある通りに出た。往來の敷石の上を行く馬車の音などの騒々しいので、二人は一段と高い聲で話さねばならなかつた。

『御承知の通り此の事件は一種特殊な性質がありましたね。』と裁判長は聲を張り上げ、『あのマスロオワには二通りより外には處分が出来ないんです、一つは放免もほゞ同様な禁錮で、それには今迄の拘留も計算の中に入れて差引かれる事の出来るものです、それともほんの一時の拘留ですね、——併しさういふ刑でないとすれば、それなら仕方ありません、懲役です。中間位の刑は此の事には適用出来ないんです。ですからあなた方が、『殺害ノ意志ナク』とただ夫れだけ附加へて居さへすれば、もうそれで放免になつてた筈なんですがね。』

『それを書き落したなんて、本當に言語道斷でした。』とネクリュウドフは嘆息した。  
『それで事があんなになつたのです。』と裁判長は微笑を湛へて云ひ乍ら時計を取り出して見た。情人のクララに云つてやつた最後の時刻までに、はや四十五分しかなかつたのである。  
『ですから今はあなたがあの判決を撤回ささうといふお考なら、辯護士にお頼みなさい、そして破毀の口實を揃へなくちやなりません、そんな口實なんかいつだつて直ぐ見付かるもの



ですよ。——おい、ド・ブリアンスカ町までだ。」と裁判長は一人の馬車屋を呼んだ。「三十コ  
ベエケンだぞ、夫れ以上はやらないよ。」

「ようがす、お召しなせえまし、旦那。」

「ぢやあ御免下さい、ネクリウッド公爵。又若し私に何か御用がお有りでしたら、——。  
ド・ブリアンスカ町のド・ブルニコフの家だぞ。直ぐ分るよ。」

そして裁判長は丁寧に辭儀して馬車に打乗ると直ぐ分れて行つてしまつた。

二五

裁判長と話を交へた爲めに、又清新な空気を吸つた爲めに、ネクリウッドは氣持が幾ら  
か落着いた。彼は今しがたの自分の感情は餘りに平常に變つた事件に逢つたために過度に  
誇張されてゐたのだと思つた。

「全く思ひがけない不思議な邂逅であつた。どんな事しても彼女の災難を取除いてやらな  
くちやいけない、直ぐさうしてやらなくちや、直ぐだ。さうだ、自分は裁判所へ行かう、フ  
ナアリンとミキイシンが居る。」と彼は名高い辯護士二人の名を思ひ出した。二人の中の何方  
かに彼は事件を頼まうと思つたのである。

ネクリウッドは裁判所に取つてかへし、外套を脱いで直ぐ上へ昇つて行つた。すると直  
ぐ始めの廊下で彼はフナアリンに會つた。彼は呼び止めて少し話を聞いて貰ひ度い事があ  
ると云つた。フナアリンはネクリウッドが地位も高く名前も聞えてゐるのでよく知つて  
ゐた。で直ぐ親切な様子を見せて御用件を承りませうと云つた。

「少し疲れてはゐますけれど……長い時間かゝりませんければ、どうぞ御用件を仰しやつて  
下さい。こちらへおはひり下さいませんか。」

フナアリンは判事の一人の室らしいのにネクリウッドを案内した。そして卓を挟んで二  
人は腰かけた。

「それで、どういふ御用件で？」

「前以て私はお願いしておかなければなりません。」とネクリウッドは云つた。「私がお頼み  
致します事件について、誰にも其事をお洩し下さらないように。」

「え、え、それはもう勿論の事でございます。」

「私は今日は陪審員でしたが、ある無罪の女に我々一同で有罪の判決を下したのです。それ  
が私には何うも残酷で怖ろしくて堪らないんです。」

ネクリウッドは急に顔を赤めて厭な思をしながら妙に少しどぎまぎした。フナアリンは



ちらと彼に一瞥を投げたが直ぐ又下を向いた。

『それで?』と彼は尋ねた。

『罪のない女が有罪の判決を受けたのです、それで私は其判決を破毀し度いと思ふのです、そして大審院に控訴し度いと思ふのです。』

『元老院にですぬ。』とフナアリンは訂正してやつた。

『それで私は之をあなたに引受けて貰ひ度いと思ひまして。』

ネクリュウドフは面白くない厭な面倒な事は出来るだけ早く済ましてしまひ度いと思つて直ぐ附け加へて云つた。

『報酬其他の費用は如何程になつても私が一切引受けますから。』さう云つて又彼は顔を赤くした。

『その事はいづれ御協議致しませうが、』と辯護士はネクリュウドフが未だ少しも訴訟事件に慣れてゐないのに同情するやうな微笑を浮べながら、『一體どういふ事なんです。』

ネクリュウドフは事の次第を話した。

『よろしうございます、明日私は書類を取り寄せませう、そしてつと目を通してみます、そして明後日、いや木曜日の六時にお出下さい、すると私何とか御相談致しませう。あなた

の方はそれで御都合およろしいんですか。ぢやあ其日どうぞ御來宅をお待ちします。今日は私まだ少々訊問の事件があるものですから。』

ネクリュウドフは別れを告げて出て行つた。

辯護士に相談をしたといふ事と、既にマスコオワを保護する爲めに手段を講じたといふ意識とで、ネクリュウドフの心は尙ほ一層穩かになつた。往來に出ると非常にいゝ天氣であつた、春の空氣を彼は心地好さうに吸つた。馬車屋はいくらも彼に乗れと勧めたが、彼はてくてく歩いて行つた。カテウシヤに關する様々な考や思出や、又自分が彼女に對して爲した事などが、彼の頭には渦をなして漲つて來た。すると妙に悲痛な氣持になつて、一切萬事が彼には憂鬱な光の中に漂うてゐるやうに見えた。「あとで考へよう。今は少し氣を晴らさなくちや、そして陰鬱な印象を振り落さなくちや。」と彼は一人呟いた。

彼はコルチャアギン公爵家での今日の晝食の事を思つて時計を出してみた。まだ餘り遅くはなかつたので、間に合ふやうに行けない事はなかつた。折から軌道馬車が前を通りかゝつたので彼は走つて追ひ着いて、ひらりと飛び乗つた。少し行つてから夫れを下りて馬車を雇ひ、十分許り後には宏大なコルチャアギン家の正面玄関に着いた。



「さ、どうぞおはひり下さいまし、閣下。皆様がお待ちかねでござります。』體格の立派な深切さうな玄關番は、英國製の蝶紋<sup>てつもん</sup>で音なく動く正面玄關の柏の扉を手早く開けながらさう云つた。『もう御食事は始まつて居ります、そしてたゞ閣下だけをお通し申すようにと申し付かつて居ります。』

そして玄關番は階段の傍へ行つて、來客を傳へる電鈴を押した。

『誰か來てゐますかね。』とネクリュウドフは外套を脱ぎながら尋ねた。

『コロソフ様にミハエル・セルゲイエキツチュ様に、それから御當家の御方々でござります。』階段の上からはフロックを着て白い手袋を穿めたハイカラな給仕がちらりと下の方を見た。

『どうぞ、閣下、おはひり下さいまし。』と給仕は云つた。『直ぐおはひり下さいますやうに、さう申上げるやうに申し付かつて居ります。』

ネクリュウドフは階段を上り、お馴染の壯麗な大廣間を抜けて食堂に行つた。食堂には老公爵夫人のソフィア・ワッシリエフナを除いて餘は一家族皆食卓に着いてゐた。老公爵夫人は

今は自分の部屋からは一寸も出ない身であつた。上席には其夫のコルチャアギン老公爵、その左に抱への醫者、それから客のイワン・イワノオキツチュと云つて、以前は或る地方の貴族頭であつたが今は銀行取締役の一人でコルチャアギン老公爵と同じ自由黨員としての友人。斜に隣つてミッシイの妹の家庭教師ミス・レエデル、その次が今年四歳になる其妹當人。公爵の右隣にはミッシイの弟で此家の唯一人の男の子、名はベエテルだがいつもベティヤとかベエテルヘンとか呼ばれて一家の自慢の種にされてゐる高等學校の第六級生で、その試験を濟まさせる爲めに此一家は此町に残つてゐる位の秘藏息子、それから其ベティヤの試験準備の補助役たる大學生。なほ又左側で此家の親戚のカタリイナ・アレキセイエフナと云ふ熱烈な國粹保存主義の四十歳の老嬢、それと斜に隣り合つてミハエル・セルゲイエキツチュ・テリエギン、これはミッシイの従弟で、普通ミッシヤと呼ばれてゐる。食卓の下手の端にミッシイが着き、その隣になほ一つ空席が設けてあつた。

『やあ、これはよかつた、さあ、どうぞお着きなさい。今やつと魚の所ですよ。』と老コルチャアギンは其の悪い齒で用心しいしい太儀さうに嘯みながら云つた。そして赤味走つた目をネクリュウドフの方へ向けた。

『ステパン。』と老コルチャアギンは又大口をあいて、慎ましやかな、肥太つた執事に呼びかけ



空席の方を目で指さした。ネクリュウドフは勿論老コルチャアギンをよく知つて居り、又食事の席で一緒になつた事も度々あるが、今日はその胴衣の上にナフキンを張つて、その上からによきつと出してゐる意地の汚らしい肉感的な脰を有つた赤ら顔や、脂ぎつた首筋や、殊に其たらふく飲み食ひして太つてゐる全身の武官姿などを取分け厭で厭で堪らなく思つた。

「直様差上げますでござります。」と答へてステパンは銀の食器類の澤山入つてゐる食器棚から大きいスウプの匙を一つ出しながら、頬髯のある飾し屋の給仕に目配せした。給仕は直ぐミッシイの隣の空席をきちんと直した、そこには此家の紋の刺繍をした部分が出るやうに巧みに花の形に折つたナフキンが載せてあつた。

ネクリュウドフは食卓の周囲を廻りながら、順々に握手をした。老コルチャアギンと女達の外は彼が傍に来ると皆立上つて手を差し延べた。その際は彼は誰とも一語をも交はしはしなかつたけれども、そんな事をするのが今日は彼には特別に不愉快であり滑稽であつた。彼は遅くなつた詫びを云つてから、ミッシイの隣で老嬢の横の空席に着かうとすると、老コルチャアギンは彼に、ブランデエを飲まなくともサクウスカを先きにしてからがよいと強ひて勧め、蟹だの鮭だの乾酪だの鹽魚だのブランデエの壘などが載せてある別の食卓の方を指し示した。

ネクリュウドフは自分の腹の空いてゐる事を知らずにゐたが、パンに乾酪を添へて食つてみると、幾ら食つても足りないのを覺えた。

「時に如何でした。根柢からひつくり返したんですか。」とコロソフは陪審制度に反対な反動主義の新聞の慣用文句を反対な意味で引つ張り出して尋ねた。「有罪者を放免にし無罪の者に有罪の判決をしたんですか、え？ さうなんですか。」

「根柢からひつくり返すんですか、はは、根柢からひつくり返すんですか。」と老公爵は打笑つて繰返した、彼は同じ自由黨員で親友たるコロソフの學問のある事には十二分の信用を置いてゐるのであつた。

失禮に當つても仕方がないと思つてネクリュウドフは何とも答へず、その時給仕が運んで來た湯氣の立つてゐるスウプの前に腰かけて、引續いて口を働かした。

「此人にはどうか食べさせておいて下さいませよ。」とミッシイは笑ひ乍ら云つた、此人といふ言葉は彼女がそれで自分と彼との特別に親しい仲である所以を意味させたものらしかつた。

その間にコロソフは陪審制度に反対な其新聞の論説の内容を高い聲で盛んに説明した、自分は夫れに非常に不賛成な由を云ひ足した。公爵の甥で大學生たるミハエル・セルゲイエ



キツチュも切りにコロソフの説に賛成し、なほ同じ新聞に出てゐた他の或る論説を説明したりした。

ミッシイはいつもの通り極く巧みな、真似の出来ないやうな化粧をして、又けばけばしく目立ちはしないが非常に上品な美しい衣裳をつけてゐた。

「あなたよつぽどお疲れでしたのねえ、それにお腹がおすきになつてたと見えますわねえ。」と彼女はネクリュウドフに云つて、それでネクリュウドフがナイフやフォークを置くのを心待ちに待つた。

「いえ、格別ぢやありません。それはさうと、あなた方は繪畫展覽會にはお出でましたか。」  
「いえ、延ばしましたの。その代りにサラマトフさんの御宅でテニスをやりましたよ。クロオクさんは本當にそれはお上手なのよ。」

ネクリュウドフは氣を紛らす爲めに來たのであつた。そしていつも今迄は此家に来ると好い氣持になつてゐたのである、それは管に贅澤の限りを盡した此家の生活が彼にも愉快であつたから許りでなく、目に見えず夫れとも分らず彼を柔かに包む好意と温情の空氣が感ぜられるからであつた。それが今日は彼自身にも愕かれる位に此家が彼には不愉快で嫌惡の種であつた、一切がさうであつた、最初の玄關番からして氣にくはなかつた、廣い階段も、草

花の飾りも、執事やら給仕やらも、膳立の出來た食卓も、又ミッシイ其人さへも今日は彼には少しの魅力をも有たなかつた、寧ろ不自然に見えた。コロソフの獨合點めいた愚にもつかない穩健振つた調子も、老コルチャアギンの肉的な様子恰好や物云ひ其他も忌々しい不自然なものに見えた。國粹保存主義の老嬢カタリイナ・アレキセイエフナが佛蘭西語の種々な慣用文句を得たり賢しと弄ぶのも、女家庭教師や試験準備補助役の大學生やが慎しやかな恰好をしてゐるのも、皆彼には不愉快の本であつた、ミッシイが彼の事を「この人」と云つたのは取分け厭で厭で仕方がなかつた。

ネクリュウドフはミッシイに對するといつても二様の心持を覚えてゐた。時としては彼は十分目を開けないで、若しくは月の光に透かして見るやうな心持で彼女に對してゐた、すると彼女の一切が彼には美しい清々しい氣の利いた落着のあるものとのみ見えた。又時によると明るい日の光の下に曝して彼女を見るやうな心持の時もあつた、そんな時は彼女の缺點のみが、といふよりも彼女には缺點のみが集つてゐるやうにしか見えなかつた。今日は彼は此の後の心持で彼女を見るのであつた。彼女の顔の皺が残らず目についた、又彼女の髪が辛つとの事に卷いてあるのも際立つた、臂のごつごつしてゐるのも見えた、殊に彼女の指の爪の幅の廣いのが目に着いた、それを見るとネクリュウドフは直ぐ彼女の父が同じ爪を持つてゐる



事を思ひ出さずにはゐられなかつた。

「つまらない事此上なしぢやありませんか、テニスなんて。」とコロソフは云つた。「毬投げの方がよつぽど愉快ですよ、よく我々が青年の時やつたものですが。」

「あなたは未だテニスをおやりになつた事ありませんのね、そりや面白い事此上なしよ。」とミッシイは云つたが、その「此上なし」といふ語がネクリウッドフには又妙に不自然な不調和なものに聞えた。

それから議論の花が咲き、ミッシイの従弟のミッシヤ・テリエギンも國粹保存主義のカタリイナ・アレキセイエフナも加はつた。女家庭教師と試験準備補助役と子供達とだけが加はらないで黙つて退屈さうにしてゐた。

「よく議論をするもんだ。」と老公爵は高聲に笑ひながら云つて、ナフキンを取り除け、椅子をごとごと音させて後ろへ押しやり——その椅子は給仕が直ぐ握つた——そして食卓から立上つた。あとの者も皆引續いて立上つて、老コルチャアギンに續いて別な卓の方へ行つた、そこには含嗽碗（うがひ）が澤山載せてあつて、どれにも香氣を入れた微温湯がついであつた。そして一同氣乗もしないで無駄咄（うた）をしながら口を嗽（うが）いだ。

「ね、あなた、さうぢやなくつて？」とミッシイは自分の意見を是認して貰ふためにネクリ

ウッドフに話しかけた。「人間の本當の性質を見別けるのに遊戯位の適當なものはありませんわね。」そして彼女は彼の顔に、何だか是認しないらしい何だか考へ込んでゐるらしい表情を讀んだ、そんな顔色を彼に見る事は彼女の非常に恐れてゐる所であつて、何とかしてそんな顔色の原因を知り度いと思つた。

「それは私知りませんね、一度もまだ考へてみた事ありませんし。」とネクリウッドフは答へた。

「あなた、母の所へ行らつしやらない？」とミッシイは尋ねた。

「えゝ、行きませう。」と卷頁を出しながら答へはしたが、本當は行かない方がよつぽどましだといふ調子があり、ありと出た。

彼女は黙つて彼を見た、何か問ひ度げな様子をして彼を見た。彼は少しどぎまぎした。「自分分は人の氣持を不愉快にする爲めに來たのかしら、いけない、いけない、これではいけない。」と彼は考へついて、今少し愛想よくしようと思つた。それで今日公爵夫人が客に會ふのなら彼は悦んで挨拶に行きたいと云つた。

「えゝ、えゝ、そりや母は悦びますわ。あなた母の室でお召召し上つてもいゝ事よ。イワシ・イワノオキッチュさんも行つてらしてよ。」



公爵夫人ソフィア・ワッシリエフナは絶えず床に就いてゐる病人であつた。笹縁やレエスやリボンや房や紐で飾をつけた着物の中に埋もれて、天鵞絨だの金着せの家具だの象牙の飾り物だの繪だの額だので一ぱいになつてゐる部屋の中に、彼女は八年以來寝てゐるのであつて、其間に一度も外に出て行つた事なく、自分で「自分の友達」としてゐる若干の人達に其室で會ふだけであつた。その友達といふのは彼女の考へてゐる所では、何か優れた所があつて一般の者よりはすつと上に出てゐるといふ種類の人であつた。ネクリュウドフも所謂彼女の友達の一人であつた、それは彼が立派な頭腦を持った才氣ある青年紳士だからといふわけでもあり、彼の母が此の公爵家と非常に近く親しく交際したからでもあり、又彼とミッシイとの結婚が成立するとすれば夫れは誰しも悦ぶ所でありミッシイの母親たる彼女にも愉快な事であるからでもあつた。

公爵夫人の室は大客室と小客室との彼方にあつた。ネクリュウドフの先きに立つて行つてゐたミッシイは大客室に來ると急に立止り、錦を着せた椅子の凭れに手をやつて、きつとして彼の顔を見た。ミッシイは非常に結婚を望んでゐた、そしてネクリュウドフは其の好い相手であつた。彼は彼女の氣に入つてゐた。此人は私の所有になるにきまつてゐる、私は此人の云ひなり次第にはならないけれど、此人は私の自由になるにきまつてゐる、といふ考は彼女

が疾つくより持つてゐたもので、又ちやんと自分できめてゐたものであつた。そして精神病患者によくあるやうな執拗な無意識な狡猾な拔目なまで、彼女は其目的を達しようと思つてゐた。今彼女は彼に何とか腹を打明けさせ度いと思つて話しかけた。

「あなたは何かしていらつしやるのね。どうなすつたの？」

彼は裁判の事を思ひ出した、そして一寸顔を曇らしたが又赤くなつた。

「え、さうです、今日は少し或事があつたのです。」彼は嘘は云ふまいと思つた。「ある非常な事がありました、淺間しい事が、併し重大な事だつたのです。」

「どんな事なの？ それをあなたは私に仰しやれない？」

「今はまだ出来ません、何とも云はせずにおいて下さい、まだ篤と考へてみてもゐないのですから。」さう云つて彼は尙ほ一層顔を赤くした。

「それを私に仰しやるのがお厭なのね？」と云つた彼女の顔の筋肉はびりびりと動いた、そして彼女は半ば靠りかゝつてゐた椅子をついと押しやつた。

「いえ、それは云へません。」と答へて彼は、其答が亦自分自身に對する答でもあつた事を感じた。即ち彼に取つて實際重大な事件が持上つたといふ事を、彼は今自分に對して白状したのであつた。



「さう、ちやあ行きませう。」

彼女はついと頭を上げた、餘計な考へ事なんか振り離してしまはうといふやうな恰好であつた。そして前より足を早めて先きに立つて行つた。

彼には、彼女が涙を落すまい爲めに唇をひりひりと噛み緊めたかのやうに見えた。彼は自分が悪かつたやうに感じた、そして彼女に對して氣の毒にも思つた、彼女に話すのを拒んだのを濟まないとも思つた、併し又此際彼女に對して若し少しでも弱々しい心を持つてゐたら何うなるか分らない、それで彼女に自由を奪はれてしまふかも知れないと思つた、そして彼女に自由を奪はれる事を彼は此時今迄にない位恐れた。黙つて彼は彼女と一緒に公爵夫人の室に入つた。

二七

公爵夫人ソフィア・ワッシリエフナは丁度今贅澤な滋養物づくめの晝食を終つた所であつた。彼女は殺風景な食事などを人に見られるのが厭さに、いつもたゞ一人で食べるのであつた。彼女の寢臺の横には珈琲道具の載つた小さい卓が一つあつた。彼女は巻蓆を吸つてゐた。齒の長い、目の大きく黒い、瘦せぎすな、丈の高い、髪の暗褐色な、いつも若返りたがつてばかりゐる女であつた。

抱へ醫者と彼女との關係は種々な噂を生んだ事があつた。それをネクリュウドフも嘗て聞いた事があつたが、はや疾づくに忘れてゐた。が今彼女の横の肘掛椅子に其醫者が髭をつやつや光らしてきちんと分けて、腰かけてゐるのを見ると、彼は又その噂を思出して、何とも云へない不愉快を覺えた。

公爵夫人の他の側の横にはコロソフが低い彈條入りの椅子にかゝつて、卓上の珈琲を掻きまぜてゐた。卓の上にはリキュウ・グラスが一つ載つてゐた。

ミッシイはネクリュウドフを母の室まで案内して來たが、自分は其處に残らなかつた。「母が又くたびれてあなたを追つばらふやうだつたら私の所にいらつしやいな、ね。」と彼女はネクリュウドフとの間に何事も起つてはゐないといふ事を見せるやうなのんびりした調子で云つた。そして爽かな微笑を浮かべながら音のしない靜かな歩調で敷物の上を踏んで出て行つた。

「おや、ようこそ來らしつたわねえ。今日は。どうぞおかけなさいまし。そして何かお話を聞かして下さいな。」と公爵夫人は常習的な、さも自然らしく見えるやうな、その辭實は極く不自然な微笑を湛へながら話しかけた。その際彼女のよく揃つた長い齒はちらちらと見え



だが、それは殊の外巧妙な入歯で、まるで本物のやうに見えた。「あなたは裁判所からお歸りになつて大へん鬱<sup>ふさ</sup>いでいらつしやるつてね。私もさう思ふわ、優しい感情を持つた者はあんな處に行けば誰だつて厭な氣持がするに相違ありませんからねえ。」

「さうです、全くです。」とネクリュウドフは答へた。「誰でも直ぐ自分の事を……誰でも他人<sup>ひと</sup>を裁判する權利なんて持つてるものではありませんよ。」

「Comme c'est vrai. (全くですわねえ。)」と彼女はさも心の底の底より感嘆したかのやうに云つた。彼女は出来るだけ巧妙なお世辭を使つて話をするのが好きであつた。「それはさうと、あなたのあの繪は何うなさいまして、私非常に興味を持つてゐるんですけれどね。……私こんなからだでないんだと、もう疾<sup>はや</sup>づくに拜見に上つてる所よ。」

「もう私すつかり廢めてしまひました。」とネクリュウドフは膠<sup>ねば</sup>もなく云つた。今は彼は道理のない彼女のお世辭を、彼女が一生懸命で隠してゐる年齢を見分ける位<sup>と</sup>にはつきり底の底まで見抜いてしまつた、それで何うしても愛想よくしてゐる氣分にはなれなかつた。

「まあ、本當に惜い事ねえ。ね、あなた御存じでせう、\*レピン畫伯<sup>レピン</sup>さへ褒めていらつしやるのに、ネクリュウドフさんには立派な畫才がお有りだつて。」と彼女はコロソフの方へ向いて云つた。(\*イリヤ・エフイモオキツチュ・レピン、露國現代の畫家、トルストイの像を描いた事もある。)

「よく恥しげもなく嘘が云へたものだ。」とネクリュウドフは苦々しがつた。

公爵夫人はネクリュウドフは今日は機嫌が悪いから迎も愉快な氣の利いた話などに役立たないと思ふと、相手をコロソフに替へて、新たに舞臺に上つた脚本に就いてコロソフの意見を尋ねた、それはコロソフの意見をさへ聞けばどんな疑問も氷解し、コロソフの一言一句は永久に記念さる可き意味深長のものであるとでも豫め讚美しさうな態度であつた。コロソフは其脚本を非難し、それを機會に藝術一般に就いての自分の意見を述べ立てた。

公爵夫人はコロソフの意見の一々正鵠を得て居る事に感服してしまひ壓服されてしまつたかのやうな表情をして、併し自分はまだ夫れ程高い見地には容易に到り得ないでゐるからと云ふやうな形で其脚本の作家を辯護した。併しそれも直ぐ好い加減にして自分の主張とコロソフの意見の中間位<sup>ちゆうかん</sup>のものを拵<sup>しら</sup>へた。ネクリュウドフは何といふ事もなく、たゞ向うを見てゐたが、今自分の目の前の事には少しも頓着せず<sup>とんちやく</sup>にゐた。

彼は公爵夫人の言葉に耳を留めたりコロソフの云ふのを聞いたりしてみたが、公爵夫人もコロソフも脚本其物<sup>そのもの</sup>については殆ど何等の感興も有つてゐるのでなく、たゞ生理上の要求を満足させる爲めに舌や咽喉の筋肉に食後の運動をさせてゐるに過ぎない事が、先づ何よりも目についた。次に又、稀に酒にあり付いて泥酔した百姓のやうな譯でなく、酒には始終